
狂科学者は常に迷子

Billy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂科学者は常に迷子

【Nコード】

N0688T

【作者名】

Billy

【あらすじ】

とある赤ん坊にある 異常 が宿った。
その赤ん坊は 異常 のせいでマッドサイエンティストに変貌していく。

マッドサイエンティストは世界を狂気の渦に巻き込み処刑される。
そして 異常 のせいでマッドサイエンティストはネギまの世界へと飛ばされていった・・・

初めまして、Billyです。

この作品はマンガオタクの作者が Arcadia のある作品に影響
されて、書き始めたものです。
コンセプトはたった二つのチートからどこまで発展させるかです。
初めての作品で至らない点があると思いますが、ご指導のほどよろ
しくお願いいたします。

第0種禁忌（前書き）

初めまして

この作品の主人公は基本的にマッドサイエンティストなので自分を
含むすべてを実験材料としか見ていません。
なのでさらっとエグイ表現をしますがご了承ください。

第0種禁忌

「マッドサイエンティスト」

俺はこの世界に何の疑いも持たずに生きてきた。

これだけ聞くとゆとり世代によく居る親に甘やかされて生きてきた子供のようなが、

俺のは少し意味が違う。

自分はこの世のどんな問いの答えでも瞬時に分かる「全知」と呼ばれる力があつた。

わかりやすく言うとガツシユのアンサーカードだ。

生まれたときから持っていたため、

小さいときに「みんな持っている。これが普通だ」

と思おうとしていたこともあつたが、無情にも全知は違うという答えを出す。

両親に相談しようと思つても、全知は親に教えたときの親の反応と、その後の欲に駆られた親の行動を見せられ諦めた

そのせいで、幼稚園で一時期ハブられかけたが、

全知を使い、「どうすれば人に不快感を与えずに過ごすか」

を問いながら過ごしたおかげで高校卒業までそれほど目立つことなく過ごせた。

そしてこれがあるから人生がつまらないとか現実感がないとか、そんなことは全くなかつた。

全知は全知に問わなければ答えないし、

さつきも言つたように全知を使いながら過ごしたおかげで、

友達に平均並みにいた。

一時期全知が暴走し、頭に浮かんだ疑問にすべて答えていた時も未

来を知るための退屈感はなかった。

パズルやプラモデルは殆どの人がやったことがあると思う。あれは箱に完成図（結果）が書いてあるし、プラモデルは設計図（途中経過）までであるというのにみんな楽しめる。造ることが楽しいからである。

だから小学校のころは小遣いが無くなるまでプラモデルを買い続けたし、

誕生日やクリスマスのプレゼントは大型のパズルを頼んだ。

中学生に上がると不法投棄されている家電製品などの廃材を使い、小型から中型のロボットを造ったりもした。

造り方と必要な素材の在り処は全知が教えてくれるが、何を造るかまでは全知は答えることができない。

だから何を造るか考えるのは楽しかった。

ガンダムオタクにガンプラを改造したラジコンを八万で売り付けたのはいい思い出だ。

そして高校に上がると株にも手を出し、自分で必要な材料を買えるくらいは稼ぐようになった。

株はほぼ未来予知もできる全知を使い、余裕で月に一千万単位は稼げる。

ゲームでチートを使うやつのが持ちがよくわかる。

親から隠すのには苦労したが、法律に触れるようなことはしなかった。

そしてロボット製作は機械製作に移行し、マンガやアニメにあるアイテムを造るようになった。

ぶっちゃけ物造りのアイデアが尽きたのだ。

その中で最も面白かったのが大学一年の時に造ったエア・ギアのエア・トレックだ。

自分の身体能力は悪いほうではないから、エア・ギアを読む前もローラーブレードにはまっていて日が暮れるまで練習していたし、大体のトリックはキメられるようになってはいた。

全知のおかげで欠点も効率的な練習法もその場で解るから効率がとてもいい。

だからエア・トレックが出来たときも、練習しまくった。

しかし不思議なことがあった。

全知にエア・トレックが出来る前にエア・ギア特有の「空」を使ったりトリックが出来ないか問うと、この世には存在しないという答えが出た。

主人公が手だけで使っていたものさえ無理だという。

それなのにエア・トレックできた途端その情報が更新されたのだ。

これをなぜか全知に聞いたら今まで過ごしてきた世界が根底から崩れさるようなことが判明した。

昔「人間が想像しうることは現実を起こりうる」と言った人がいた。中国には「胡蝶之夢」という言葉がある。

この二つの言葉は哲学的な言葉ではなく、もっと現実的なことばだった。

物語の世界では、現実にはありえないような様々な超常現象があるものや、情熱的な大恋愛がよくある。

しかしそれらはよくあるのではなく、実際にあるのだ。

物語の作者は、ある世界を無意識のうちに覗き見て、それを物語として他者に発信する。

その中にある矛盾は作者がした見間違いや、展開上の脚色に過ぎない。

い。

だからあるのだ。

サイヤ人が地球を守るために宇宙人と戦う世界も、

悪魔の実を食べた少年が海賊として戦う世界も、

四次元ポケットでダメ少年を救う青狸も、

魔法も、超能力も、その他様々な摩訶不思議な現象も全て異世界に存在するのだ。

そしてこの世界も超弩マイナーな少女漫画の世界で流行っているラブコメの一つにすぎない。

それを知り二時間引き籠った。

短いと思った人はいるだろう。

俺もそう思う。

しかしエア・トレックができたおかげで「エア・ギア」特有のトリックが使えるようになったなら、他の漫画の技も何か鍵になるようなものがあるのではないだろうか。その考えに行き着いたためさっさと部屋から出てきたのだ。

エア・トレックは元からこの世界でもできる技術だったのだろう。

大学を中退しその技術の幾つかを特許申請して、莫大に膨らんだ特許料を開発資金に充てる。

他にも幾つもの特許や論文で金を荒稼ぎし始めると、

幾つもの研究所から声がかかっていたが、

自分には研究というものが必要なく、

始まりの疑問と材料さえあれば、

途中式と結果は一瞬で導き出される。

自分が欲しいのは造る喜びだけだった。

十年もして金を稼ぐ必要が要らなくなると、いわゆる裏の組織から声がかかり始めた。

そのうちの一つに資金提供をする代わりに違法な材料を密輸してもらう契約をした。

普通の裏の研究者とは少し違うが金なら文字通り腐るほどあったし、大手の研究所でも手に入らないようなものが欲しかった。

年が三十後半に差し掛かると第三次世界大戦が起こった。

日本は世界大戦開始直後にアメリカと強引に手を切り非武装を宣言した。

今回の世界大戦ではどう見てもアメリカが悪く、親米派の総理大臣も庇うことができなかった。

これにアメリカは激怒したが戦争は激化しており、非武装の日本を襲うひますらなかった。

このことをニュースで大学時代に知り合い中退直後に結婚した妻とテレビで見ていると、

FBIに唐突に拉致された。

なんでも世界に名だたる特許王の頭脳を使い新兵器の開発をして欲しいそうだ。

俺は正直これを聞いた時、小躍りしそうになった。

開発資金は今までもこれからも気にしないが、材料と法律だけは俺を苦しめていた。

だが戦時ということもありどんなオーバーキルな武器でも構わないというので、

逆に不死の兵団の設計図を渡してみた。

HELLSINGのアンデルセンのリジェネレーターだ。

あれは銃弾やナイフ程度はその場で回復するから効かないので近代

戦争には持つて来いの力だ。

更にアクメツというチャンピオンのマイナー漫画のクローンに記憶を蓄積し続ける技術も渡した。

腕がモゲたというやつがいたら、クローニングではなくオートメイルをつけ、最終的には銃夢のサイボーグ技術も渡した。

その他様々な倫理観に反しまくる、外法を渡し続けたがアメリカは数の暴力に負けた。

二十年続いた大戦争も終わり世界は俺を世紀の大天才にして、マッドサイエンティストとして処刑を行うことに決定した。

当然処刑は嫌なので家族連れで逃走し、その間に世界を混乱させる為にネット上にオーバーテクノロジーを公開し続けて、国連を右往左往させた。

五年も経てば逃がしたままにして更に発明させ続けるか何度も論争があつたが、遺族の強い反対により、遂に逮捕され投獄された。獄中でも新たに開発を許されたがそれでも処刑は逃れられない。

そして遂に処刑の日程が決まり、処刑される場所が決まった。

日本で行われることが決定した。

なのでどうせ処刑されるなら公開処刑がいいと日本政府に駄々をこねてみると、

あっさり（設計図数枚と引き換えに）受諾された。

今は死に際のセリフを考えている。

ワンピース方式か、ムスカ方式か悩んでいると看守にあれしかないだろうと言われ決定した。

彼とはもう少し早く会っていれば親友になれそうな気がした。

そして処刑当日、沢山のカメラに囲まれながら処刑が始まった。世界中の人間の緊張がピークに達したとき、俺は重々しく口を開いてこう言った。

「よくぞ 儂を 倒した。

だが 科学者がいるかぎり マッドサイエンティストも また いる……。

儂には 見えるのだ。 再び 何者かが マッドサイエンティストとして 現れよう……。

だが その時は おまえたちは 年老いて 生きては いまい。 わははは……っ。 ぐふっ！」

あの看守は処刑の執行者でもあったようだ。

俺は彼にナイスタイミングだと称賛を贈りたかったが、急速に意識が薄れていった為不可能だった。

こうして稀代のマッドサイエンティストの生涯は幕を閉じた。

彼の発明は人の寿命を倍に伸ばし、癌の特効薬を開発し、エネルギー問題を解決し、

地球温暖化を食い止めるなど多大な功績を残したが、

後の歴史書でも彼は悪役として書かれた

余談だが、その死に際のセリフから、一部の人間からは「大魔王ゾーマ」と呼ばれ親しまれている。

正直俺はバックアップをアクメツ式と銃夢式の両方で取ってあるから、オリジナルが死ぬだけなんだよね。

だから気楽に死後の世界というものを体験してみようっと・・・

第0種禁忌（後書き）

初めての小説なので緊張しています。

どんな感想でも受け付けますのでドンドン下さい。

あとエア・ギアファンには申し訳ありませんが、エア・トレックは
しばらく出ません。

ごめんなさい。

第1種禁忌　えっ？女でしょ？（前書き）

こんばんは。

連投です。

不可解なてんがあつたら質問をください。

俺も大学でかじった程度なので詳しいことは言えませんが、では二話目をお楽しみください。

第1種禁忌 えっ？女でしょ？

！？

え！？ちょー！まつ！！？

死んだと認識した直後、何かに急速に引つ張られた。上にとか下にとかそんな物理的なものではなく、その場から小さい穴に体の内側から吸い込まれるような不思議な感覚。

しかしこれと全く逆の感覚を俺は知っていた。

全知から答えを引つ張り出す時がそんな感じだ。

いままで全知は俺の超能力とかそのあたりだろうと思っていたが、俺の能力は全知と呼んでいた何かにアクセスする事だった。

例えると俺の頭がパソコンで、能力が無線LAN、全知がインターネットみたいなの？

パソコンと無線LANは俺の所有物だがインターネットは公共の物という解釈であっているだろう。

まあ空のハードにデータが入っている訳もないから知らず知らずの内にネットに繋いでいたということだ。

所でこのまま何処まで引つ張られればいいのだろうか？

全知まで？ああさいですか・・・

いつものようにスグに答えが返ってきて面白みがない。

全知に繋がらない！？

とかしてみたいのに。

できるの？

いや、やらないよ？

何だろう、全知に近づいたせいかな全知に自我が芽生えてきているよ
うだ。

あたり？うるせえよ。

そうこうしていたら唐突に目の前が開けた。

巨大なという形容が馬鹿らしくなるほどの大きさの竜巻があった。

構成するのは風でも、水でも、物質ですらない。

数字のような文字のような線のようなもの。

視覚化された情報とでも言おうか。

俺はそれに巻き込まれていく。

でか過ぎて気付かなかったが、全知の全体像は樹木の形になっている。
る。

そして全知の中に入った時、

全知の正体が判明した。

アカシックレコード ユグドラシル

そう呼ばれているものだ。

細部は違うが似たような伝承を混ぜ合わせて、選別すればこれに辿
りつくだろう。

昔の人もこれを見て伝承を造ったのだろうが、言葉にするにも、完
全に理解するにも、矮小な人間には不可能な所業だろう。

これの構成物は五感で感じられない物のほうが多そうだ。

これにはありとあらゆる世界の情報が含まれている。

確率論で別れた世界、前回話した相互夢想の世界、他にも様々な世

界の情報が渦巻いている。

それに巻き込まれてしまった俺はどうなるのだろう、

バックアップには戻れるのだろうか？

え？戻れないの？

ここまで来たら前にいた世界に戻るのとは不可能らしい。

確立的にはサハラ砂漠の中から鳥取砂丘の砂一粒を探し出すようなものだそう。

情報体の中に霊体が居るのはおかしいのでそのうち弾き出されて、どこかの世界に生まれ変わるらしい。

全知に繋がっているので、生前の記憶を失うのは無理だそうだが、今までの研究の続きが出来そうなので、問題は全くない。

俺が目指しているのは 永久機関 Perpetual motion だ。

しかも第二種ではなく、第一種の方だ。

その違いは詳しくはwiki調べてくれ。

簡単にいえば、何も無いところから無限のエネルギーを生み出したものだ。

可能なのは全知で既に知っているが、何故か造り方だけは教えてくれないのだ。

全知にいる間は今までの様に違う世界の技術を、段階を踏んで引き出す必要がないので、

今のうちに探し出さねばならない。

でも竜巻の中から何かを探すのは無理ゲーだよ。

え？もう時間！？
ちよつと待つて！
まだ見付けてねえよ！！
え？手元の？
これですか・・・

目的の物は目の前にずっとあつたそうな・・・
見分けがつかねえよ
もう他の世界に飛ばされるようなので逝ってきます（誤字に非ず）
では皆さんまたお会いしましょう。

くマツドサイエンティストINウェールズく

はい生まれ変わりました。
今回の人生の舞台はネギまの様です。
読んだことないから知らないけどね。
ちなみに今の名前はネギ・スプリングフィールドです。
これって主人公の名前だよね？
タイトルネギまだし。
読んだことないから知らないけどね。
大事なことなので二度言いました。

現在二歳半、ようやく自我が芽生えたばかり。
生まれたばかりの状態はパソコンの初期設定中だから前のハードに入っていたソフトは受け付けないので今ようやく目覚めた。

今は1ポンド百二十円前後の様。
元の世界とは少し違うけど安定しているようだから問題なし。
一ドル札を拾って、全知を使い、株による金無限チート万歳。

スタン爺さんには名義を借りる為バレてるけど口座は幾つも隠しているし問題はなし。

というかこの世界の人間は基本人が良すぎる。

元世紀のマッドサイエンティストとしては漬け込みやすいつたらありやしない。

まあ恩があるからあまり悪いことはしないけどね。

不法投棄や廃材を拾って生まれる前に全知から引つ張り出した永久機関を造り始めます。

その名も 零時迷子

本当はもつと使いやすいのを持ってきたかったが、時間がなかつたので断念。

まあ知識はいくらでもあるから改良すれば 常時迷子 とかいう子供にはありがたくない名前の物にも出来そうだからよしとしますか。え？欠点改良は俺の十八番だよ？

というわけで、出来ました！

< 零時迷子 v e r . 魔力 + 満たされぬ器 >

零時迷子自体の改良は時間の問題で大まかなところは存在の力を魔力に書き換えた程度。

それを満たされぬ器（唯の穴の開いた器）に入れ魔力を垂れ流しにさせるだけ。

当然穴があいているから満タンにはならず零時迷子はせつせと魔力を生み出す。

実験は一晩続けたが問題が発生した。

次の零時には魔力が倍になっていたのだ。前の日からの出力に上乘せされるようだ。

流石にこれ以上は何かあると拙いので、一旦実験中止にして他の研究施設を造ることにする。

金チートのおかげで、別荘を買えた。
俺はよく知らないが、原作にも出てきたらしい、1時間が24時間になるあれだ。
その中で俺は研究を進める。

人手が足りないので前世で使っていた改良型アクメツ式クローンに
ARMSのカリヨンタワーのサイボーグの常時思考同調を使います。
外にはクローンの一人を出して置いて金チートを続行させる。

今回は自由に動く為にしばらく特許は取らない。
それでも株は楽でいいです。

たまに口トくじやサツカーくじなどを買いに行かせて、どんどんた
めて、どんどん材料を買っている。

それでも時間が足りないので別荘の中に更に別荘をIN!!
24×24=576倍!
実に素晴らしい!

流石にあつという間に老衰という結果は嫌なので、老化防止のため
の策を取る。

クローンにはテロメラゼという老化をなくす物質を全身で造り続
けるようにし、
ミオスタチン関連筋肉肥大症を人為的に起こし、肉体を成長させ続
け、
キヤツツキルファイパーという脳に作用する致死性の高いウイルス
に酷似した薬を打って、
脳の成長を止める組織を完全に破壊する。

一般に不老長寿は肉体の時間を止めて成長と老化をなくす物だと思われがちだが、

それは間違っている。

上記の零時迷子の実験でいうと、成長は魔力が増えていくことで、老化は穴から魔力が漏れていく状態だ。

初めは増える量が減る量より大きく上回っているので成長するが、

その内成長が止まり、増えずに減り続け、死ぬ。

これが老衰だ。

ならば穴を塞ぎ、蓋を開けておけば減ることはなく成長が止まることもない。

グダグダ書いたがようするに俺は年を取らず成長し続けるというだけだ。

というか胸が成長し続けて重い。

肩がこるよ。

え？なんで胸が成長するのかわかって？

そりゃあするよ。今は女の子だもん。しかし生理がマジっげえ。

え？ネギは男だっけ？

でも俺は女だよ？

あつるえ〜？

第1種禁忌 えっ？女でしょ？（後書き）

はい、ネギがTSしてしまいました。ごめんなさい。

説明がよくわからなかったら、感想板でわからねえよと書いてくだされば、

がんばって修正します。

それではまたノシ

第2種禁忌 狂気再始動（前書き）

こんばんは。

またも連投です。

この話からエグイ表現が増えていくので、ご了承ください。
あとときどき入るネギの独り言の相手は全知です。

第2種禁忌 狂気再始動

（ネギ）

こんにちはマツドなネギ（）、現在三歳です。減った端から補充する常時迷子が遂に完成しました。出力が八割に落ちたが、数を用意すれば問題無し。

スタン爺さんが魔法の杖をくれました。

外では相変わらず三歳児のままです。

魔法の練習などは別荘内組に任せています。

魔力チート万歳

そして自分はまほネットでネットサーフィンに勤しみます。

これは遊びではなく仕事です。

あつ、このスレ俺得www。

ああ！冗談です！石を投げないで下さい！

真面目な話、

今現在の自分は全知に問いたくても何が判らないのか判らない状態です。

近くに同じ年くらいの子供が居れば一緒に遊んでその中で覚えるのですが・・・

あまり全知に大量の情報を求めると脳味噌が弾けそうになります。前世で一遍やって二年間仮死状態になり、大変な目に逢いました。

この間は気というドラゴンボール世代にはワクテカの物を発見しましたが、

さすがにサイヤ人程ではなかった。Orz

まあ別荘の中で一応練習はさせています。

こっちは純粹に身体エネルギーなのでミオスタチン万歳という状態です。

常時迷子も使えますし、楽とは人類にとって発展の場である。今俺いいこと言ったよ。

魔力との同時使用を目論んで、常時迷子を改良します。咸卦法というそうな。

身体エネルギーと魔力を常時迷子内で混ぜ合わせようとするとうまく混ざらないので、

魔力を少し原始的な精神エネルギーに置き換えます。

これを常時迷子内で螺旋状に攪拌してつと。

ヒヤッホウ！できたぜ！咸卦法だ！！

なに？違うの？チャクラ？NARUTOの？

FUCK！

ネギは目の前が真っ暗になった。

ぶっちゃけ全知にNARUTOの世界の情報寄せとが無茶ぶりして本当に全部ぶち込まれて脳がオーバーヒートしたのだ。

おおネギよ、死んでしまうとは情けない・・・

死んでないけどね。

今回は結構知っていることが多く、量がそれほど多く無かったので一日ぶつ倒れるだけでした。

ああ、まだ頭痛い・・・

しかしこれで研究の幅が広がった。

影分身の術で即席の人手を材料無しで無限に生成出来るのはいいことだ。

あと変化の術もいい。

とりあえず他の人間になり済まして会社を幾つか立ち上げる。
技術チート万歳

今一番手を入れているのは武器関連の事業です。

H C L I 社

ヨルムンガンドなあれです。

造って、運んで、売り飛ばす。

名乗るのはもちろんココ・ヘクマティアル！

紛争を泥沼化させたり、新たに戦場を作ったりしてマッチポンプです。

というかこの世界は本当に基本的に人がいいのか、

フレシエットどころか、ナパームもクレイモアも無いようで、

強い銃で撃ち合うだけの簡単な構図で正直見ていて笑えました

なんだか途中で悠久の風とかいいうのがちまちまやってきたが、

人間の闇は深いのです。

全然止まりませんでした（笑）

まあ彼等の知っている戦場は銃で撃ち合う戦争だけだったようで、

R P G や地雷原で簡単に潰せました。

次に印刷機を造りました。

まほネットで札を売っていたので数枚買って調べると、書きながら魔力を込めれば出来るようなので、N A R U T O の起爆札と一緒に作成します。

普通は一日集中して十数枚だそうだが、

こっちは印刷機に常時迷子を組み込んでいるので、

なんと秒間8枚！

各用途に一台ずつ印刷機を造ったので、かなり大量に出来ました。

うちは基本的に材料が自家製です。別荘の中で植物などを超高速生産です。

初めは長距離転移符が一枚80万とか、

攻性術式が組み込んである札が5枚で20万とか、かなり儲かっていましたけど・・・。

値崩れしやがった！orz

まあ材料費はほぼ0円だから一枚百円でも儲けは出るけどね。

最近では別荘を幾つも自作して、時間軸を変えたり、内部環境を星一つのサイズにしたりしています。

時間が初めから576倍とか、更に24倍の13824倍とか面白すぎるwww

そしてその中で自分達クローンは不老化を施して、戦災孤児達を放り込んで繁殖させて、全く新しい文化圏を造ったりもして時間がいくらあっても足りません。

その中の一つに大規模農場があります。

農家の農家による農家の為の星です。

ブドウが一晩で37年物のワインに早変わりです。

スタン爺さんに740年物のワインを何も言わずに渡したら、とても美味しいと評判だったので今度売りだすことにします。

あれ？スタン爺さんが呼んでいる？

くスタンく

ワシはナギから預かっているネギを孫の様に可愛がっている。

しかしネギはハッキリ言って異常の一言に尽きる。

生まれたばかりの頃はまだ普通じゃったが、

二歳を過ぎて言葉を覚え始めてからは成長が速く天才かと思った。

じゃがそうではない。

断じて違うといえる。

なんでも知っているのじゃ。

どんな質問をしても、何を聞いても答えを知っているのじゃ。

答えない事は何度かあったがあれは知らないのではなく、

答えられないからだと見ていてわかる。

ワシが持っているパソコンで金を合法的に稼いでおる事は知っておったが、

この間机の上に置いてあった通帳を見てその金額に腰を抜かしたの
は記憶に新しい。

更には何処からか持ってきたワインを飲んでみると、

十年物や二十年物ではあり得んほどの素晴らしい味じゃった。

あれを飲んだ後ではどんな酒でも霞んでしまっ、そんな代物じゃった。

とはいえ子供に酒を集るほど落ちぶれてはおらんので、
ある分だけをちびちび飲んで楽しんでおる。

しかしこんな小さい子供が四六時中パソコンに噛り付いているのは
少々まずいので、

近所のアーニヤを紹介して一緒に遊ばせてみようと思ひ、
今日会わせるとアーニヤの両親に伝えておいた。

「おい、ネギー。」

「何？爺さん。」

ネギがパソコンのある部屋から出てきたので

今日友達を紹介することを話すと目を輝かせた。

「本当？爺さん？うれしい！」

こうして喜んでいられるのを見ると年頃の女の子に見えるから微笑ましい。

近所の広場に行き、待っていると、向こうからアーニヤ達がやってきた。

「初めまして、ネギ・スプリングフィールドです。」

「は、初めまして、アンナ・ユーリエヴナ・コロウアです。」
ネギはしっかりしているがアーニヤは緊張しているようじゃ。

これで少しはネギもまともになってくれると、ワシも安心なんじゃが・・・

まあ最悪父親の様に学校を中退なんてしなければ、どんな子に育ってもいいのじゃ。

第2種禁忌 狂気再始動（後書き）

主人公戦災孤児を繁殖とかマジ外道WWW

あと主人公は前世の両親と違っていい人だということを知っているので、

基本放置しています。

あとアーニヤのキャラがネギが女だとかめねえ・・・

それではまた今度お会いしましょうノシ

第3種禁忌 噛ませ犬の大活躍（前書き）

今回は一部原作と違うところがあります。

アニメ界の最大のラスボスでありながら噛ませ犬であったあの人の見せ場です。

ちなみに本人ではありません。

あとヨルムンガンドを知っている人はどのくらいいるのでしょうか？
うちの学校は結構多かったけど・・・

第3種禁忌 噛ませ犬の大活躍

「ネギ」

こんにちは。

マッドなネギ（ ）、略して「ネギま」です。

戸籍上は四歳になりました。

只今「ココ・ヘクマティアル」として戦場にいます。

今は新作ナパームの売り込みです。

この世界では規制されていないので、バンバン売ります。

拠点制圧用や対屋内用があります。

なんかこの世界は平行世界でもあるのか、レームとかルッツとか全員いました。

一番の収穫はヨナです。例の事件が起こる前にキャスパーとして引き取った為、

武器商人全体というよりキャスパー個人を憎んでいます。

チーム全体が急造なので、これからチームワークを上げていかなければいけませんね。

あと女として別荘の中で十年以上過ごしたせいで、母性本能湧きまくり。

最近ヨナが可愛すぎて四六時中抱っこしています。

バルメから怒られたけどこれだけは譲らない。フーフ

「我々はNGO団体の者です！ただちに戦闘をやめて、撤退しなさい！」

またきたよ、有給のなんとかが。

有給なんだからちゃんと休んどけよ。

「NGOの人間が何の用だ？」

あ、こっちの指揮官がこのこ出て行った。

馬鹿だねえ、要件なんかもう言っているから、射殺して後でNGOの支部の玄関においてくればいいのに。そもそもNGO団体に紛争中止を命令できるような権限なんて無いというのに、あっちもなにを考えているのだろうか。

まあいいや、今回は過激派テロ組織の本部壊滅だから。

「言いたいことは分かった、だがこちらだけ銃を降ろすのは馬鹿のすることだ。」

相手側の指揮官と交渉がしたい。」

「分かってくれましたか！ありがとうございます。向こう側にも私の仲間が話を付けに言っています。」

だからご安心ください！」

おお、さすが指揮官、一個も言質取られていない。

しかも向こうの指揮官相手陣営から引きずりだしたよ。

「向こう側の代表者がいらっしゃったようですね。」

では互いの誤解を解けるようにゆっくりとお話してくださいね。」

だからおまえは何様だよ。

今まではそれで成功してきたかもしれないけど、

最近じゃあ戦争の形は変わってきているというのに、馬鹿だなあ。

「初めまして、指揮官殿。」

まず我々の要求は「ふん！話にならん、撃て。」なっ！？」

銃声が鳴りやまない。

相手側は、交渉は決裂するにせよ、話ぐらいは聞くだろうと思って
いたのか、

安全装置を掛けたままだったのが、外す間もなく死んでいく。

陣営を出てきた人間を逃がすわけもなく、根絶やしにするようだ。NGOの連中が射線に出て体を張って止めようとしている。馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが本物の馬鹿だった。

「なっ何をしているんですか！？銃を降ろさせなさい！」

交渉をするのではなかったのですか！！？」

「ふん、あれは我が国の首都を爆撃してくれた、糞つたれのテロリスト共だ。」

無条件降伏ならまだしも要求を突き付けてくるなど話にならん。

それにこれも立派な武力交渉だよ。」

「そんなバカな話がありますか！すぐに撃つのをやめさせなさい！」

おまえはもう黙れよ。

見ていると頭が痛くなってくる。

どっちが正しいとかは俺は言わないけど、

国側はテロリストを根絶やしにしないと市民が危険にさらされる。

そう考えているからこそその殲滅だというのに・・・

「ヘクマティアル殿！」

うわっ、俺このタイミングで呼ばれるのかよ。

「あなたは誰なんですか！？指揮官に言っつてこの馬鹿げた行為をやめさせて下さい！！！」

「申し訳ありません。私は一介の武器商人でして・・・。この戦争をやめさせる権限は何一つ持ってはいないのですよ。」

「なっ！？武器商人・・・ですつて！！！？」

「でもこの銃撃を止めさせるくらいはしてあげますよ。」

指揮官殿、もう全員死んでいますよ。」

「うむ、確かにそろそろだな。」

総員撃ち方止め！ではヘクマティアル殿、新しい武器を売ってく

ださるそうですが。

よほどの物でなければ言い値で買えると思います。」

さて値段交渉に入ろうとした時に、例のごとく馬鹿が騒ぎ出した。

「馬鹿なっ！これ以上人を殺そうというのですか！」

「・・・・・・」

馬鹿は勝手に騒がせておいて、こっちはこっちでしごとをします。

「さてこちらの兵器は新商品なので、代金の方は使用後にその性能を直に見てからお決めください。」

「何？それは良心的だなあ。いやそれとも自社の兵器に絶対の自信があるんです？」

まあこのおっさんなら当然気付くとは思っていたけど、兵器の性能がいいのに金払いが悪ければ相手に売られるから下手な値段は付けられない。

これで相手を見くびれば今度はその兵器で逆転される恐れが出てくるのだ。

「とりあえず使ってみましょう。カタログスペックだけでは心もとないでしょうから。」

結果だけ言うと商談は大成功、お互いが満足できたのでさっさと引き揚げました。

NGOから来た馬鹿は口封じに殺そうと思っただら転移符で逃げられた。

全知で居場所を探るとNGO支部内だったので諦めました。戦場以外で殺すと事故死扱いが出来ませんからね。

そのせいでNGOから情報が漏れ、HCL社には世界に名立たる兵器会社として知れ渡ったのであった。

「INウェールズ」

今アーニヤと花で冠を作っています。

一般的な魔法使いの家の常識は全部アーニヤ経由で知りました。スタン爺さんはあまりそういう常識的な事は教えてくれません。

魔法世界なる素晴らしく面白そうな場所があると聞き、現在両方から小規模の個人的なゲートを作成中です。

あと俺の父親が英雄だそうですが、どうでもいいです。戦争とは今もこれからも数です。

英雄など必要なく、重要なのは統一規格の兵装です。

しかし戦争の英雄とは相手側からしてみれば大量虐殺の犯人ですから、

恨みを持っている人は多いんじゃないかなあ。

全知で自分を狙っている組織が無いか調べてみます。

あ、やっぱりあるのね。

メガロ・メセンブリア？

味方側じゃないの？

母親がらみ？

へえ、なんかやつかいだな。

襲撃は来週なんだ。

じゃあ罫でも張っておくか。

なんだか悪魔を召喚して村を襲わせるようです。

時間が大分ぎりぎりでしたが、気付いてよかった。

大規模指定転移魔法陣を書いて、

悪魔だけを召喚した瞬間から別荘内に転移させる術式を、村全体を覆うように書きこみました。

後は待つだけ、報復の準備もしておかなければ。
人の住む世界を旧世界などと馬鹿にするやつは、
旧世界の技術で灰にしてやりませう。
そのときは拡声器でムス力並みに嘲笑ってあげませう。

くクルト・ゲーデルく

私はイギリスのストーンヘンジにあるゲートから急いで、ウェールズのある村に向かっています。

今日アリカ王女の息子であるネギ様の住むむらが襲撃されるという情報が入り、気付いたら私は愛刀を掴んで走っていました。この分ではおそらく間に合わないでしょう。
それでもわずかな可能性にかけて全力で走ります。

しかし村に着くと平和そのもので、襲撃がデマだったのではないかと思えるほどでした。

「あれ？クルトじゃねえか？」

「！？ナギ？あなたなのですか！？どうしてこんなところに？」

かつて戦場を共にして、遂には袂を別つた仲間がそこにはいました。
「いや、この村が今日襲撃にあうと聞いて来たんだが、なんだかよくわからないうちに逃げ出したみたいだぜ。」

「逃げ出した？」

「おう！不審な動きをしていたからとっ捕まえようと後ろから忍びよったら、こつちに気付きもしねえで走って行ったぜ。」

「分かりませんねえ。何故彼らは村を襲わなかったのでしょうか。」

私の掴んだ情報によると、悪魔を召喚して襲う計画だったようです。が……

「何があったのでしょうか？」

元老院がたかが召喚に失敗するような人材を派遣するとは思えませ

んが・・・

それに撤退ではなく逃げ出したとは、いったい彼らは何から逃げようとしたのか。

「とりあえず俺は息子の顔を一目拝んでくるぜ。」

後は頼んだ！」

「いいでしょう。そのくらいならお安いご用です。」

周囲の搜索を開始する。

しばらくすると、作業員たちが使っていたと思われる召喚陣を発見した

「何もおかしな点は無いようです！っ！っ！っ！っ！？」

ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、

ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、

ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、

ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない！！

召喚陣が起動したままになっている！

召喚には魔力が必要だがそれもどこから供給され続けている。

極めつけは誰も召喚されていない事だ！

陣が起動しているのに召喚がおきていないのは、召喚元に誰もいなかった時だけだ。

魔界に何かあったのか！？

それとももつとほかの何かが？

急いで陣を停止させ、調査の為に元老院から急ぎ専門家を呼んでくる必要があります。

息子に会いに行ったナギに声も掛けずゲートに向かいます。

そしてゲートを潜って目に入った物は・・・

「フハハハハ！人がゴミのようだ！！！」

首都メガロ・メセンブリアが真っ赤に燃えています。

何が起きているのか理解できない。

首都の上空には旧世界の飛行機が飛び交い、大量の爆弾を落として
いる。

飛行機からは大音量で何者かが人々を嘲笑う声が流れている。

魔法使いたちは大規模障壁で防ごうとしているようだが、まるで歯
が立たっていない。

建物は燃え、総督府は影も形もありません。

私が首都を離れた数時間の間に一体何があったのでしょうか。
・
・

第3種禁忌 噛ませ犬の大活躍（後書き）

クルトさんマジ乙wwww

元老院の何人かは逃げ出していますのであまり原作には影響しませ
ん。

この事件はネギにとってはストレス発散程度ですので、本人のなか
の重要度は低いです。
ではまた次回ノシ

第4種禁忌 虎の尾の上でコサックダンス(前書き)

こんばんは

前回の描写が不十分だったので補完の回です。

相変わらずの外道っぷり。

そして原作崩壊。

ではお楽しみください。

第4種禁忌 虎の尾の上でコサックダンス

（工作人員）

初めは何が起きたのか全く分からなかった。

召喚陣を起動させるまではいつもと変わらない作業だったはず。

しかし起動させた瞬間仲間のうちの一人が行き成り倒れ、

別の仲間は目が虚ろになり、人間の物とは思えない声で恐らく呪文であるうものを唱え始めた。

辺りには霧が立ち込め、何人もの人間が嘆いているような音が響く。起動したはずの陣からは悪魔が出ては消える現象が繰り返されており、その間隔も短くなっているから、召喚すらされなくなるだろう。更には霧が瘴気にかわって、地面からは無数の半透明の手が何かを探るように伸びてきていた。

仲間は全員恐慌状態に陥り逃げ出した。

俺は呪文らしきものを唱えている者を気絶させ担ぎ、最初に倒れた仲間は他の奴が既に背負っている。

一人残らず逃げ出したのを見届けた後、俺も急ぎ撤退した。

やっとの思いでゲートを潜り、一安心した所でこの任務の報告をしに、命じた元老院の一人の下に駆けつける。

国民の税金を横領し建てた、無駄にデカイ屋敷に入り一人の老人の前に膝をつき、話しかけられるのを待つ。

「それで？どうなった？」

「報告をします。任務は不可解な現象に阻害され失敗しました。」

「不可解な現象？もういい、おまえには失望し「へえ、結構いい所に住んでいるんですね。」」

「！？」」

何処からともなく声が出た辺りを見回すが誰もいない。

しかし二人とも分かっていた。

“辺りに”ではなく“此処に”いる。

何処からともなくなんて思ったのはそれを認めたくないからだ。

此処には二人しか居ない筈なのだから・・・

「ああそれ程警戒しなくてもいいですよ。僕は此処にいます。」

今度はハッキリと理解した。声は足元から聞こえた。

オコジヨ妖精かと思ったが、足元には俺の影が伸びているだけだ。

その時足元の影が起き上った

「さてなんと自己紹介いたしましょうか。」

影が人の形を形成する。

「こういう場合、第一印象が大事ですからねえ。」

影に色が付いて、どこか見覚えのある少女になる。

「うん、決まりました。」

見覚えがあるのは当たり前だ。なぜならあいつは・・・

「あなた方が襲撃しようとした、」

俺たちが襲うとした・・・

『ネギ・スプリングフィールドです。』

圧倒的だった。

そうとしか言いようがなかった。

半狂乱になった元老院が呼んだ衛兵が一斉に襲いかかったが、少女が腕を振るうだけで衛兵の体が粘土細工の様に形を変えていく。手足が吹き飛び、胴体は二つに分かれて千切れ、頭は原形を留めていない。

小さな少女の体のどこにこれほどの力が隠されているのだろうか。俺は余りの恐怖にその場で立ち竦んでいた。

「さて、ゴミ掃除は終わったようですね。こんな可憐な少女に話も聞かずに武器を向けるなんてひどい人たちですね。」

「ななななッ何が目的なんだ！金か！？私の命か！？？」
議員がやっとの思いで口を開く。

「目的はですねえ、あなた達二人に目撃者になって貰いたいのですよ。」

目撃者？

彼女はこれから更に何かする気だろうか。

いや“更に”ではなくそれこそが此処に現れた理由なのだろう。

彼女にとってさっきの惨劇は周りを飛び交っていた八工を払った程度の認識しかないのだから。

「つく、そんな事には付き合っておれん！」

議員が逃げ出そうと、出口に走り出す。

【斬ッ】

「うぎゃあああああああ！！！」

彼女が腕を振り、離れているはずの議員の足を切り飛ばした。

「ダメですよ、逃げ出しちゃあ。あなたには他の元老院に何かあったのか余すことなく伝えて欲しいのですから。」
「そう言いながら手を前に伸ばし手のひらを屋根に向けて、屋根を持ち上げた。」

そうとしか言いようのない光景だった。
屋根が独りでに浮かび上がりずらされる。

余りにも自然に動くものだから、誰かが外側から持ち上げてしまっているかのように錯覚した。
未だに出口付近に倒れて呻いている議員でさえ痛みを忘れて見上げている。

「さて、始めますか。」
少女がそう宣言した途端、少女の足元の影が広がり、部屋中の床を満たす。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！』
地響きが鳴り影の中から巨大な人工物が幾つも現れ、空に舞い上がった。

初めは大きすぎてよくわからなかったが、空に舞う時旧世界によく飛んでいる飛行機という移動用の乗り物だと分かった。

「きつ君は！い、一体これから何を、する、気なんだい？」
緊張のあまりに声が擦れる。
嫌な予感しかない。

旧世界によく渡るため、向こうの事は学んでいる。
その知識があれば危険だと告げている。
あれは本当に拙い！

二チヤア

そんな音が聞こえるような一啖い・・・方だった。

普通の少女には似合わない笑い方だが、あの少女にはそれが相応しい気がした。

「あなた達は私の村を、魔法を使って火の海にしようと思いました。だから今度は私の番です。

幸いなことに私が昔走っていた道は“オーバーロード轟の道”。更に特性は“鏡”でした。

鏡の向こうに光を当てようとしても光は当たらず、左右を逆転して跳ね返される。

ならば科学左と魔法右を逆転させ跳ね返しましょう。」

ああ、この少女はこのまちの一切合財を焼き払う気だ。

言っている事は半分も理解できなかったが、それだけは理解してしまった。

させられてしまったのだ。

「B・25。アメリカ軍の爆撃機です。

それに積んであるのは高焼夷ナパームと160mm鉄甲榴弾。

存分にご賞味あれ。」

俺は茫然と空を眺めていた。

彼女はいつの間にか消えていたが、そんな事は気にしている場合ではない。

全てが燃えている。人も建物も自然も空も大地も、全てが燃えていく。

俺はのろのろと動き出し議員の家を出た。

彼女の言うことを信じるなら、俺達を目撃者にするためにあの家は

決して狙わないだろうが俺はそんなことは考えられなかった。

辺りが火に覆われていくのを眺めながら幽鬼のように歩いていると、「フハハハハハ！人がゴミの様だ！！」

そんな声がメガロ・メセンブリア中に響き渡った。

声が違うがあれは彼女が言っている。

それだけは確信を持って言える・・・

「ネギ？」

こんにちはマッドなネギ（影分身）です。

今B・52を操縦しています。

少しテンションが上がったのでムスカの着ボイスを大音量で流します。

ちなみに議員の家にいたのも影分身です。

この作戦は、まずウェールズの村に大規模指定転移魔法陣を書き悪魔を一匹残らず捕獲します。

次に作業員を追っ払い、かつ自分は作業員の陰に潜み、命令した人の家に潜入します。

その次に命じた議員をメッセンジャー代わりにして、元老院全員に自分が使いやすい駒ではない事をオブラートに包んで伝えます。

そしてメガロ・メセンブリア中を爆撃します。

最後に細々した後処理です。

以上

現在8機で殲滅中。

本来たった8機では都市爆撃は可能ですが、殲滅には足りません。しかし、別荘チート万歳。

時間軸の同じ別荘に影を使ったゲートを繋ぎ大量に弾をストックし、更に時間軸の違う別荘を中に工場を入れ大量生産させます。その別荘を一機に尽き十六個用意しました。重量制限？弾切れ？なにそれ、美味しいの？

それでは粗方終わったので、大量の爆弾持って、総督府に突っ込んできます。

「いざいかん！神風特攻！！」

9月から学校が始まるの、今から楽しみだなあ。

〈OUT SIDE〉

この日、メガロ・メセンブリアは謎の襲撃を受け、3300万人を超える死者を出し、都市機能の停止を余儀なくさせられた。

市民は帝国の過激派の仕業だと声高に主張したが、生き残った一部の元老院が頑なに否定し、その主張もいつしか消えていった。

第4種禁忌 虎の尾の上でコサックダンス（後書き）

いかがでしょうか？

次は魔法学校が始まってしばらくした後の様子を書きます。

それではまた明後日あたりに。

おやすみなさいノシ

第5種禁忌 別荘がケイオスです。(前書き)

こんにちは、珍しく朝に投稿です。

今回はいつもより少し短めですが、勘弁してください。

あとネギのマッドっぷりが加速しました。

少々不快な表現があるかもしれませんが、スルーしてください。

第5種禁忌 別荘がケイオスです。

（ネギ）

こんにちは、毎度お馴染みマッドなネギ（ ）です。
今年で5歳n キングクリムゾン！！ 7歳になりました。

おい！せめてセリフだけは最後まで言わせるよ！！
メタ発言終了です。

学校ではゆとり教育も真っ青な、内容の薄い授業をしています。
マジでこれでいいのかよ。

まあ、全ての魔法を全知で知っている俺からしてみれば、学校なんてしゃべり場並みにどうでもいい所ですけどね。

最近の実験の結果を報告します。

24の4乗の331776倍の別荘内で、神話の世界が形成されました。イエーイ！

何が起きたかというと、

前に連れてきた戦災孤児を繁殖させた世界を【繁殖界】と名付け、

“子供が多ければ正義”と教育し続けた結果、

外の世界で十日もしないうちに人口が66億人を超える大惨事になりました。

いくら別荘が星一つ分を大きさだと言え、これは多いので幾つかに分けることにしました。

一つは【闘争界】。

いくつか種類があります。

各世界で国を四つに分け、毎日闘争に明け暮れています。一つ目の世界は今のところ原始的な武器しか使っていないので、気と格闘技が発達してドラゴンボールしています。流星に星を壊すほどではないが、一撃一撃がヤバい。

一つは超科学戦争、兵器がヤバい。

最後が超幻想戦争、魔法、忍術、超能力と本来あり得ない能力を使い戦います。

神話並みなのはここです。

クローンを数体各国に分け、戦争に参加させ続けます。

新たな格闘技の流派もバンバン出来ています。

ちなみに繁殖界から一番人間を消費するのはこの世界です。

この間1年ぶりに同期したら、一気に33万2千年分の記憶が複数流れ込んで、

三日程頭痛で寝込みました。

今の自分の脳味噌は自前の脳味噌に加えてブランクスペースに、

銃夢式の直径4cm程の六角形のチップ型脳味噌をトリニダードも吃驚仰天の32個入れていきます。

ああそれでも痛い・・・

二つ目は【研究界】

此処ではさつき出した銃夢の更に数千年進んだ科学を扱っています。

元はマンガ技術を開発するための場だったのですが、

百万年も研究すれば上回りますよねwww

ちなみに俺が引くほどのマッドが多いです。

此処で造ったクローンにはアクメツのクローンとARMSのサイボ

ীগとNARUTOの影分身の技術が流用されています。

だから生きている間も表層的な知識は常に共有し続けて、死んだ後は感覚的な経験と、肉体的な経験が他の個体に蓄積される優れものです。

『マツチヨが死ねば、他もマツチヨ！まあ！なんて素晴らしいんでしょう。ジャパネット高田さんこれはお買い得ですね！』

なんて時期がありました、今は『他もマツチヨ』は無いです。

一人ネタでビスケット・オリバ並みに鍛えた奴が死んで、大混乱になったせいです。

あいつはマジで迷惑だった。

本体は基本此処にいます。

三つめは【食糧界】

食べ物を作っています。これは全部で4つあり、常にリンクしています。

害虫が居ないのでとても楽でいいですね。
以上

四つ目は【幻想界】

此処では魔法や忍術を研究しています。
穢土転生は素晴らしい。

全知を使い、過去の英雄の死体の在り処を探して穢土転生。その後闘争界に放り込み性能を確かめる。
他にも成果はありますがそれはまた今度。

最後に【生産界】

外向けに卸す為の物資を製造しています。材料は研究界産の常時迷子が液体状の物も生み出せるようになったので、

融けた熱い金属などが蛇口の様に出続けています。レアメタルがレアじゃないのも此処です。

新たな合金の開発などはしません、研究界で新たに発見されたものを大量生産したりはします。

ダマスカスはヤベえ。刃物の切れ味がパネエ。そんな世界です。

他にも時間の進み方がゼロに近い【保存界】などがありますが、これは放置でいいでしょう。

各別荘は全てゲートで繋がっていて、闘争界の一つは現地民には知らされていませんが、他の界は出入り自由です。持ち込みには幾つか制限がありますが。

そんなこんなで今現存する兵力は兆をさらつと超えています。あまりインフレしすぎると面白みがないので増やす気はありませんが。

次に現実世界の話をします。

兵器関連はそのまま進めていって、今は芸術関連の仕事を始めています。

前に何処かでさらつと言いましたが、この世界は平行世界でもあったようなので、

流行っている歌は全然違いました、

マイケルジャクソンとかポルノとかいきものがかりとか結構多くのアーティストが在野にストリートミュージシャンとしていたので、

ヘッドハンティングして楽譜などを渡しました。
何人が失敗しましたが、それでも我がレコード会社は大儲けで笑いが止まりません。

そして前回の殲滅行動以来、メガロ・メセンブリアが大人しいです。表面上は国の復興の為に頑張っています。が、こっちはてつきり何かしてくると思っただけ構えていたというのに残念です。

（実際は向こうがかなりビビって手を出してこないだけです。）

さてそろそろ授業の時間ですね。

それではまた今度お会いしましょう。

（アーニヤ）

小さいころからの親友“ネギ・スプリングフィールド”は少しおかしな子です。

昔からいろいろなことを知っていて物知りだなあと感じていたら、闇の福音の様な誰でも知っている事を知らなかったり、兎に角変な子です。

学校に来て寮に入ったけど彼には毎日どこから書類が届いて、ネギったらそれを見てニヤニヤしていても不気味です。

最近はやたら一緒に風呂に入ろうとしてくるし、一緒に入ると時々身体中を男の子みたいに見たり、触ってきたりして嫌になっちゃう。

ちゃんとしてないのに変ねえ。

授業は普段寝ていて質問されたらそれまで寝ていたのが嘘の様に起きて正解を黒板に書きます。

ホントに寝てたのかしら？

あと時々何人もいるんじゃないかと思う時があります。

授業は単位制だから必ず被る授業があるはずなのに先生の話では全部取っていて、しかも全部出席しているそうです。

「ねえネギ。あんた今薬草学の授業のはずじゃないの？私の部屋にいいの？」

「平気平気、今ちゃんと出てるから。」

ホントに変な子です。

でもネカネお姉ちゃんには、普通の子に見えるそうです。

時々ネギがネカネお姉ちゃんのことを「ロリコン」「って言うけどロリコンって何だろう？」

そろそろネギは卒業に必要な単位を全部取ってしまうそうだから、一年先輩の私としては負けてられないわね。

頑張って勉強しようっと。

第5種禁忌 別荘がケイオスです。(後書き)

昨日の夜中に腹痛で起きて、痛みで寝られずに書いたものです。
誤字脱字が激しいかもしれません。
ではまた明後日ノシ

第6種禁忌 話が進まない(前書き)

話の途中にきわどい表現が入りますけど、この程度は18禁じゃないですよね？

今回の話はギャグしかないので、気になるようだったら飛ばしてもらっても結構です。

ちなみに作者は一つ目をやったことがあります。

第6種禁忌 話が進まない

こんにちは、マッドなネギ（ ）9歳です。
今日は卒業式です。

本当なら去年卒業出来るはずだったので、試験の時間を間違えて1単位足りず卒業できませんでした。

でも今年はアーニヤと一緒に卒業なので気にしていません。

卒業式自体は終わったので後は卒業課題を待つだけです。

でもこれって普通卒業前にやらない？

恐らくこれが魔法界クオリティーなんでしょう。

「ネギー！」

アーニヤが駆けてきました。

最近本当に可愛くなってきて何度かレスビアンに目覚めそうでしたが、あと一歩のところまで踏みとどまりました。

本当に危なかった。

逆に男から告白された時は顔の形を拳で変えてあげました。

「あんだ課題もうでた？」

「まだだよ、アーニヤは？」

「わたしはロンドンで古い師よ。あっそろそろ出てきたんじゃない？」

ホントだ。ジンワリと滲みでてきた。

「A teacher in Japan」

日本で教師をしるだつて？

なかなかの無茶振りだ。

校長も嫌がらせにはなかなかやってくれるじゃないか。

ちよつと紅茶に持続性の高いバイアグラを仕込んだだけなのに。

子供の可愛い悪戯に此処までの仕返しをするなんて。

「言っとくけどネギ、あんたが悪戯したのは一回じゃないわよ。」

なんだ？校長室の観葉植物を全部マンドラゴラに植え替えたほうか？あれはこっちの教室まで届いたから文句を言いたいのはこっちだつてのに。

それとも勝手に年齢詐称薬と性別詐称薬を混ぜて来客用茶菓手に仕込んだことか？

はたまたま「多分全部ひっくるめてだと思っつわよ。」

「ふん！どちらにせよ心が狭いよ。たかが子供の悪戯だ。多めに見て欲しいもんだ。」

「どれも致死性が高いわよ！一緒になって怒られるこっちの身にもなつてよ！」

なんで止めなかったんだとか言われてもこっちは知ったこつちやないわよ！！」

アーニヤが切れているが気にしない。

一応ハーバードもケンブリッジもマサチューセッツも（クローンが）主席卒業しているし、

友達の付き合いで教職員免許も取つてある。

その気になれば適当な学校のリスニングの先生としていけるだろう。もし教員免許が無くて、塾の講師でもやればいい。

でもこうやってわざわざ面倒な正規の手続きを取つたということはなんか企んでいるのだろう。

仮に真面目に教師をするにしても、この体では心許無いから研究界

上がりの廃スペック品に取り換えようかなあ。

とりあえず校長室のゴミ箱に仕掛けた大量の使用済みコンドームがどうなってるか見に行こう。

「失礼しまーす」

「おおよく・・・もやってくれたなあ！」

うわぁ初端からブチギレてるよ。

ああ、もう外に捨てた後だったか。

何があつたのかは後で隠してある監視カメラの映像を見よう。

「おまえたちのせいであまこの部屋がイカ臭いぞ！」

“たち”！？なんでまた私まで怒られるんですか！

アーニヤがお馴染みの抗議をしている。

毎回思うけど良く飽きないよな。

「止めなければ同罪じゃ！」

「止めるも何も、私は全く知りません！」

いいかげん面倒だから用事を先に終わらせよう。

「そんなことよりもまずこつちのことですよ。」

「そんなこと！！？」

「この日本で教師ってなんですか？ただの嫌がらせなら適当に沖縄の中学校でバカンスしながらやりますけど？」

校長とアーニヤは未だに打ちひしがれていて、答えてくれない。

「いやっ、ダメじゃ。普通の学校ではお主の様な悪質な悪戯は犯罪扱いされるのでな。」

お主には麻帆良学園に行ってもらおう。

あと課題を決めるのは精霊の仕事じゃ、儂は関与しておらん。」

おっ、復活した。

「ええ、あそこ関東魔法協会があるじゃないですか。」

そんなややこしいとこ行きたくないですよ。

悪戯なら校長にしかしませんし。

どうせ向こうもサウザンドマスターの娘が欲しいだけでしょう？

あとそんな建前いらぬから課題変更しろよ。」

「こつちも政治的判断というものがあるのじゃ、我慢せい。

それにお主には卒業なぞ関係ないのじゃろ？

クビになっても良いから速く行け。

あと儂にしかつてどういふことじゃ！」

嫌み（笑）の応酬だった。

本音が隠れていないから考えていることは丸わかりだったが・・・

「分かりましたよ、麻帆良学園に行つてきますよ。

でもどうなつても責任取りませんからね？」

「いや最低限は取りなさいよ。」

アーニヤもやつと復活したらしい。

「まあどうでもいいや。期間は指定されてないから教育実習生で気楽にやりますよ。」

「それは向こうと決めてくれ。ああそれと「行つてきます」す」妙なところでせつかちじゃな。もう見えなくなつたわ。向こうから出迎えがあるというのに。」

この時校長の話をちゃんと聞いておけばよかつたと、ちよつぴり後悔した。

しっかし日本とはまた数奇な縁があるもんだなあ。

生まれたり、育つたり、公開処刑されたり。

今度は教師とは・・・

とりあえず荷物を別荘に全部放り込んでいくか。

あと研究界に行つて新しい体をもらつて来よう。
いい加減体を変えるときは案内用の音声をバタ子さんから変えてもらおう。
いちいち高音質で「ネギ〜、新しい体よ〜」と言われるのは嫌になる。
あんな所に無駄な技術を使つなよな全く。

そつだ、忘れていた。
ネタアイテムとして送られてきたこのメーヴェ（ナウシカ）を使わなきゃ。
これで派手に登場してやろう。

超嘘予告

〜マナ〜

その日の夜、彼は空から降りてきた。

「せつちゃん、もううちに縛られんでもええんよ？
うちは、せつちゃんと居られただけで、もう、幸せ、やったから・・・」

それは恐らく私たちと彼の宿命の始まりだったのだろう。

「このちゃん？このちゃん！？嘘や、嘘やあああああ！！！！
「！」

それさえなければなんてことは言わない。

「僕は君と戦いたくなかつた。でももう全て遅いんだ。」

何があっても彼とは敵対していた。

「貴様あああ！！貴様には悪としての誇りはないのかあ！？」

私達と彼とは全てが異なっているからだ。

「ネギ君、ワシ等はみんな君の事を期待しておったのじゃよ。それなのに君はみんなの期待を裏切ったんじゃないか！！」

その夜に鳴っていた梟の声は、

「安心して、ネギ、私は、私だけは！あなたの味方だからねっ！！」

私達人類と、

「さあ、此処から始まるのだ！全知と全能は手に入った！！後は神の座を手に入れ私は、ネギ・スプリングフィールドは！！全ての頂点に立つのだ！！！！」

全知全能の神と化したネギ・スプリングフィールドとの、

「ネギ、私は馬鹿だからあんたが何をしたいのか、何をするのか全然わからないけど。」

それでも！このかを！みんなを殺したあんただけは！！絶対に許さないんだから！！！！」

戦いのゴングだったのかも知れない・・・

「かくして、役者は揃い、舞台は幕を開けた。」

運命の流れは誰にも変えられない。そう、私以外にはな・・・」

魔法先生ネギま！狂った科学者は常に迷子く銀河ぶつちぎり！超バトル編＞

近日公開（嘘）

第6種禁忌 話が進まない（後書き）

はい嘘予告です。物語を作ったらやってみたかったことの一つです。あといくつかネタバレも含んでいます。

というかここからネタを拾うことがあるかもしれませんが。ないかもしれません。

それではまた明後日ノシ

PSいつも明後日っていうけど明後日だった試しがないですよね（笑）

第7種禁忌 どちらもミスが目立ちます。(前書き)

こんにちは珍しく言ったとおり明後日になってしまいました。
今回はやっとネギが麻帆良に入ります。
ではどうぞ

第7種禁忌 どちらもミスが目立ちます。

「マナ」

正月が明けて暫くした日の夜。

私たちは学園長の招集により、世界樹の前の広場に集まっていた。学園中の殆どの魔法先生、魔法生徒が集まっていた。

例外はガンドルフイーニ先生の娘など、幼稚園組等だけだった。

あのエヴァンジェリンですら来ていたから今回の招集はよほどのことなのだろう。

「オッホン！」

学園長が咳払いをして全員の注目を集める

「今回皆に集まって貰ったのは、皆に聞いてもらいたいことがあるからじゃ。」

今年の二月からこの学園に新しい教師が赴任してくる。」

新しい教師が赴任してくる事は別段珍しいことではないが、何故そんな中途半端な時期なんだ？

「フンっ！そんな下らん事を言う為だけに私を呼んだのか？ならば帰らしてもらおう！」

案の定エヴァンジェリンが騒ぎ始めた。

「これこれエヴァ、話は最後まで聞くもんじゃないよ。」

新しく入ってくる教師の名前はネギ・スプリングフィールド、あのサウザンドマスターの娘じゃよ。それで皆に頼みたいのは彼女を補佐してやってくれないか、ということじゃよ。」

ほう、あのサウザンドマスターの娘か。報酬さえ払ってもらえれば何も問題ないがね。

「なに!!!?それは・・・フフツ面白いことになりそうだ。なあ
ジジイ?」

エヴァはエヴァで何か企んでいるようだ。

「詳しいことは各自追って連絡する、では解s」上空から高速で飛
来する熱反応を探知、結界内に侵入します。」「

エヴァの従者の茶々丸が警報を発した。

「なんじゃと!?皆警戒をせよ!」

「結界内に突入します3・2・1進入しました。」

ちょうどこの広場の上空に夜空で見え辛いが、黒い服を着た者が落
下してきた。

「馬鹿め、自ら捕まりに来るとは。ジジイ!先制攻撃だ!リク・ラ
ク・ラ・ラック・ライラック!魔法の射手 連弾・氷の11矢!」

エヴァがフラスコに入った魔法薬を投げつけ攻撃を放つ。

ガガガガガガガガガッ!

魔法の射手は一つ残らず彼の取り出した拳銃により撃ち落とされた。

侵入者は広場に集まった人の輪の中心に降り立った。

月が雲に隠れて辺りは暗く、顔は見えなかったが顔を覆うものはない
正体を隠すつもりはないようだ

「くそつ、抵抗するな!抵抗するようなら撃つぞ!」

ズンッ!

一番近くにいたガンドルフィー二先生が自分の拳銃を構えて侵入者
に警告をするが、侵入者に簡単に地面に押し倒され、人質になっ
てしまった。

「さて、これで少しは話を聞いてくれるかな?」

侵入者がその場の全員に声を掛けた。その声は男性で、思ったより
も若く、二十代に差し掛かった程度に思われる。

「ふざけるな！ガンドルフイー二君を離せ！」
ギンツ！ドサドサドサ！

全身に氷水を掛けられた様な感触が走った後、意識が飛びそうになった。

現にその場に多くの人が倒れていた。それは隣にいた刹那も例外ではなかった。

「イナゴも群れば脅威になる。少々面倒だったので間引きさせてもらったよ。」

「なあに意識を失っただけだ、問題はない。」

「我々が虫だとしても？それで何の目的でこの麻帆良に侵入したのじや？」

平然とした様子の学園長が侵入者に問いかける。

「はあ？なんの用も何も「ふざけるな！ココネに何をした！？」あれはクラスメイトの春日美空？倒れている者から考えてあの現象はある一定の強さで選別している物だと思っただが、違っのか？」

「落ち着けよ。俺は何もしてないぜ？ただ威嚇しただけだ。正確には威圧だな。」

「嘘をつくな！ココネを元に戻せ！！」
ゾクツツ！

また同じ感覚が全身を襲い、また気を失いそうになった。
何故同じものを春日が使えるんだ？

「ほお、覇気を使えるとは・・・」
大丈夫だ。ただ気絶しただけだからな。例えらとお化け屋敷で吃驚しすぎて気絶するのと何も変わらない。傷も付かず、後遺症も残らない便利な技なんだぜ？」

その言葉を信じたのかは分からないが、春日はそれ以上侵入者にも聞かなかった。

「それで話を戻すが、なんの用かは此処の学園長に呼ばれたからだ。爺さんあんたが此処の学園長か？」

「如何にも。じゃがワシはお主の様な者を読んだ覚えはないぞ？」
その瞬間高畑先生を筆頭に残った魔法使いが全員杖を侵入者に向けた。

「何を寝ぼけたことを！俺を教師につて呼び出したのはそつちだろ？」

侵入者は何故か激昂している。

「君の名前は？」

その時雲が晴れ、侵入者の顔が月光りの下に曝された。

「ネギ・スプリングフィールドだ・・・」

燃えるような赤毛の青年だった。

恐らく顔はサウザンドマスターに似ているのだろう。

パーツの一つ一つを見れば確かに似ているが、その余りにも禍々しい嗤い方のせいで、見る者に全く別の印象を与えるのだ。

「見え透いた嘘を吐くでない！ワシ等が呼んだネギ君は女性じゃぞ！
！
！
確かにナギには似ておるが、その程度の小細工が通用すると思つたのか！！」

確かにさつき学園長はサウザンドマスターの“娘”と言っていた。
彼はどう見ても男性にしか見えない。

「ああ、成程そついうことか・・・少し待ってる。」

ゴリツ、ガリガリ、グシヤ、メキメキ

人の体を破壊するとき似た音を立てながら侵入者の体が形を変えていく。

「これでよろしいでしょうか？」

そこに姿を現したのは慈悲の微笑みを浮かべた豊満な体つきをした女性だった。

「アリカ様……」

高畑先生の呟きが辺りに響き渡った。

学園長が血相を変え、女性の顔を隠すような位置に立った。

「分かった、君をネギ・スプリングフィールドと認めよう！詳しい話を聞きたいので、こちらに来たまえ！」

アリカとは一体なんのことなんだ？学園長は何を隠そうとしているのか？

疑問は尽きないが、女性は学園長と共に女子高エリアに向かって行った。

（ネギ）

こちらスネーク、麻帆良の侵入に失敗しました。

嘘です。

こんばんは、マッドなネギ（）、九歳です。

応接室は只今空気が重いです。

「それで？君は何者なのじゃ？取敢えずその変装を解いてもらおうか。」

えっ？またそこから！？

「ネギ・スプリングフィールドの名を騙り、彼女の母親に似た姿で現れるのはちと悪質ではないかのう？」

それならあんたが人間を騙っているのに吃驚だよ。

「先ほども言いましたが、私はメルディアナ魔法学校の卒業課題で来たネギ・スプリングフィールドです。」

「ネギ君は現在九歳の少女じゃ、君の様な大人の女性ではない。」
高畑とか言うのがこっちをガン見しています。

とうかこの爺さん同封した履歴書を見てないな。

「なるほど年が引つ掛かっていたのですか。ならこれでどうでしょうか。」

また体の骨格をかえ九歳時の姿になる。

「確かにネギ君のようじゃが、君の変装能力は目の前で二度も見ている。君が本物だという証拠がないのじゃよ。」
ああ、この骨格変形が仇になったか。

「ですが、もし仮に侵入者だとしたら初めからこの姿で来ると思いませんか？

初めは男性、次は女性、最後に少女なんてまどろっこしい事はないでしょう？

とうか学園長、あなたうちの校長が送った書類に同封した履歴書読んでいないでしょ！」

「ふお！？」

何を驚いているんだか・・・

今必死になって書類を漁ってやっと履歴書を見付けたようだ。

「おお！確かにあつたわい！何々？」

『子供の姿で教師をするのは流石に拙いので大人の姿でいきます。』
要約するところ書いてある。

だから大人の姿で行ったのに。

「しかしなぜあんな時間に、あの姿で、あのような登場の仕方をしたのじゃ？」

「ああそれなら、時間はウェールズからぶっ続けて飛んでいたらあんな時間になったんです。あの姿は男の方が飛ぶのに楽だから。登場の仕方は乗っていた物がバードストライクをしたからです。落ちてきたら行き成り攻撃されて反撃した。以上です」

全て真実だ。赴任まで時間があるから秋葉に行こうとしたらちょうど真上で鳥がメーヴェのエンジンに吸い込まれたのでしまいなから落ちていたのだ。

「確かにこちらの非が大きそうじゃのう。あい分かった。すまなかつた謝罪しよう。

それと大人の姿で居ることは賛成なのじゃが、先の姿は少々問題があつてのう……。

別の姿はできんかのう？」

それなら別にかまわないので、普段取っているココ・ヘクマティアルの姿になる・

「フフフ これはどうでしょうか？」

「なあ！！？ヘクマティアル！！！」

高畑が驚いている。

あっ！しくつたわ……高畑は悠久の風の高畑か！

ヤベえどうしよう？

第7種禁忌 どちらもミスが目立ちます。（後書き）

ネギがHCLと関わりが有るのがバレました。
次回はそこらへんを掘り下げます。

あと、あかいろさん。

訂正に関しては、これ以上は今後の話に使いつもりなので減らせません。

活動報告にも言い訳が書いてありますが、単純に人口が六分の一に減ったと考えてください。

重傷者はネギの無限に近い超物量殲滅で、死んだ人〃空爆を受けたところにいる人。無傷の人〃受けなかつた人と考えてください。

あと一昔前のナパームの空爆ですら20m間隔で死亡率が85%越えているので封印されたくらいですので、不可能ではないと思います。

ではまた明後日ノシ

第8種禁忌 それは詭弁だよ（前書き）

こんばんは。何時ものように明後日といいながらの次の日投稿です。今回は会話が多いので少々見づらいかもしれないです。

第8種禁忌 それは詭弁だよ

（タカミチ）

あの侵入者がネギ君だということには驚いたが、今の変身を見て更に驚いた。

ネギ君が変身したのは僕等悠久の風が長年追いかけていた、最悪の武器商人の一人“ココ・ヘクマティアル”だったからだ。

彼女の変身の仕方など幾つも疑問が湧いていたが、それらが全て吹き飛ばすほど衝撃的なものだった。

「ネギ君、一つ聞いていいかな？その姿は一体どういうことだい？」

「ああ、あなたは悠久の風でしたね。この姿は気に入りませんか？たか？」

「そういうことを聞いているんじゃない！君がココ・ヘクマティアルなのかと聞いているんだ！」

僕は感情を抑えきれずに怒鳴ってしまった。

「まあ、そう名乗る時もあります、とだけお答えしておきましょう。」

「君は兵器なんかを売って何とも思っていないのか！君が売ったもので人が死んで行くんだぞ！」

ネギ君は人が死んでいくことに何とも思っていないのか？

彼女はまだ九歳、性格の修正が出来るかもしれない。

きちんと常識を教えてあげなくては。

「悠久の風はどいつもこいつも同じような事を言いますね？私が売った物をどう使おうと消費者の自由ですよ。」

「そんな事は関係ない！人が死ぬんだぞ！」

「あなた達は本当にそれだけですわ……。」

私たちが法を侵しているというのならば分かります、買った人が嫌がっているというのなら売るのを止めましょう。ですが現実には法に沿って売っていて、誰も彼もが欲しがっている。だからこそ我々が売っている。需要と供給ですよ？」

彼女は人が死ぬところを見たことがないのか？
だからこんなことが言えるのではないのか？

「君が言っているのは唯の子供の屁理屈だ！お金は命には代えられない！」

人を殺すことはいけない事なんだぞ！」

「あははははははは！」

笑っている？何故笑うんだ？ネギ君・・・

「ネギ」

「それを言うのなら、あなたも私の父親も大量殺人犯ではないですか。」

更に言うのならあなた達魔法使いは常に棒切れで人を殺してきているではありませんか？」

「それは違うぞい、ネギ君。魔法は人を傷つけるのではなく、人を救うために存在するのじゃ。」

ここで口を挟むか、学園長。

「そんな事を言うなら彼ら軍人だって、他国の人間から自分の国の民を救うために暴力をふるっています。」

侵略者だって自国の民を豊かにするために襲っています。

それとあなた方は論理のすり替えをしています。

戦争をして人を殺しているのは私ではありませんよ。」

「でも君が売った。そう！私が売ったから！あなた達はそこを責めますが、アメリカではスーパーで銃を売っている。

日本でだって包丁で殺人を犯す人が居る。でも、だからと言って売った側を世間は責めていますか？

責めているのは、いや騒いでいるのはあなた達魔法使いだけです！
NGOでさえ我が社から銃を買っていきますよ。

一般人に自分達より強力な力を持たれるのがそんなに怖いのですか？」

二人は口を開かない。

「とはいえ今は善悪の二元論なんて下らない物よりも、私の扱いがどうなるのかが知りたいのですがね？」

「下らない・・・そこには承服しかねるが、確かに今話す事ではなかったのう。」

「学園長！！」

「落ち着きたまえ高畑君。ところで君の扱いを決める前に質問なんじゃが良いかのう？」

高畑はさっきから何を怒っているんだ？さっぱり分からん。

「いいでしょう、答えられる範囲でなら。」

「君は先の会話で『あなた達魔法使い』と言ったが、君は魔法使いではないのかね？」

そこに突っ込むとは流石と言うべきか。

「ああそこですか。私は魔法も使えますが、基本的にそれ以外を多用するので魔法使いとは言えないのですよ。」

「成程成程、してそれ以外とは？」

「科学技術と符術です、基本はね。」

「確かに君の会社は転移符などを大量に売っていたのう」

おっと、これ以上こっちの手を曝すわけにはいけないので話を戻さねば。

「それで私の立場は教育実習生で宜しいですか？正規雇用されるわけにはいけないのでリスニング用の 外人アルバイトでもかまいませんが。」

「その事なんじゃが、英語の教師と2 - Aの担任をやって貰いたいのじゃよ。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

？

耳がおかしくなったようだ。

「すみませんよく聞き取れなかったのですが？」

「英語の教師と2 - Aの担任をやって貰いたいのじゃよ。」

あつ、これはヤバい、逃げよう。

「それではこの話はなかったということぞ。」

「それでいいのかね？君はこのままでは卒業課題を果たせず、立派マキな魔法使いになれんぞ？」

そこを勘違いしていたからここまで強気だったのか。かなり面白い勘違いをしているな。

まあ順当な魔法使いならそれは致命的だけどな

「あなたは勘違いを幾つかしています。」

「勘違いとな？」

「はい。一つ目に私は立派マキな魔法使いを目指していません。」

「ひよ！？」「はい？」

学園長と高畑はかなり動揺している

「二つ目に私はメルディアナで学ぶことが目的であって、卒業する事が目的ではないので、学び終わった今となっては中退でもかまいません。」

「じゃがそれでは就職が難しくなるぞい？」

そこを突くのは悪手だよ。

「私が幾つの会社を所有していると思ってるんですか？金なら腐るほどありますよ。」

「確かに君の会社は表裏問わずに手広くやっていたのう・・・。」

「三つ目に私はハーバード大学で教員免許を取っているので、他の学校に行っても普通に教師になれるのですよ。」

「うーむ、何が気に食わんのかね？」

え？分かってないの？

「普通こんな中途半端な時期から教師も担任もやらないでしょう？
新年度が始まってからやるならともかく、

この時期では教育実習生がせいぜいでしょう？」

教育実習も先生ですよ。」

「しかし今の2-Aの担任は高畑君なんじゃが、出張が多くてのう。
新しい担任が欲しいのじゃが・・・。」

こいつらは馬鹿ではあるまいか？

「新年度まで待つか、副担任を昇格させればいいのでは？」

「むむむ、ならば新年度からならやってくれないかのう？副担任は人手が足りなくて居ないのじゃ。」

「嫌ですよ。今学期からやるのなら、教育実習でも少なくとも新年度までは先生をやったのですから・・・」

私は政争の道具には使われたくないのだよ。

「それではこちらがやったと承認しないと云ったら？」

「他の学校に行くだけですよ。」

どんだけ必死なんだよ学園長・・・

「妥協案として三月いっぱいまでは居てあげますよ。そこから先は三月の後半に交渉しましょう。」

「仕方がない、それで良しとしよう。」

どこらへんが仕方がなかったんだ？

この人たちは今まで全てが自分達の思い通りになつてきたんだらう。自分達が正しいと思いつけてきたから相手を否定する事に容赦がない。

だからこそ全力で相手を潰せるのだらう。

それとは正反対に私は相手がなんであらうと、実験対象でしかない。いや実験というのもおこがましい。

全てが成功作で失敗作などが無いのだから、全てが材料であり道具でしかない。

だからどんな相手であらうと感情は一切関与する事がない。

とは言え面白い・・・

これから彼らとは何度も衝突するだろう。

“ 自称正義と絶対悪性 ”

果たして最後まで生き残るのはどっちなんだろう・・・

（学園長）

恐ろしい子供じゃった。

彼女の眼には世界がどのように映っているのじゃろうか・・・

彼女は大人びているのではなく、精神的に大人なのじゃろう。

高畑君はまだ修正が効くと思っているじゃろうがまず無理であろうな。

風の噂でメガロ・メセンブリアを襲ったのはネギ君だという物もある。

ウェールズを襲おうとした報復らしい。

下手に藪を突いて蛇で済めばいいが、竜や蛟が出ようものなら洒落にならん。

果たして彼を繋ぎ止めておくことが出来るかのう？

第8種禁忌 それは詭弁だよ（後書き）

彼らは本当に相手に否定されたことが少なそうだし、それを受け入れたことがなさそうです。

あと作者は魔法先生たちには疑問がありますが、とくに嫌いというわけではありません。

一樹さん、ネギ達のクローン事情はもう少ししたら書きますので、そうなっているのかはそこでわかります。

楽しみにしていてください。

それではみなさんよい夢をノシ

第9種禁忌 承服し辛いです(前書き)

明後日どころか次の日ですらなくなったbīīīīyです。
ついに十話になりましたわーい。
ではお楽しみください。

第9種禁忌 承服し辛いです

（ネギ）

マツドなネギ（）、九歳です。

昨日からホテル暮らしが始まりました。

最上階のスイートルームを二カ月契約で借りました。

もちろん現金一括先払い、金持ちの常識です。

買い取りは学園長たちに漬け込まれる隙になるかも知れないので、時間的区切りをちゃんとつけます。

今日は教師になる事についての諸注意と説明を受けます。

余計な仕事を増やされないように、契約書類を持って学園長室に向かいます。

道案内すると高畑が騒いでいたが、全知持ちの私に迷子は一番縁遠いものです。

電車を降りて女子高エリアに向かっていくと、道の真ん中で金髪幼女が仁王立ちになっています。

昨日攻撃を仕掛けてきた幼女だ。

探しているのが私ではないようなのでスルーします。

学園長室についたのでドアをノックする。

ノックしてもしもし

この世界にジヨジヨがないのが残念だ。

「どござ」

あれ？学園長の声じゃない？

「失礼します。」

入ると昨日の魔法先生と魔法生徒がズラッと勢揃いしていた。

「おお、よく来てくれたのう、ネギ君。」
部屋中がざわついた。

「はあ、それでこの人数は何なんでしょう？噂の新人潰しですか？」
「いやそんなことするわけないじゃろ、しかも儂の目の前で……」

「そうです！マギステル・マギを目指す者がそんな卑劣な真似をするわけがありませんわ！」

金髪の女が叫ぶ。

なぜそこまで過剰に反応するのか不思議だ。
もしかしたら凶星だったのか？

「まあ、冗談はさておき、なぜこれほどの人がここに？」

「これは君に紹介しようと思っと思って呼んだのじゃ。」

「紹介？私は教育実習生ですよ？普通は学年の先生だけではないでしょうか。」

「そのことについてなんじゃがのう、メルディアナの校長と今電話が繋がっていて、君に言わなければならぬことがあるそうなんじやよ。」

ヤベえ嫌な予感しかしない。

『もしもし、ネギ？そこにいるのか？』
マジで繋がってるよ。

「はい校長なんでしょうか。」

『先程近衛門殿に聞いたら、課題を二カ月で済ませようとしたそうじゃないか。』

「それが何か問題でも？」

『課題は一年間やって初めて遣り通したと認められるのじゃ。』

アーニヤの様に占い師なんて時間設定が曖昧なものでもそうなのじゃから、

学校の様に行事が一年通してあるものなら尚更じゃ。』

「つまり何が言いたいのですか？」

握った手が震えているのがわかる。頭の中が白く染まってきた。

『一年間やれ「他の学校に行きます！」』

被せてしまったが問題無い、こんなところに一年間も居られるか！

『・・・ワシはのう、ネギ。そろそろ一般常識を学んでほしいと思っ
っているのじゃよ』

一般常識！！？魔法使いにそんなことを言われるとは思わなかった。

「フザケルナヨ、ジジイ。オマエラニ常識ヲ語ル資格ガアルトデモ
？」

怒りのあまり片言になってしまった。

『わしが言う一般常識とは魔法側での事じゃよ。』
あつ成程、確かに言われてみればアーニヤと学校の友人だけでは魔法側の常識を全て知ったとは言い難い。

何人か他の人間の姿で魔法側に入り込んではいるが、此処で情報収集するのも悪くはない。

だがそれでも贅沢を言うならば、ネギとしては来たくなかった。

『納得したのなら課題の条件を発表する。一つ教師として一年間過
ごせ。二つ魔法先生として学園長の指示に従え。以上じゃ。』

「二つ目が承伏し難いですが了解しました。」

これは嵌められたな。別に中退になってもいいが、好奇心を刺激されたままでは帰れない。

「というわけじゃ、ネギ君。これからもよろしく頼むぞ。所でエヴァはどうしたのじゃ？」

エヴァ？

「？初号機ですか？」

「何の事じゃ？」

その時、ドアが勢いよく開いてさっき道の真ん中で仁王立ちしていた金髪幼女が緑色の髪のアンドロイドと一緒に入ってきた。

「ジジイ！あの女は全然来ないぞ！」

「おお、エヴァ！彼女ならもうそこに来ておる。」

ああ、私を探していたのか。昨日と姿が違うから気付かなかったのだろう。

「ネギ君、彼女がエヴァじゃ、君の道案内を頼んだのじゃが、自力でたどり着いたからのう。」

「昨日と顔が違うじゃないか！そんなので見分けがつくか！！！」

「それも込みで聞きますが、普段自分はどのような姿をしているべきですかね？」

男性？女性？青年？中年？老人？どんな姿でも結構ですよ。希望の姿があるなら写真があればその姿でいきましょう。」

「フォツフォツフォツ。そんなことせずとも、君の本来の姿で構わんよ。」

笑っているけどいいのかなあそれで・・・

「本来の姿は昨日あなたが必死に隠そうとしたから聞いているのですかね？」

「なにっ？成程そうかそれで・・・あい分かった。今の姿のままがかまわんよ。」

「それだと高畑さんが文句がありそうですけど・・・」
現に睨んできているし。

すると幼女が騒ぎ始めた。

「おい、私を無視するな！女！昨日の技は何だ！？」
答えるわけがない。

「お譲ちゃんゴメンね、今学園長と大事な話をしてるから後にしてね。」

「お譲ちゃんだと！？私を子供扱いするな！さっさと答えんか！！」
うるせえ餓鬼だな。

「そうだ、あそこのシスター服着ている女の子が同じ技を使っていたからあの子に聞こう」

「むっ！確かに。おい、春日！昨日の技は何だったんだ！！」

「ちよ！？アタシっすか！？」

チヨロいwww

簡単な意識誘導魔法にこれほどあっさりかかるとは。

シスターが幼女の相手をしている間に学園長と細々した条件を詰めて、後は自己紹介のみとなったところで、意識誘導が切れた。

「おい、春日は知らないと言っているぞ！いい加減答えろ。」

「ワシにも答えてくれないかのう？あれは魔力も気も使ってはおらんかった。なぜ春日君に使えたのかのう？」

学園長まで聞くのかよ。

もう五月蠅いから答えるか。

あんな大道芸にしかならないようなものはバレても大した問題にならないし、彼女以外は使えないみたいだから。

「あれは“覇気”と呼ばれている物です。」

「ハキ？ “覇気がある” とかの覇気？」
高畑正解。

「そうです。その覇気です。あれはその中の霸王色の覇気です。」
「してその効果は？」
今説明するよ、うるせえなあ。

「単に威圧して相手を気絶させるだけですよ。
確固たる自我や信念が無いと防ぐのは無理ですが、雑魚と強者を選別するのに楽なので。」

「倒れたものが雑魚だと？」

「私の基準ですとそうなりますね。」

みんな不満そうだ。そりゃあそうか、面と向かって雑魚宣言されたのだから。

「ではなぜうちの美空は耐えられたのですか？」

大人のシスターが訪ねてきた。

「身内から見て、お世辞にも美空は強いとは言い難い子です。」

しかも同じものを使えるのはなぜ？」

霸王色の覇気を持っているんだからそこまで言われるような子じゃないと思っただけだな。

「肉体的な強さは関係ありません。」

耐えられたのは確固たる信念があったからでしょう。

霸王色の覇気は天賦の才です。

魔法が百人に一人の才能ならば、霸王色は一千万人に一人。

文字通り、霸王になる運命の者が持つものです。

古くは秦の始皇帝、日本では織田信長、最近ではアドルフ・ヒトラーなどですね。」

「うえ！ アタシが霸王ツすか？ て言うかみんな殺されているじゃないっすか！」

「ミソラ、すごい」

小さなシスターに尊敬されている。

「みんな殺されているのは分かりやすい人たちがたまたまそうになっただけですよ。」

使えたのは私に誘発されたからでしょう。

それでは時間も押してきているので、自己紹介をしてお開きにしませんか？」

ぶっっちゃけそろそろ面倒臭い。

結果だけ言うと。シスター組は混乱して幼女は考え事、学園長はホクホク顔だった。

えっ？俺は内心今にもブチギレそうだった。

それより明日からの新学期が鬱になる。

蒐集癖が此処で祟ると思わなかったorz

第9種禁忌 承服し辛いです（後書き）

今回は前回言ったことを覆しています。今日書いていて気づいたんですが、MMの被害人数間違えたのがここに響いてきましたOTLではまた明後日（明日）ノシ

第10種禁忌　それでも僕はやっていない。（前書き）

こんにちは

この間は駄文をさらしてしまい真に申し訳ありませんでした。

そのままの文章を編集するか消して書きなおすか悩んでいたところに、

友人が電話をしてきて、「見苦しいから消せ」と開口一番に怒鳴られて決心がつかしました。

ここからはネギの悪辣な悪戯兼実験でタカミチが社会的に破滅していきます。
ではごっご。

第10種禁忌 それでも僕はやっていない。

「ネギ」

こんにちは、マッドなネギ（ ）です。

これから始業式d【キング・クリムゾン！】

だからセリフぐらいは最後まで言わせるよ！！

時間が飛んでしまったので、受け持ちの教室の前です。

高畑としずな先生と一緒にです。

教育実習生扱いですが、来年度からは副担任になるので第一印象が大事です。

はあ、もう面倒になったきたから魔法生徒を一人、誰か拉致って脳内の情報を全部漁ろうかな？

というか高畑の視線がさつきからウザイ。

なんか子供に対して理解のある大人を演じている感じ……。

実際本人はそのつもりなんだろうけど、こっちはもう大人とかいうレベルじゃない位の年齢なのに。

取敢えずドアの上に挟まっている黒板消しに幻術と重力魔法で重さを千倍にして見ましよう。

「フーフー 高畑先生、お先にどうぞ。」

おっ？顔が歪んだ？

「その笑い方を止めてくれないかな？背筋が寒くなる。

取敢えず後に続いて入ってきてくれ。みんなに紹介しよう。」

「はい、楽しみにしています。」

さて、黒板消しのトラップをどう回避するのか楽しみだ。

ガラガラ

「やあ、みんなおはカペっ」バキッ!!
たぶん普通の重さなら背後に落ちるくらいの速さで入って行ったんだろうが、

重力魔法で加速していたので、まともに頭頂部にクリーンヒットした。

いや・・・こつも・・・諸に・・・喰らうとは・・・笑っちゃ・・・ダメだ・・・腹が痛い。

教室のみんなは何が起きたのか不思議に思っているようだ。いつもは避けているのだろう。

「ははは、みんなが元気そうで嬉しいよ。」

高畑が乾いた笑い方をしているがもう耐えきれん。

「ギャハハハハハハ、ヒーヒーヒー、ホーホー」
バンバンバンツ

地面を転げながら腹を抱えて笑ってしまった。不覚。

中からは見えないうように幻術を張ったが高畑とせずな先生にはバレているだろう。

メルディアナの校長並みに悪戯しやすそうな人を見付けた。
今日の収穫はそれだけで十分だ。

まずはバイアグラ茶辺りで攻めてみるか。

その後も自己紹介が続き朝倉とかいう子が質問してきたが、全て嘘を吐いたらなんか一部に尊敬された。

（高畑）

今日の2-Aには何があったんだろう。

幻覚魔法は春日君かと思っただが、彼女は重力魔法までは使えないので油断していた。

おかげでネギ君に笑われてしまった。

かなりの重量で首がまだ痛い。

「それじゃあホームルームを始めるけどその前にみんなに紹介したい人が居るんだ。

それじゃあ入ってきてくれ。」

ネギ君が入ってくると、みんなが騒ぎ始める。

「あれ誰？」「高畑先生の恋人じゃない？」「絶対違うわよ！」「冗談だつて明日菜。」

全部こつちまで聞こえてるんだけどね（汗）

「皆さん初めまして、教育実習生のネギ・スプリングフィールドと申します。

ウェールズから来たばかりなので、まだ日本に慣れていませんが仲良くしてくださいね。」

流石ネギ君は堂々としているなあ。

今日は始業式なので、諸注意だけにして後は生徒たちとネギ君との交流の時間にした。

「はいはい、じゃあ生徒を代表して麻帆良のパパラッチ事、朝倉和美がネギ先生に質問するわ！」

ネギ君はみんなの元気に少し引いていたけど、たぶん仲良くなれるだろう。

「じゃあ質問ね。ネギ先生の年齢は？」

「大学をスキップしたので今20歳です。」
ああそういう設定だったね

「え？スキップって？」

「飛び級のことだよ。」

「へえー？じゃあ頭いいんですね！」

「次は恋人がいるのか！」

「ウェールズにいたころは片思いでした。（注意：相手は女です）」

「ええ〜？告白したりとかはしなかったんですか？」

「告白するには少し私に問題があったので。（注意：自分も女だからです。）」

e t c

質問が長かったので割愛するが、なんとか打ち解けてくれたようだ。

だがその日から僕の転落の日々が始まった。

次の日の朝、職員室に行くとネギ君が授業の準備の確認をしていた。部屋に入るとネギ君がこちらに気づき、お茶を淹れてくれた。

「おはようございます、高畑先生。お茶をどうぞ。」
正直とても美味しかった。

ネギ君はこんな技術をいつ身につけたんだろう？

普段から自分で淹れていても、ここまで上手にはならないだろうと言えるほどの味だった。

ネギ君の校内での補佐には暫くしずな先生がつくことになっている。そして僕も授業の補佐に付くことになっているので、教室で会う事が多くなる。

ネギ君の授業を見ているとミスもなく、とてもよく工夫されていて、

みんな積極的に授業に参加している。
よく勉強してきたのが分かる。

そのまま授業を見ていると、ズボンの一部に違和感を感じた。
簡単に言うとな股間が出っ張っているのだ。

誤解の無いようにいっておくが、自分はやましいことなんて一切考
えていなかった。

少々不自然だが、ズボンの皺に見えない事もないのでそのままにし
ておく。

このまま下手に弄ると隣のしずな先生に気づかれる恐れがあるから
だ。

それだけは何としても避けたい。

突発的に覚醒しているだけなら数分もすれば静まるだろう。

それは今までの経験で分かっている！キリッ

だがこの判断は間違いだったと後になって気付いた。

授業が終わるまで、股間の荒らぶる息子の存在を忘れてしまってい
た。

授業が終わり、まだ教壇でプリント整理をしているネギ君にしずな
先生と共に声を掛ける。

「お疲れ様、ネギ君。」

「お疲れ様です、ネギ先生。」

「ありがとうございます。しずな先生、高畑先生」

ネギ君はプリントから顔を上げてお礼を言った。

「授業はどうだったかい？」

「大変でしたけど、皆さんよく聞いてくれてとてもスムーズに進み
まし・・・って、

キヤアアアアア！！高畑先生！あなたは人の顔を見ながら何を考
えているんですか！！？」

そう言いながらネギ君が指で示したのは、先程よりも激しく自己主
張をしていた僕の如意棒だった。

もはやズボンの皺だとは言いつでできないほどに膨らんでいて、もう
誰が見ても分かる状態だったのだ。

「ち、違うんだ！ネギ君！！これは君を見ながらとかそういうわけ
じゃなくて！」

「じゃあ生徒を見ながらとでも言うんですか！？不潔です！兎に角
私は先に職員室に戻らせてもらいます！」

ああ、下手な言い訳が更なる誤解を招いてしまったようだ。

しかもここはまだ教室、次の時間は移動が無いのでほぼ全ての生徒
が教室に残っている状態だ。

「あの、だ、男性はその、突発的に、ええと、なってしまうといい
ますから、

あんまり気を落とさないで下さい。ネギ先生には、えと、わ、私
から言っておきますので。」

ああ、しずな先生の気遣いが痛い。

しかし息子の猛りはなかなか収まらず、その後授業がないので早退
させと貰いそれ以上の醜態をさらすのをなんとか防ぐことに成功し
た。

その後ネギ君の誤解は解けたようだが、生徒からは自分達を狙って
いるロリコンだと勘違いされ、更にその噂がものすごい速さで学園
中の女性に広まってしまった。

男たちは突発的な所を見られただけだというこちらの言い分を大部
分の人間は信じてくれたが、信じてくれない人間もいた。

二日もすれば、ネギ君が勘違いだったと弁明してくれたおかげで誤

解は解けたが、それでも僕はロリコンなんじゃないかという疑いはあまり解けなかった。

（ネギ）

どうも、マツドなネギ（ ）です。

今回は高畑に特性のバイアグラ入りのお茶を飲ませました。

効果は余り変化はないですが、その膨張率と持続時間を計ります。

結果は全知で全て知っていますが、やっぱり確かめないといけませんね（笑）

膨張率は授業が終わった時に確認が出来ましたが、持続時間は高畑が早退した為知ることが出来なかった。

次は噂が広がる速度を調べようと思ったのですが、気付いた時には殆どの地域に広がっていて、確認が取れなかったので後何回か調べないといけませんねwww

第10種禁忌 それでも僕はやっていない。(後書き)

どうだったでしょうか？

前のよりはまともにしたつもりですが、正直これも面白いのか面白くないのかわかりません。

でもしばらくはこの方向で行こうと思っています。

それにしてもよくSSにある腕試しって誰が言い始めたんでしょうね？

よくSSに書いてあるので入れたんですが、原作を読みなおして見るとそんなシーンはどこにもないんですね？

不思議な話です。

では次はまた明後日ノシ

第11種禁忌 急展開（前書き）

こんにちは。

前のほうがよかったという意見が出てきて落ち込んでいるBill
yです。

まあ前回は分解してどこかに組み込むつもりです。

正直週間アクセス数が一万を超えていて、恐怖を感じています。
皆さんが楽しんでいただけているようなら幸いです。

第11種禁忌 急展開

（ネギ）

こんにちは、マッドなネギ（ ）です。

今回は麻帆良での最近の私の一日をお伝えいたします。

教育実習生という名目のはずなのに、出張ばかりで仕事をしない高畑の代わりに仕事してその日の仕事を終えます。

「今日も高畑先生は居ないんですか？しずな先生。」

「ええ、今日の夜には帰ってくると思うんですが。」

「ではこの仕事は先に片づけておきますね。」

「いつもいつも済みません。」

職員室であたかも高畑が仕事をしないようなニュアンスで周りに聞こえるように話す。

こういうところでさりげなく高畑の周りの好感度を下げしておく。

「所でしずな先生、今夜一緒に食事をしませんか？」

「いいですよ。何時にしますか？」

さりげなくデートに誘う。

まさか彼女も女に狙われているとは思うまい。

その後、外部を経由して学園で開いた自分のクローン達の店に行き、そこで資材を仕入れます。

開いた店は携帯電話や、音楽機器、エア・トレックなどの電子製品を主に扱っています。

珍しいものでは、レアメタルのインゴットも扱っています。

最近うちの生徒の超が大量に仕入れて行ったそうで若干怖いです。

資材を仕入れた後は大学エリアへ行き、外でも出来る研究をします。主に汎用レガリアの研究です。小型化と性能の向上、研究界に頼っていたら戦略クラスの超兵器が出来上がったので、自分でもある程度進めます。

そして夜になると自室に帰り、時間がある限り株などで稼ぎます。今夜はしずな先生とデートなので、少しおしゃれをして出かけます。二人で入る店は自分のクローンが開いている店で、生産界上がりの遺伝子改造された野菜や、牛と豚と羊と馬のキメラの肉を出したりしています。

そしてしずな先生に時間軸が違う別荘のおかげで大量生産が可能になった300年物のワインを出します。

しずな先生は私が未成年だと知っているので飲ませてはくれませんでした。今は関係ありません。

ワインの中にこっそりと細胞改良用の生体ナノマシンを混ぜて経過を見ます。

効果が出るのは明日ですので、楽しみにしています。

そしてしずな先生と並んで歩いていると、前から高畑がやってきます。

「あら？高畑先生。今お帰りですか？」

「えっ！？しずな先生にネギ君！そ、そうなんだ、今から帰りなんだよ」

私は全知で高畑がここを通ることを、そして今私達二人に出会うと都合が悪いことを知っていました。

そう貴様はもう逃げられんのだよ！

フハハハハハ！

（高畑）

高畑です。

いま非常にピンチです。

出張から疲れて戻り、心身共にリフレッシュさせる為にレンタルビデオショップに行き、

大人のビデオを借りて帰宅する途中、しずな先生とネギ君に出会ってしまった。

「あら？高畑先生。今お帰りですか？」

「えっ！？しずな先生にネギ君！そ、そうなんだ、今から帰りなんだよ」

いつもならしずな先生と会うのは大歓迎だが今は非常に拙い。

今僕の右手の袋の中には大人のビデオが入っている。

僕は成人なので法には何ら触れてはいないが、それでも精神的な物は少なからずある。

出来れば全速力で駆けだしたい気分だ。

しかしここは袋に注意を向けないようにするのが最善だ。

幸い袋の色は黒いので注視しなければ気付かれることも無かるう。

「あら？高畑先生、何かビデオを借りたんですか？」

おいー！ネギ君！余計な事を言わないでくれ！アメちゃん上げるから！！

「なにか面白い作品があつたら今度教えてくださいね。」

「ああ、いいよ。じゃあまた明日。」

神はいたようだ。この流れでこれ以上会話を続けることは不可能だ。だが二人がすれ違いそうになった瞬間神は僕を見捨てた。

袋の底が突然破けたのだ。

普通ならレンタルのビデオは真つ黒いケースに入れて渡され、普通は何のビデオか分からない。

問題だったのは僕の背がそれなりに高かった事だ。

高所から落ちて勢いの増したビデオケースは地面に当たり、蓋が開

いてしまったのだ。

どれだ！？どれが開いたのだ！？

借りたのはOL物と新妻物、女教師物が二つの計4つだ。
女教師物は確実にヤバイ！

何が落ちたのかはしずな先生の影になつて見えない。

「高畑先生！あなたつて人は！！あなたは聖職者でしょう！！」
しずな先生が悲鳴じみた声を上げる。

ヤバイ、女教師物か！？

「いや、でも普通の男ならこれくらい・・・」

「何が普通ですか！やはり貴方は生徒に劣情を催す最低の人間だったのですね！！」

えっ！？生徒？何を言ってるんだ？

その時目の前に僕が借りたはずのビデオが目の前に突き出された。

「これでも言い訳するつもりですか！！？」

そのパッケージに書かれているタイトルは、『中学生のイケない保
険授業』だった。

「待ってくれ！僕はこんな物を借りた覚えはないぞ！！僕が借りた
のは金髪女教師物だ！！」

「うわぁ・・・」

引かれた。ネギ君にもしずな先生にも。

「つまり、あなたは、あの時、私を・・・」

ヤバイヤバイヤバイ！しずな先生が震えている。

泣いているのか！？

「もう私に近づかないで下さい！！」

バチーン！

そしてネギ君からも

「最低です！」

バチーン！！

ああ決定的に嫌われた。

僕は走り去る二人を唯々見送るしかなかった。

（ネギ）

ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ

私は今にも笑い転げそうなのを抑えてしずな先生を慰めている。

勿論これまでの全てが演技だ。

高畑があこの時間にここを通るのも知っていたし、AVを借りているのも知っていた。

だから私がした事は、中身を全部ロリコン御用達の物とすり替えることと、

気付かれないように袋の底を切ることだ。

まさかあそこまで面白く自滅するとは思わなかったがね。

後は明日学校の職員室で再度慰めることだ。

教員はみんな私たちが二人で出掛けたことを知っている。

そんな中で、しずな先生が落ち込んでいて、私たちに高畑があからさまに避けたらみんなは一体どう思う事やら（笑）

取敢えず今はしずな先生を家に送り届ける。

道中もあたかも心配していますよ的な感じで慰める。

そしてホテルの部屋に帰り今日のメインイベントがやってくるのを待つ。

時間は全知で秒単位まで分かるが、そんな無粋な真似はしない。こういうものは待つ時間も楽しいものなのだ。

ピンポン

部屋の前に付いているチャイムの音が鳴る。

ホテルの受付には来たらそのまま通すように言っているのだ。

「こんばんは、ネギ先生。夜分遅くに申し訳ありません。今お時間宜しいですか？」

「嫌に丁寧ですね。いいですよ。入りなさい？」
「神妙な顔をして入ってくる。」

彼女には、これからする相談は今までの自分の生き方を180°変える物になることが分かっているのだろう。

私に相談し、その解決方法を得るということは、彼女にとって悪魔との取引にも等しい。

しかし彼女はやってきた。

例え悪魔と契約しようとも守りたい物が彼女にはあるのだ。

私は彼女に精神が落ち着くように、特殊配合のハーブティーを出す。

「飲みますか？落ち着きますよ。」

コクン

一度小さく頷き、ハーブティーを飲む。

自分でも緊張しているのが分かっていたのだろう。

落ち着いたのを見計らって私は彼女に問いかけた。

「それで？何か私に相談ごとでも？春日美空さん・・・」

第11種禁忌 急展開（後書き）

今回のあとがきはお休みですノシ

第12種禁忌 問と答（前書き）

こんにちは。少し改變しました。

デすノートばりの会話をいつか書いてみたいです。

高畑いじめは今日はお休みです。

第12種禁忌 問と答

「ネギ」

「それで？何か私に相談ごとでも？春日美空さん・・・」

「はい、でもその前にその変装を解いてくれませんか？薄気味悪いです。」

失礼なやつちなあ！まあ良いですけどね。

「それは構いませんが、あなたもその喋り方は止めたほうがいいですよ。似合っていないので。」

「そうっすか。じゃあそっちも速く解いて下さいよ。」

骨格を変え本来のネギの姿に、つまり九歳の少女の姿に変わる。

すると、美空が待ったを掛けた。

「そうじゃないっす。そっちの姿じゃなくて本当の姿の方っす。」

「？ネギ・スプリングフィールドは生まれたときからこの姿ですが？」

彼女が何を言っているのか全知を使っていないから分からない。

「そうっす、その姿はネギ・スプリングフィールドの姿っすけど、あなたの本当の姿じゃないでしょう？」

！！？何故だ！？何故ばれた！？

「不思議そうな顔をしているっすね？あたしはよく人間観察をするんすけど、先生の行動は確かに少女の行動もしてるっすけど、成人男性、それも中年から老人にかけての年齢の動作も僅かに含んでいっす。」

そこまでよく観察していたなあ。

それにしてもそんなアプローチで気付かれるとは。

「具体的には？」

「・・・この間、パンツスーツの時に職員用のトイレの男子の方に入ってチャックを降ろしても気づいてなかった事があったツす。」

致命的じゃねえか！！！！

ああ確かにやった記憶がある！

チャックから手を突っ込んで出そうと思って出なくて焦った時のことだ！

誰にも見られていないと思ってたのにいいいい！！！！

そこまで見られていたのでは言い逃れできない。

素直に生前の科学者の時の格好を取る。

「これが俺の本来の姿だよ。」

その姿は青年の姿でありながら老人にも見える。

そんな姿だった。

「それで？俺に何をさせたいんだ？悪いが生憎此処のお人好し共と違って親切などというもので動こうとは思わんな。それと但し言いたい事は正確に言うことだ。間違った問いには間違った答えしか導き出されんからな。」

幸いなことにこの女は良い意味で此処に染まっていない。

霸王色の覇気を使えるだけの事はある。

JOOJOで言えば黄金の意思ではなく吉良吉影のような漆黒の覚悟の片鱗がある！

他の全てを蹂躪してでも自分の大切なものを守ろうという覚悟が！
上手く誘導出来れば面白い事になりそうだ。

「あなたに幾つかの質問と、質問の内容次第で幾つかしてもらい事

があるつす。」

ほお、そう来たか。

頭も悪くはないようだ。

「宜しい。どんな質問にも一つだけ答えてやるう。そして、どんな願いで一つだけ叶えてやるう。」

「“どんな願いで”とはずいぶん大きく出たつすね。それにあたしは幾つかの質問と言ったはずつすけど?」

「言っただが俺はお人好しではない。質問すればぺらぺら喋る馬鹿どもとは違うのだよ。」

春日はニヤリと笑い言った

「生徒の質問に答えるのも教師の仕事じゃないっすか?」

「だから“一つだけ”答えてやるのさ。」

「フフフフフフ!」

「クククククク!」

互いに牽制し合う。この雰囲気は麻帆良の人間ではなかなか味わえない。

だからこそ手を貸すんだがな。

「質問は正確に聞け。俺は質問された範囲内しか答えんぞ。」

春日は顎に手を当て、考え込んでいる。

やっと考え付いたのか顔を上げ、見事に正解の問いを導いた。

「あなたの最終的な目的とそれに至る過程を教えて欲しいっす。」

確かに正解だが、唯小娘に負けるのは癪に障るので少し意地の悪い質問をする。

「それでは二つではないかね?」

これに答えられないようでは先の質問に答える必要はない。

しかしある程度の会話は先導してやらないと、中学生には無理だろう

「地図持って住所言っただけ聞いてるだけっすよ。それは二つで一つだからこそ意味のあるものなんすよ。」

60点の合格ラインギリギリだな。

「良いだろう、答えよう。まず私の目的は昔から変わらず、これからも変わる事は無い。」

“全能”を手に入れる事だよ。」

そう私はどんな手を使ってでも“全能”を手に入れる。どんな事をしてでも……

「全能って言うとな知全能の全能っすか？」

「質問は一つのはずだが？」

「自分の説明の仕方が悪いのを人のせいになしないで欲しいっすね。」

「成程、確かにそれも道理だ。その全能で間違いない。」

まさかこんな小娘に言い負かされるとは。

「全知全能の神にでもなる気っすか？」

「ふん、神になどなる気は毛頭ない。」

その時、春日は少し考え込んで俺の根底とも言える秘密を暴いた。

「今おかしな事を言っただっすね？まるで“全能”さえ手に入れば、

“全知全能”の神になれる様な。もう既に“全知”は持っているよ
うな口振りだっただっすね？」

確かに“全能”が本当に何でも出来るなら、“全知”も手に入るかも
知れないっすけど、

逆に言うなら“全能”を手に入れる方法なんて“全知”が無ければ
知り様がない。

もしかして先生は“全知を” 既に持っているんじゃないですか？」
親にも親友にも妻にも教えた事のない（大して隠す気も無い）秘密
が知られた。

勿論あそこまでヒントを出せば気づける奴は気付ける。

だがこの全ての人間の思考がぬるい世界であんな言葉遊びで気付か
れるとは。

やはりこの小娘は面白い。

「そこまで気付いたのなら過程は必要ないな。それで？君の望みと
は？此処まで来て私に出来ない事があるとは思わないで欲しいがね。」

「

春日は下唇を噛み締め、何かを振り切るように言い放った。

「私が望むだけの力を私に下さい。暴力、知力、精神力、財力、政
治力、ありとあらゆる力を、立ちふさがる敵を払い伏せ、蹂躪でき
る力を！私に下さい！」

「守るための力ではないのかね？」

「どっちも一緒ですよ。」

クフフフフフ！

ハハハハハハハハハ！

面白い！実に面白い！！

此処まで強欲な奴に出会ったのはこちらに来て初めてだ！

「よし！分かった。私はお前に望むだけの力をやろう！ただし、お
前の死後は地獄で私に仕えるのだ！」

「まるでファウストの悪魔との契約みたいっすね？」

「どこが違うというのだ？」

地獄とは唯の比喩で、死体と魂を弄り廻すだけだがね。

この世界には異質な精神、それには恐らく魂がかなり変質している可能性がある。

それだけで観察と実験の対象にはなる。

死体は唯の材料にしかならん。

「じゃあ、あたしはどうすればいいんすか？まさか修行とかじゃないっすよね？」

えっ？こいつは何を言っているんだ？

「そのまさか以外に何があるんだよ？」

「えええええええええええ！？あたしはこう、なんか凄いパワーでビビビって強くなるとかそんなもんかと思っていたんっすけど！！？」

「何だそれ？面白いな。」

その発想はどこから来た？ていうかそんな簡単に力が手に入る訳があるまいに。

「ていうか“全能”なんて言うくらいならそれくらい出来ないんですか？」

「俺は結果しか求めない主義でな、電車で行こうが、歩きで行こうが目的的地には辿り着く。」

「物凄い極論っすね。」

勿論俺は常にジャンボジェットで飛んでるがな。

「兎に角、修行だ。まあ初めに心が壊れるだろうが、構うまい。」

「構うっすよ！つかそこまで激しい修行何すか！？」

「当然だろ、何かを手に入れるには必ず代価が居る。当たり前だろ」

「？」

さて初めはどの闘争界に放り込もうかな？

でもやっぱり地力は必要だから普通の別荘で修行だな。

ああ、楽しみだ。この修行が終わった時、どんな風に歪んでいるのか早く見てみたい。

というか修行の計画をどうしよう？

第12種禁忌 問と答（後書き）

次回からネギによる、春日の魔改造が始まります。
ちなみに最後の一文は作者も言いたいです。
ではまた明後日ノシ

第13種禁忌 めっさ怖いっす！（前書き）

こんにちは今回はグロい表現が有りますご注意ください。

Big Mouthさんから助言をいただいたので書いておきます。
カニバリズム描写有り

第13種禁忌 めっさ怖いつす！

（春日）

こんにちは！ミソラっす！

今日からネギ先生にいろいろ教わる事になったんすが、何処で、何時やるんすかね？

「これが俺の別荘だ。」

そこにあつたのは大オラマ魔法球でした。

「ほえ、実物を見るのは初めてっすよ。」
かなり高額なものだっことは知ってるんすけどね。

ネギ先生はいつの間にか姿が変わっていて、筋肉質の長身の男性になつていたッす。

あれだけ不気味な音がしたら普通は気付くはずなのに、気付かなかつたっことはもしかして、音は鳴らさなくても出来るんじゃないだろうか？

中に入ると、野原と森と川と建物があつた。

そして成長防止薬というのを飲まされた。

なんでもこの中は外との時間差が576倍、つまり外の一時間が中での24日。

何度も使うと速攻で年を取っちゃうものだそうっす。

予定では外の時間で二時間、つまり四十八日間暮らすそうっす。

そしてまず中に入って一番初めにした事はまさかの体力測定だったっす。

後は不思議な機械で魔力量を計られた。

「さて、いろいろ覚えなきゃいけないが、効率の為にはまずこれを覚えて貰う。

それは影分身だ。」

さっそく新しい魔法を覚えられると思ったら、なんと魔法ではなく忍術だった。

「影分身って忍者が使うあれっすか？」

「その通り！これを覚えておくだけでその後の効率が数十倍から数百倍違う！」

へへそんなすごい術があったとは知らなかったっす。

その後渡されたのは常時迷子とネギ先生が呼んでいるもので、中からチャクラと言うものが出てくるのでそれを制御して影分身をするそうっす。

半日ほど練習して初めて一体だけ出せるようになったら、後はチャクラの量を増やせば人数は増えていったのでネギ先生に合格を貰ったっす。

「じゃあまずはこの影分身の利便性を体感してもらおうかな。」

「はいっす！」

ネギ先生があたしの分身を一体建物の裏に連れて行った。

暫くして分身が戻ってきたので分身を解くと、裏でじゃんけんをしていたのが本体にも他の分身にも伝わった。

「それでこれが・・・ああ成程、他の分身にも勉強させればその知識が一気に本体に戻ってくる。そういう事っすね！？」

「正確に言つと知識と経験が、だな。」

これは便利だ。

偵察した後撤退する必要が無くなるから、かなり便利だ。

「それじゃあ影分身をまずは8体ぐらい出して、出したらそれぞれに指示をするから。」
言われたとおりに8体出して、それぞれ言われたとおりに振り分けた。

「それで本体のあたしはどうしたらいいですか？」

「ああ、何もなくていいよ。あの建物にベッドとかあるからゆっくりしておいて。」

「でもそれじゃあ効率が・・・」

「いいんだよ、今日は初めてだからかなり疲れるからね。」

まあ楽出来るならさせてもらうつすけどね。

影分身は4体が魔法の勉強で2体は魔力の制御、2体は体術の訓練をしていた。

本体である私は、ベッドで横になりながら本棚にあったマンガを読んでゴロゴロしている。

4時間ほど経って、ネギ先生が分身を引き連れて来たのでベッドから降りようとしたら、そのままいると言われた。

「そろそろ分身を解いて貰う。それから4時間は休憩にしてやるから目覚ましが鳴ったら外に出るよ。」

「え？そんなに休憩するんすか？あたし全然疲れてないっすよ？」

「まあ、その辺の説明は口するのは面倒なんで取敢えず体感すればわかる。」

「はあ、いいっすけど・・・」

そう言われて解除すると、体に一気に疲れが襲いかかってきた。

目の前が霞んでいく。

よく考えればわかることだった。

4体が4時間したら、それは単純計算16時間の勉強をしたことに

なる。

そうやって考えると分身を解くという事は、16時間の勉強と4時間の魔力制御、4時間の運動の疲れを一人で一気に請け負うということだ。

あんにやるうわざと説明しなかったな。

薄れゆく意識の中でネギ先生を軽く呪った。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリ!

耳元で目覚ましが鳴って目が覚めた。

体に疲れは余り残ってはいないが、頭が少し重いつす。

建物を出ると河原には幾つものテーブルが並び、ネギ先生がその上に段ボールを乗せていたつす。

「おっ?起きたか。」

「起きたかじゃないつすよ!!あんなになるなら早く言って下さいよ!」

はははとか笑ってるんじゃないつすよ、全く。

「それで何をするんすか?」

「料理を教えようと思つてな。」

「料理?なんでそんなものを?」

「いろいろあるんだよ。修行はその気になれば影分身で五年分を二日で進められるからちよつとした余興だ。」

「まあいいつすけど。で今日は何を作るんすか?」

「魚料理だ。今日はお前にはひたすら魚を捌いて貰う。」

そうしてあたしは大小様々な魚を捌き続けた。

夕方近くに空腹が感じてきた頃にテーブルいっぱい豪華な魚料理が完成した。

喰い切れるか不安だったけど、ネギ先生が大半を食べてくれたので全部無くなったツす。

そうして一日が過ぎた

三日も経つと一日のサイクルが固定され始めてきたツす。

朝は6時に起床して、7時から料理、7時半から朝食、8時から修行開始、11時に気絶、13時から料理、13時半に昼食、14時から修行、18時にまた気絶、19時に料理、19時半から夕食、20時からまた修行、22時に気絶しながら就寝
二日目からは本体も修行して分身を解く前にベッドに入るようになっていたツす。

五日も経つと料理はそこそこ出来るようになってきた。
五日目の夜、ずっと料理が魚料理だったので肉が食べたいと言ってみる。

「じゃあそろそろ鳥料理に入るか」

そうして用意されたのは生きたままの鶏2羽。

「はい、お手本見せるから自分でも捌いて。」

「え？パック詰めされたのじゃないんすか!？」

「食事とは命を頂くということだ。こっちの方がそれを生で感じられるからパック詰めされたものは使わないんだ。それに魚を捌くのと大して変わらんよ。俺には魚を捌くのと鳥を捌くのの何処に違いがあるのか分からんね。」

そう言いながらネギ先生は道具を用意していく。

確かに違いは無く、どちらも大切な命には違いないが、なんとなく

重みが違う気がしていた。

その夜食べた鳥料理はほんのりと命の味がしたっす。夢に捌いた場面が何度も出てきそうだったが、何時も修行で気絶しながら眠るので、夢は見なかった。

入ってから一週間が経ち、影分身からのフィードバックに耐えきれ、気絶しないで済むようになると、分身の人数を倍に増やされた。そして修行内容に学校の勉強も加わったっす。

十二日目、マルチタスクと呼ばれる平行思考作業などの細々した技術も教わり始めた。

十五日目、鳥料理が豚料理に変わった。最近フィードバックに慣れたせいで、夢を見るようになったので、夜に少しうなされたっすけど、二日も捌けば慣れた。鶏の時ほど罪悪感を感じなかったせいもあるっす。ちなみに料理はかなり上手になった気がするっす。

二十日目、豚料理が牛料理に変わったっす。今度は全く罪悪感を感じなかったっす。

「美味しく食べるんで恨まないで下さいよ。」
そうして貰った命を大切に食べるっす。

二十四日目、ネギ先生が連れてきた動物をいつものように命を貰うことに感謝して、魔法で気絶させ、頸動脈を切ってロープで逆さに吊るす。吊るしたまま腹を開いて内臓を引きずり出す。

パチパチパチパチ

すると、ネギ先生がニヤニヤ笑いながら拍手をした。

「なんすか？行き成り、その笑い方気持ち悪いっすよ？」

「おめでとう、春日美空。君も今日から立派な人殺しだ。」

・・・えっ？ひ、とごろ、し？

ひとごろし、ヒトゴロシ。人殺し？

「何を、言っている、んすか？ネギ先生？」

本能か、理性か、直感か、それをなんと呼ぶのかあたしは知らないけど、あたしの中から聞こえる声が“聞くな”としきりに警告するが、

あたしの口は止まってはくれなかった。

「あたしが、捌いたのは、今日のお肉ですよね？」

さつきから後ろを振り向けない。

それを決して認めたくない。あれはいつものように今日の食材だ。

「君はあれを食べる気かい？俺としては構わんけど？」

分かっている。ネギ先生は認識阻害魔法の使い方が上手い。

それをあたしに認識させない位、先生にとっては簡単なことだ。

だからあたしは間違えたんだ。だからあたしは悪くない。

いや、それすら無理矢理認識させられただけだ。あれは昨日と同じ牛だ、そうに決まっている！

「ほらあんなになったら治療して蘇生させるのも無理だろうね。」
先生が後ろを指差すが、あたしは振り向けない。先生の顔すら見る

ことが出来ない。

あたしは何も見たくなくて必死に下を向いていたが、足元には血抜き
の樽から溢れてきた血が流れてきた。

今日に限ってその血が全く違うものに見えた。

「そろそろちゃんとしてあげないと可哀想だよ？それとも彼を人間
だと認めてあげないつもりかい？」

その言葉を聞いた途端体がゆっくりと回り始めた。

心の声がさつきより強く警告する。

やめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめる
ヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口
止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止める
やめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめる
ヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口
止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止める
やめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめる
ヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口
止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止めるやめるヤメ口止める
!!!

しかしあたしはその声に逆らって“それ”をしっかりと見てしまっ
た。

そこには逆さづりにされ、首を半ばまで切られ腸が残らず引きずり
出された“人間の死体”があった。

あたしの意識はそれ以上認識するのを止めた。

唐突に目が覚めた。

時計を確認すると朝だった。

少し違和感を感じたが朝食の支度の時間が迫っている。

ああ何だあれは夢だったのか。

「何ちゆう夢を見てるんすか、あたしは・・・」

いつものように支度をして、朝食を作ろうとすると既にできていた。

「おはよう春日。今日は珍しく遅いね。」

「おはようございます。朝食の支度させてしまっただけです。夢見が少し悪くて・・・」

「ふーん、じゃあ食事によろしく。いただきます。」

「いただきます」

今朝の食事のロールキャベツの噛り付くと中に何か堅いものが入っていた。

はしたないと思いつつ、口を離すとそこにあっただのは・・・

“人間の指”だった。

「うわあああああああああああああ!!!」

そうだ、さっきの違和感の正体が分かった。

日付が飛んでいたのだ。いやあたしはあれから朝まで気絶していたのだ・・・

「君が食べたと言って見たから昨日の彼はロールキャベツにしてみたよ。」

ああ、指がまだそのまま残っていたね、ごめんごめん。

それで？味はどうだい？」

あたしは半狂乱になって走り出した此処じゃない何処か。
1mmでも遠くへ！

暫く走ると民家があった。

「助けて下さい！助けて下さい！！」

必死にドアを叩く。

そして中から出てきたのは・・・

「やおおかえり」

あたしは足元から世界が崩れさる様な感覚がした。

（高畑）

昨日はえらい目にあってしまった。

職員室に行きづらい。

女子高エリアに行くとき掲示板前の人だかりが出来ていた。

なにがあるのか気になり、女生徒の一人に声を掛ける

「やあ、何かあるんだい？」

「ひっ！」

その生徒は短く悲鳴を上げて走り出してしまった。

それを聞いて掲示板の周りにいた生徒が一斉に逃げていった。

「僕が何をしたって言うんだい・・・？」

そして掲示板を見ると、そこには、

『高畑先生、出張に見せかけナンパか！？』

と書かれた見出し。

その下には僕が出張に行った先にあった中学の制服をきた女性の肩を抱いてホテルに入っていく僕の写真が貼ってあった。

「なんじゃこりゃあああああああ……！」
僕の叫びは学園中に響き渡った。

第13種禁忌 めっさ怖いっす！（後書き）

はい、どうでしたか？

基本的にネギは正常に見えてイカれています。

今後もミソラにかなりエグイことさせますが、

本人は普通だと思っています。

ではまた明日ノシ

第14種禁忌 シスターは実は優しい人（前書き）

今日は

これからバイトなのに雨が降って憂鬱なBilliyです。

今回はある人の意外な一面を書いてみました。

これで人気が出たら面白いです。

ではどうぞ。

第14種禁忌 シスターは実は優しい人

（春日）

二十六日目、あたしの修行に人殺しが加わった。

先生が何処からか連れてきた人を魔法を使って殺すそれだけだ。

そして食事の用意はあたしが絶対にするようになった。

そうじゃないと料理に何が入るか分からないからだ。

それは最早トラウマになってしまっている。

三十日目、本格的な殺し合いの修行が始まった。

影分身を作りだし、先生が“存在の力”という謎の力で分身の存在強度を上げる。

すると、普段は一発でも殴られれば消える筈の分身が本体並みの強度を持ち、死ぬまで消えなくなる。

腕を切られようが、腸を引き摺り出されようが消えることが出来ない。

しかもその痛みは本体に余すことなく戻ってくる。

そして分身に認識阻害魔法で本体だという認識を植え付け、先生が連れてきた人と戦わせる。

相手を殺さなければ自分が死ぬ為、必ず相手に止めを刺す。

あたしは毎日自分が死ぬ感覚と相手を殺す感覚を感じ続けている。

本体と他の分身はマルチタスクを使い、恐怖や殺意などの狂気を頭の隅に押しやりいつものように修行をする。

今までと違つのはやる気だ。

前より強く、今より強くならなければ自分が死ぬ。

また殺される。そんなのは嫌だ！

段々強くなっているのが自分でも分かる。
前では使えなかった高位魔法が連射出来るようになった。

勉強のおかげで新しく魔法を作ることが出来るようになった。
パーソナルスペース内なら前後左右上下全ての方向を視覚としてと
らえることのできる魔法を作った。

先生が気の使い方を教えてくれた。
人体の構造を覚えさせられ、構造に最も適した気の使い方などを体
で覚えさせられた。

それでも死に続ける。

戦いの中で霸王色の覇気の出し方をなんとなく分かるようになった
が、敵はそんな物では揺るぎもしないような者ばかりだ。

もっと分身を増やさないと。

分身同士を戦わせるようになった。

自分の欠点が相手の目線で分かる。その場で修正。またあった。そ
こを狙い自分を殺す。

三十五日目、マルチタスクに感情を分けるのが上手くなった。

狂気を心の片隅に隔離して必要な時だけ降ろす。

先生はこれを“発狂”と呼んでいた。

出来るようになった褒美だと言って、覇気の使い方を正式に教えて
くれるようになった。

霸王色以外にも武装色と見聞色があるらしい。武装色は気に似てい
るが、少し違う。

武装色は同じ覇気以外の異能を無効化し直接ダメージを与えること
が出来らしい。

つまり気で強化している体に覇気で攻撃すれば生身と同じだけのダメージを与えられるようだ。

無効化出来る異能は出力が相手の方が大きければ無効化し辛いらしいが、ある程度通るだけでもありがたい。

見聞色は一定の範囲内の相手の心が読めるようだ。範囲は練度次第で広がるが、今のあたしじゃ10mがせいぜいだ。

四十日目、先生が分身の一体の杖を取り上げて“闘争界”ってところに連れていったつす。

杖が無いから魔法が使えず、体術と武器だけで戦うしかなかった。幸い、気と覇気は杖がなくても使えるのである程度は持つと考えていたが甘かった。

武装色の覇気と気を全開にして防御力を上げ、見聞色で相手の動きを読んで避けようとしたが、七歳の子供に一撃で負けた。

闘争界は昼夜問わず戦争が起きていて、休息や睡眠、食事の時だけ戦線を離れる。そんな世界だった。

四十八日目、闘争界でも分身が一日持つようになり、外に出る時間が来た。

入って来た時と姿形に変わりはない。変わったのは魔力量と技術、考え方だ。

「分身を一体置いておけ。ここを出ると分身の蓄積データは届かないが一体でも分身があればそいつから引き継げる。毎日一回は引き継ぎに来い。」

「待つて下さいよ。1時間24日だったら24時間で576日、1年軽く超えてるじゃないっすか!？」

「強くなりたいんだろ?それと中の事を誰かに聞かれた時は俺の

名前を絶対に出すな。

「師匠とでも言っておけ。」

「本当は師匠って呼ばれたいだけだったりして……」

「……何故分かった。」

まあ冗談はさておき俺は此処の、というか立派な魔法使いが気に食わない。

だから手駒は隠しておくに越したことは無い。」

「手駒って……。じゃあそうさせて貰います。それじゃあ明日同じ時間にくるっす。」

「気をつけるよ。外じゃあまだ二時間しか経ってないんだからな。」

そうだ、あたしはココネが寝たのを見計らって、ちょっと相談しに来た筈だったんだ。

何故こうなった……。orz

しかし確かにあたしとしては夏休み明けの感覚だけど、他のみんなからしてみれば普通に次の日って感覚なんだろうな。気をつけなくちゃ。

そしてネギ先生の部屋から出た。

時間はもう夜中の1時を過ぎていた。

教会に帰るとシスター・シャークティが玄関にいた。

「ミソラ」

シスターはこちらに歩いてきて手を上げた。

殴られる！

反射的に体が硬直してしまった。

いくら訓練したからといって、シスターに防御したり迎撃したり

するわけにはいかない。

しかし予想に反して頭に感じたのはやさしいシスターの手の温もりだった。

あつ、あたし今頭を撫でられているんだ。

頭を撫でて貰うなんていつ以来だろう。

小学校の頃に親にしてもらって以来じゃないだろうか。

「迷いは晴れましたか？ミソラ。」

「あの、えと、怒らないんすか？」

てつきり怒られるもんだと思っていた。

「んー？ミソラは怒って欲しいんですか？」

「いえ、そうじゃないっすけど・・・」

「迷える者を救うのが神に仕える者の仕事なら、救う手助けをするのもまた然りですよ。」

あなたが何かに悩んでいたのは私もココネも気づいていました。

それを私たちに相談し辛い事なものね。

あまりココネを心配させてはダメですよ。」

あたしは不覚にも泣き出してしまった。

今が何時だとか、此処が外だとかそんな事一切気にせず、

大声でシスターに抱きついてわんわんと泣いてしまった。

シスターは何も言わずにあたしを抱きしめて頭を撫でてくれた。

それがどのくらいの間だったのか、分からなかったがあたしは泣き止み、シスターから腕を離れた。

「明日のご飯、あたしが作ってもいいっすか？」

それはトラウマなんかではなく、シスターに何も話す事の出来ない

あたしの、修行の成果を少しでも見て欲しい。そんな思いから出た言葉だった。

「フッフ、あなたの料理ですか？それは美味しそうですね。楽しみにしておきましょう。」

「さあ、早く入りましょう、ココネが寝ないであなたの帰りを待っていますよ。」

「あらま、ココネには全部バレてたみたいですね。」

「じゃあ今日は久しぶりに一緒に寝てあげよう。」

「あたしはシスターと歩きながら、これほどまでにやさしいシスターの弟子になれた事を珍しく心から神に感謝した。」

PS・珍しく心からココネに泣きながら怒られた。心配したんだぞと。それはとても可愛かった。

（高畑）

「くそ、クソ、糞！」

「なんなんだこの写真は！！」

「思わず引き剥がしてしまった写真を握り締めて怒りも露に学校へと向かう。」

そして歩いていると前から生徒の一人が走ってきた。

「高畑先生これはどういうことですか！？」

「その手にはさつき剥がした筈の紙が握られていた。」

「そ、それは……」

この時自分は規則や風紀に五月蠅い生徒がやってきた程度にしか思

っていないかった。

しかし次の瞬間彼女はとんでも無い事を叫んだ。

「わ、私との事は遊びだったんですね!!?」

何iiiiiiii!!?」

「待ってくれ!僕は君の事は知らないぞ!」

「ヒドイ!飽きて要らなくなったからって、そんな言い方・・・。
最低です!」

バチーン!!

昨日も味わった痛みが僕の頬に走る。

周りは野次馬が集まり、こちらを指差してひそひそと話している。

僕が何をしたって言うんだ・・・

第14種禁忌 シスターは実は優しい人（後書き）

美空が魔法で白眼している件について（笑）

実はシスター・シャークティって結構優しい人。

て、面白そうですね。

ではまた明後日ノシ

第15種禁忌 魔法は使っていないよ（前書き）

こんにちは。

雨のせいで自殺クラスのストレスが溜まっています。

今日の授業が憂鬱すぎる。

第15種禁忌 魔法は使っていないよ

（ネギ）

「ぬあにいいい！！！？二年間だとおおおお！！！？？」

こんにちは、マッドなネギ（ ）です。

春日を鍛えて早2週間、中間試験の季節がやってきた。

生徒たちは一向にテスト勉強している姿を見せないが、それは高畑が注意すべき事なので何も言わない。

まあ、今のロリコン疑惑が満載の高畑の注意を聞くかと言えば聞かないと答えよう。

このクラスは万年最下位だしみんな諦めているのだろう。

というか学年の一位と二位が居るのに最下位とか、他の連中はどれだけ足を引っ張っているんだよwww

まあ所詮教育実習生の自分が言うことではない。

そう思っていたら学園長から手紙がきました。

「中間テストで2・Aを最下位から脱出させよ。出来なければ卒業課題は2年間に延長じゃ？」

そして冒頭の叫びに繋がる訳です。

流石に2年間はヤバい。

今でさえ餓鬼の御守に精神をヤスリどころかカンナで削られているのにこれ以上はヤバい。

だから今学園長室にやってきた。

「学園長！これは本気ですか！？」

「うむ、卒業課題と言っくらいなんじゃから、ただ情性にやって終

わかりましたじゃいかんじやろう？これも試練じゃ。」

「しかし、年の初めから教えたならともかく年度末の中間は無いでしよう！？それに今まで最下位に甘んじてきたのは高畑先生のせいでしょう？彼に責任を取らせるべきです！」

「でも高畑君は最近の騒動のせいで心身ともに疲れきっていて使い物にならんしのう・・・」

なんてこつたい！こんな所で足を引っ張るとは！！なんて使えない奴なんだ、高畑は！！

「分かりました、その課題を受けましょう。最下位を脱出するならどんな手を使つても良いんですね？」

「いや！？良くないよ！！？ネギ君何を言っておるんじゃ！？？2

- Aの生徒に魔法を掛ける事は許さんぞ。」

「魔法でなければいいんですね？」

「だから良くないって！！呪いやその他、超常的な力を2 - Aの生徒に使用する事は禁ずる。」

「2 - Hが下から2番目か・・・。それさえ落とせば「だから正攻法でやれ！分かった！！」

こうしよう！2 - Aの生徒全員の点数を平均点以上に上げよ。その際に生徒に魔法などの使用を禁ずる！これでよいか！？」

ちっ！余計な条件が増えてしまった。

しかしこつちには全知がある。それが無くとも俺は素で世界最高の頭脳を持っていると自任している。

基の頭が良くなければ全知は使いこなせんからな。

見てろよジジイ。上位30位全てを2 - Aの生徒で埋め尽くしてやる！

しかし過去2年分の2 - Aの成績を見て愕然とした。

クラスの平均点が学年の平均点より20点も低いつてのはどういことだ!?

これはその場凌ぎが通用できるレベルですらない。本気で、正攻法で、正面からゴリ押ししか無理だ。なに、2週間もある。毎日やれば余裕だ。

「というわけでテストまで後2週間、その間徹底的にテスト対策の勉強会を行う!

反論は許さん!放課後授業が終わり次第始めるから逃げるなよ! 上位30位全てを2・Aで埋め尽くして学園長に吠え面書かせてやる!!」

「ネギ先生。私怨が混じってますよ。あとキャラが崩れています。」
しずな先生は黙っていて下さい。そんな事を言っている場合ではない。
生徒が騒いでいるが全て無視。

そしてテスト対策用のプリントを配る。

「まずは数学だ!穴埋めになった途中式と答えを10分以内で全て埋める!これはもうサルでもわかるレベルの問題だ!80点以下は人類をやメロ!」

みんなが猛烈に書き始める。

「これぐらいなら分かるあるよ」

「当然でござるな」

等とバカレンジャーと呼ばれている面々も順調に書き進んでく。

「次は理科だ!」

これも簡単な穴埋めだけの問題と選択問題。

そして国語と英語と社会も穴埋めと選択と並べ替えの簡単な問題集を出し、全て回収する。

全体で掛かったのは50分だ。

「それじゃあ発表する！全体の5教科平均は87点！低いぞ！何故こんな簡単なもので90点を超える事が出来ないんだ！？あと一人だけ5教科の平均が75点の奴が居る。」

「誰よ？こんな簡単な問題でそんなに間違える奴は？あたしでも出たのに。」

神楽坂が騒いでいるが、

「てめえだ！神楽坂！人類ヤメロこのバカ！！人の事を気にしている場合か！？」

俺は手に持っていたプリントの束を神楽坂に投げつけた。

その後プリントを返却し、解説をする。

「他の奴は次はこっちの少し難しくした奴だ。問題自体の難易度も解法もさっきのと大して変わらん。始める！神楽坂はさっきのと同じ難易度の奴だ。」

そして、時間が経ちもう一度答え合わせをする。

80点クリアで今度は長瀬が脱落したか。他の生徒には同じ難易度のプリントを数種類渡し、長瀬と神楽坂は居残り。

神楽坂は二回目でクリアしたので、長瀬と同じものをやっている。流石に小学一年レベルは簡単だったか。

このプリントは数学でいえば穴埋めを埋めるだけなら本当に小学生でも出来る。

しかしそれを上から埋めていく為には上の式を良く見ないといけな

い。
つまり嫌でも過程を考えてしまうのだ。

他のも同じように選択ではあり得ないのと並べたりして予備知識が
少なくとも出来るようになってる。

社会では選択肢にスターリンと豊臣秀吉が並んでいる。これで間違
えたら究極のアホだ。

そうして配った問題は全部ピンポイントに試験にしか向いていない。
実は中学の試験問題はどんな先生が作っても同じような所しか出な
いからだ。

これを2週間繰り返せば・・・

なんて思っていた時期が私にもありました。

6日目までは順調でした。そこからがダメだった。

バカレンジャーと呼ばれる5人のテストが進まない。

なぜだ・・・問題の見せ方を変えたただけなのに。

他の生徒は今やっと中学1年レベルを終えた。

明日は中学2年の前期の範囲のテストに入る。

仕方がない。

余り褒められたやり方ではないが、記憶力と集中力を上げる生体ナ
ノマシンを飲み物に混ぜる。

研究界では常用されている物だが、あそこの人間はもはや脳が変質
しているだろうから安全性では当てにはならん。

禁止されているのは超常的な力のみだから問題は無かろう。

学園長、貴様の敗因は科学を侮った事だ！

後、春日には全教科100点取らないと闘争界に本体を裸で放り込
むと言っているもので、言っておいたとおりに100点を取るだろう。

くその頃の美空く

「うオオオオオオオ！そっちはどうっすか！？」

「こっちはあと二問っすよ！理科は！？」

「これで終わりっす！国語はどうなってるっすか！？」

美空は分身をしていた。

「わあ、ミソラがいつぱいいる。ミソラガンバレ！」

ココネには見られていた。

く高畑く

学校には暫く行けない。

学園長の計らいで今出張に来ている。

出張と言っても大阪だから学園に戻るのに新幹線で半日もかからない。

おっと携帯に電話が掛かってきた。

「こんにちは、タカミチ。詠春です。今少し宜しいですか？」

赤い翼時代の年上の友人の一人から電話が掛かってきた。

彼の娘を生徒として預かる事になるとは、月日が経つのは本当に速い。

「大丈夫ですよ。それで何の用ですか？このかちゃんの事ですか？」

「それも込みの話ですよ。」

何だろう、詠春の声が固い気がする。

なにか厄介な事に巻き込まれているのだろうか？

「厄介事ですか？」

「君にとってはね。」

あれ？暑くもないのに背中に汗が流れる。

「君、実はロリコンだったんだって？」

ああ、なんて言って誤解を解こう？

第15種禁忌 魔法は使っていないよ(後書き)

今回のあとがきはお休みです。
ではまた明後日ノシ

第16種禁忌 考察と新たな道（前書き）

こんばんは

自分で決めたりリミットが過ぎそうで、パニックっていたBillyです。

今回はあとがきにアンケートがあるので見ていってください。

5/30・瀬流彦の口調を修正しました。

第16種禁忌 考察と新たな道

（春日）

中間テストは無事に終わった。

あたしも言われたとおり、全教科100点を出すことに成功した。

かなり卑怯だが分身の一体を幻覚魔法で隠し、テスト問題を見せ分身を解く。

外にいる他の分身が教科書や参考書を使い問題を解き、それを他の分身に見せ、分身を解く。

分からない問題は全てこれで遣り過ぎした。

しかし全てと言っても使ったのは理科で二回だけしか使っていないから、他の四教科は実力だ。

ネギ先生は気付いていたが見逃していた。

それ程点数にこだわっていたのだ。

そして今回のテストでは、2-Aは学年トップを取り、上位18位までの全てを2-Aが埋め尽くした。

バカレンジャー以外の全員が450点以上とは驚いた。

バカレンジャーも400点は取っていたので大した進歩だ。

しかしバカレッドであるアスナは390点だったが。

途中の19位からは他のクラスが入ってしまい、30位全てを埋める事は出来なかったが、

先生……いや師匠はご機嫌だった。

なんでも学園長と高畑先生の無様な姿を見ることが出来たらしい。

けど同率一位が4人も出るとは驚きだ。
まあ予想は付いているから誰とは言わんが。

「バカンスさいこー！」

あたしは今別荘で珍しく休暇を楽しんでいた。

師匠は幾つも別荘を持っているみたいで、これはバカンス用の別荘らしい。

「そっいえば師匠はどうして途中でアスナの勉強を諦めたんすか？
なんとなく思い出したので聞いてみる。」

師匠は完璧主義者の割に無理だと思っただら簡単に諦めるから性質が悪い。

でも流石のアスナも全知にすら無理と言われる程バカなら、短時間であれほど早く点数が上がる事は無いと思う。

「ああ、あれか・・・あいつはな、記憶に封印が掛けられているんだよ。」

「封印すか？」

なんかヤバイキーワードだ。聞いたら巻き込まれるタイプか？

「その封印のせいで脳の余容量が人より少ないんだよ。普通は記憶の封印でも頭がパーになるが、よっぽど丁寧に掛けたんだろうな。バカになるだけで済んでるのはそのおかげだ。」

あれ以上のペースで教えようとしたら封印を解くしかないけど、生徒に魔法を使うのは禁じられてたから途中で諦めた。」

ふーん、成程。あれ、でも？

「じゃあ禁じられてなかったら勝手に解いてたんすか？」

「当たり前だろ？どんなものでも全力で、手段を選ばずに取り組むのが正しい課題の取り組み方だ。」

たぶんそれは間違っているが、そんな事をあたしは言わない・・・

「ししょー。言われたとおりに満点取ったんだからなんかご褒美が欲しいです。」

リクライニングシートに横になりながらあたしは師匠に言った。

「ご褒美？いいけど、何が欲しいんだ？」

あつ、言いはしたけど何も考えていなかった。

女の子らしく甘いものと言いたいが、トラウマの原因である師匠の出した食べ物は食べたくない。

悪戯用の道具を頼もつかと思っただが、師匠の悪戯はあたしたちの物とは次元が違うし、相手の心を削るような物なので余り使いたくない。

そつだ！良いものがあつた！！

「師匠は時々ローラーブレード弄ってるっすよね？あれを一つ下さい。」

そつ、実はあたしは師匠の弄っていたローラーブレードに興味があったのだ。

なんだか凄い機械が埋め込まれているし、かなりの速さで走っているから結構前から興味があったのだ。

「あれはローラーブレードじゃねえ、エア・トレックつうんだ。」

「えあ・とれつくう？」

なんじゃそりゃ？車の名前か？

「元は宇宙開発用に作られたものだ。お前には必要無いと思ってい

たんだが、欲しいというのなら一個やろう。自分の道の走り方も教えてやる。

学園の外ではかなり流行っているが、学園長はこいつにビビってるから頑なに持ち込ませようとしないがね、ククククク」
宇宙開発用って、しかもあの学園長がビビるってどんなもんだよ。

「走り方って言うてもローラーブレードと何処が違うんすか？」
あたしのアーティファクトはスケートを使えるようにならなければ使用が難しいから、それなりに練習した。
それは師匠にも話したから知っているはずだが。

「エア・トレックがインラインスケート等と決定的に違う所は“空”を使う所だ。」

「“空”？なんか大そうな話っすね。」
飛べるようになるのか？

「まあ練習は明日からすればいいよ。初めは生傷が絶えないだろうから。」

それに春日は火の魔法が得意なくせに、たぶん道が俺と同じ轟だから面白い事になるぞ。」

何を言っているのか理解できないが、師匠の面白い事があたしにとっても面白かったためしがない。

とにかく余計な事を言ったのは確かだったようだ。

どうせ明日からだから今日はのんびりとしますかね。
ん？そういえば・・・

「外ではそのエア・トレックってのが流行っているって言ってたっすね？」

「ああ、まあ・・・流行ってるというより流行らせたというべきか・・・」

「流行らせた？それじゃあ学園の外に行けば実際にやってるのが見れるんすよね？」

本当にやっているなら実際に見に行きたい。

エア・トレックではないが、一回だけX Gamesの放送を見たが、とてもかつこよかったのを覚えている。

ココネも一緒に連れて行って見るのも楽しいだろう。

「ん、なんか勘違いしてるみたいだなあ？」

ああ楽しみだ。

く高畑く

僕は一体どこで間違えたのだろう・・・

京都では詠春さんに誤解され、あの後外の喫茶店で三時間も説教をされた。

今は麻帆良に戻ってきている。

人目を避けるように、なるべく人のいない道を歩いて職員寮に辿り着く。

「やっと着いた・・・」

自室に辿り着き鍵を開けようとする、後ろから声が掛かった。

「あれ？高畑先生、帰ってたんですか？」

「え、うん、今辿り着いてね。」

それは同僚であり友人の瀬流彦だった。

「ハハハツ、そんなに警戒しないでいいですよ。

でも最近あなたの変な噂が流れていますからね。

勿論僕はそれが間違ってたことは知っていますよ。

今日は一緒にあなたの部屋の飲みませんか？何か愚痴りたい事がある

るんじゃないですか？」

「瀬流彦君……」

僕の事を信じてくれている人がいる。僕はその事に感動していた。この友人は僕の事を信じている。それだけで僕は心がいっぱいになった。

「ああ！一緒に飲もう！すぐに部屋を片付けるから！！」
そう言いながらドアを開けると……

ギシッ

麻帆良女子中学の制服を着た少女が居た。
そこに居るのではなく、居たのだ。

僕の部屋の天井から首を吊っていたのだ。

「……」

僕も瀬流彦も口を開かない。
状況に頭が付いていつてないのだ。

「ちよっと！二人してそんな所で突っ立って何をしてるんだよ。」
誰かが僕たち二人に後ろから声を掛けたが目の前の物から目が離せない。

「うわあああああああ！！」
後ろの誰かが部屋の中を見たのだろう。
その叫び声で僕たちは動く事が出来るようになった。

「110番と119番だ！」

「それより先に彼女を降ろさないと！」
僕たちは混乱しながらも動き出したが、さっきの叫び声で人が集まってきた。

「なんだ今の叫びは!？」

「うわっ！首吊ってる!!！」

僕たちは二人が借りで少女の死体をロープから外した。
そしてその顔を見ると。

「どうして君が・・・」

思わず言葉が口から零れてしまった。

その少女は先日新聞を持って僕に詰め掛かってきた少女だった。

「まさかあれだけのことで・・・」

その時瀬流彦がこちらを見た気がしたが、僕はそれどころではなかった。

くアーニヤ

「悪いが君には彼と一緒に麻帆良に向かってもらう。」

ロンドンで占い師をしていたら手紙でメルディアナの校長から呼び出しがあった。

呼び出された先で言われたのが上記の言葉だ。

「何故か聞いても？」

「ネギを止める為だと思って貰えばいい。」

私は痛み出した頭を押さえた。

「また何かやらかしたんですか？」

「いい聞かなくてもいいです。しかし私の卒業課題はどうなりますか？」

「新しい課題じゃ。」

パサッ

机の上に置かれた紙に書かれているのは

『A s t u d e n t i n J a p a n 』

「了承しました。直ちに向かいます。」

私はスカートの裾を翻し、机の上にいた彼と共に部屋を出る。

待ってなさいネギ！一体何をしたのかたっぷり聞かせてもらおうからね！！

第16種禁忌 考察と新たな道（後書き）

春日のアーティファクトの設定は勝手に作ったものです。あまり突っ込まないでください。

次回からはエア・トレックが出てきます。

そこでアンケートなのですが、春日の“道”の名前を募集します。

走るの“轟”と“炎”を融合させた道です。

漢字と読みの両方を募集しますが、どちらか一方でも構いません。

条件は漢字は二文字、読みは英単語一つです。

場合によっては両方応募していただいても、片方は他のひのを使
うかもしれないので、ご了承ください。

ではまた明後日ノシ

第17種禁忌 アーニヤがやってきた(前書き)

みなさんいろいろとアイデアを出していただいております。
います。

春日の道が出てくるのはもう少し先なのでまだ募集します。

今回も時間がぎりです

5/30・瀬流彦の口調を修正しました。

第17種禁忌 アーニヤがやってきた

（高畑）

あの後やってきた警察に事情を話す為に瀬流彦君と共に警察署まで出頭した。

死因の解明や手がかりを探すために死体を司法解剖にまわされたと聞いてからわずか十分もしないうちに警察官の一人がやってきた。

「何か分かったんですか？」

こんなに早く分かる訳がないとは知りつつも聞いてしまう。しかし予想だにしない事実をその警察官は告げた。

「彼女は、いえあれは人間ではありませんでした。」

彼が何を言っているのかよく解らない。エイリアンだとも言いだすつもりか？

「あれは人形です。それも悪趣味なほど良くできた。」

「人形!?」

バカな!?あれが人形!?!?手触りも質感も重さも何もかもが人間そのものだった。

なのに人形？

「本当に悪趣味でしたよ。」

長い間死体に触れてきた検死官でさえ、腹を開けるまで気付かなかったそうですから。

まあ確かに違和感がありました。

通常の首つり自殺の場合は下に排泄物が落ちますからね。

しかし現場には何も落ちてはいなかった。

それでも痴情の纏れで自殺する女性はその事を知っていたらトイレ

に行きますから、

それほど不思議なことではありませんが。」
痴情の纏れ・・・今の僕には全力で避けたい言葉だった。

「それでこの事件の事なんです、不法侵入での捜査に切り替わりますがどうします？」

そう言われたが僕にはこれ以上何かをする気力が起きなかった。
あれだけ慌てた結果が人形だったとは。
これをやった奴はユーモアがあるな。

あははははは、はあ・・・

そして警察からの帰り道、二人とも口を利かない。

僕は瀬流彦君にあんな下らない事で迷惑を掛けたことへの罪悪感で
いっぱいだ。

「ねえ、高畑先生。」

唐突に彼が語りかけた。

「なんだい？」

「あの人形の顔を見たとき、あなたは心当たりが有るみたいでした
よね？」

その動機にも。あなたは本当に生徒に手を出してないんですか・・・
？」

ああ今日は最悪の一日だ。

くアスナく

遅刻ギリギリの時間帯をあたしとこのかは走っていた。
走りながらこのかが占いの本であたしを占っていると、
隣に見た事のない少女がやってきてこっちに声を掛けた。

「すみません。麻帆良学園の学園長に会いたいんですが、こちらの

方角で合っていますか？」

たぶん外国人だけど、とても日本語が上手い。背中に大きな荷物を背負っている。

荷物からは長い棒が何本か付き出ていた。子供は嫌いだ、が、礼儀正しく聞いてきた以上答えないわけにはいかない。

「あってるわよ。今の時間なら学園長室に居るだろうし。」

「せやね。良かったらうちらが案内したげよか？名前はなんて言うん？」

あたしたちは遅刻しそうなのにこのかが余計な提案をする。

「本当ですか？ありがとうございます！わたし、アーニヤって言います。」

こちらを向いた彼女の肩には白い黼が居た。振り向いた勢いで肩から落っこちてアーニヤちゃんは踏んでしまった。

「ぐえっ！」

なんだか物凄くオッサン臭い声で黼が鳴いた。

「うわっ、ゴメン！大丈夫！？」

「イテテテテ」

黼が喋った！！？

あの黼はオカシイ！！

「今その黼喋らなかつた！？」

一人と一匹は驚いたようにこっちに振り向いた。

「そ、そんなことあるわけじゃないですか（汗）それにこいつ

は黽じゃなくてオコジヨですよ。」

「きゅきゅいきゅきゅきゅ！」

やっぱり変だ、何かが変だ。

そうこうしている内に学校に付いた。

「女子中等部？どうしてこんな所に学園長が？」

アーニヤは学園長室が女子中等部内にあるのを不思議に思っているようだ。

「昔はこの女子中等部しかなかったんよ。後から他の学校ができて都市になってもうたから、元はこの学校の校長室を学園長室って決めたからなんよ。」

へへ、あたしも知らなかった。

そんな話をしている内に学園長室の前まで来た。

「おはよう、おじいちゃん。おじいちゃんのお客さんを連れて来たで。」

「おお、ありがとう、このか。しかしアーニヤ君には迎えを出したんじゃない、見んかったかのう？」

くその頃の迎え

僕は今ネギ君の友達を迎えに来ている。

「あの人さつきから女子生徒ばかり見てない？」

「あれって例のロリコンの人でしょう？」

「それって超ヤバくない？」

ああ、物凄く帰りたい。

くアスナく

学園長の話によると、アーニヤちゃんはうちのクラスに転入してくるらしい。

まだ10歳だが、飛び級をしているから勉強に関しては問題がないそうだ。

あたしとは大違いだ。

アーニヤちゃんは本当なら女子寮の一室に泊まる予定だったが部屋が空いていないので、

今日は取敢えず私たちの部屋に泊まることになった。

子供は嫌いだ、アーニヤちゃんは礼儀正しいし、部屋も広いから別に構わない。

なんでもネギ先生の知り合いらしく、地元で連絡を遣さないネギ先生の監視もするらしい。

ネギ先生は中間テストまではしずな先生と同じように大人の女性として感じがしていて、生徒に人気があった。

テストの時は鬼のように課題を出し続けたが、みんなの成績を大幅に上げてクラスを一位にしてくれた。

あたしもあんなに高得点を取ったのは初めてだった。

みんなには一部を除いてそれなりに尊敬されている。

エヴァちゃんや桜咲さんには結構睨まれているがなんでだろう。

ネギ先生の話をしていると前から本人が現れた。

「げっ！アーニヤ！！」

「逃げるなネギ！」

ネギ先生が逃げようとしたがアーニヤちゃんに捕まった。捕まえてる姿は姉にじゃれつく妹の様に微笑ましかった。

その日の授業は無事に終わり、アーニヤちゃんの歓迎会を開くことになった。

あれ？どうしてネギ先生の歓迎会は開かなかったんだらう？
だれか絶対に言い出しそうな筈なのに。

「このか。ネギ先生の歓迎会ってどうして開かなかったんだっけ？
「なに言ってるの、アスナ？ネギ先生の歓迎会ならちゃんと開いた
やないか。」

えと、あの、あれ？開いたのまでは覚えてるんやけど、何したの
かまでは覚えとらんは。」

おかしい、このかは開いたって言うが内容は覚えていない。
わたしは開いたこと自体覚えがない。

後で他の人に聞いてみよう。

わたしは学園長室に呼ばれていたアーニヤを迎えに行った。
前を本屋ちゃんが大量の本を抱えて階段を昇っていたので手伝おう
と声を掛けようとしたところで、本屋ちゃんが大勢を崩した。

危ない！本屋ちゃんは後ろ向きに階段を落ちていったその時。

「フォル・ティス・ラ・ティウス・リリース・リリース！」

そのとき本屋ちゃんの体は宙に浮かび上がった。

第17種禁忌 アーニヤがやってきた(後書き)

今回は少し短いですがお許しください。
ではまた明後日ノシ

第18種禁忌 記憶消去は大変です。(前書き)

こんばんは。

今回は前回に引き続きアスナの話です。

PS感想で指摘された瀬流彦の口調は直してきました。

5/31・誤字、脱字を訂正しました

第18種禁忌 記憶消去は大変です。

（アスナ）

今何が起きたの？

本屋ちゃんが落ちて、そしたらアーニヤちゃんが何か叫んで、そして本屋ちゃんが宙に浮いて。

あれって何？

超能力？呪文を唱えてたから魔法？

「ちよつと！アーニヤちゃん今の何！？」

「えっ！？アスナ！どうしてここに！？？」

やっぱりアーニヤちゃんは何かしたみたいだ。

「今本屋ちゃんが宙に浮いたわよね？それってあんたが何かしたの！？？」

「あわわわわわわあ（汗）何も無いわよ！？」

「焦っているってことは何かあるのね！？」

その時、ネズミが走るような音と共にオッサン臭い声が出た。

「アーニヤの嬢ちゃん！ネギのお嬢が呼んでるぜ！！」

オコジヨが喋った！？

アーニヤちゃんは頭を押さえて「あのバカ！」って呟いているし。

【キングクリムゾン！魔法の説明を飛ばす！！】

「というわけで、魔法は秘密にしな居いけないのよ。」

「じゃないとオコジヨになっちゃってしまうのね？あれ？じゃあその力もってオコジヨは元々魔法使いだったの？」

確かにオッサン臭いし。

「いやいや、おれっちは先祖代々オコジヨ妖精っすよ。でもオコジヨ妖精の開祖は元魔法使いらしいっすけどね。」

そのオコジヨにされた魔法使いが、同じようにオコジヨにされたパートナーとオコジヨの姿のまま子供を作って、オコジヨの子供が生まれてっつのが通説っすけどね。」

「へえ、じゃああなたの先祖は人間なんだ。」

「まあでもそういう説が主流っただけで本当のことを知っている人はもう居ないんすけどね。」

ふう〜ん、面白い話だ。

「あれっ？だったらあたしの記憶も消すの？」

「普通はそうなんだけど、今の手持ちでやると頭がパーになっちゃうから余りやりたくはないんだよね。」

「頭がパーになるっつのは物騒ね。」

「姉さん。記憶をそっだけ消すっつのは結構難しいんすよ。だから余計なとこまで消しちゃうから、常識とかを思い出せし何も行動できなくなっちゃうんすよ。」

それは大分危ない・・・

「ネギのお嬢ならパーにせずその時の記憶だけを消せたりするんすけどね。」

お嬢は人の心に関する魔法が得意っすから。」

「そっういえばなんであたしが姉さんでネギ先生がお嬢なの？お嬢っつて小さい子の呼び方でしょう？」

あれ？二人とも難しそうな顔をしている。

「アスナ、落ち着いて聞いてね。ネギはね、実は、年があたしの一つ下なの・・・。」

え？一つ・・・年・・・下？

「年下！！？じゃあどうしてあんなに大人っぽいの！？」

「格好の事ならたぶん年齢差生薬っていう魔法薬ね。性格は昔からあんなのだったわよ。」

「じゃああたしは本当に9歳の女の子に勉強を教えてもらっていたの！？」

「まあでも、お嬢は天才中の天才っすからね」

「そうね、あれは異常よね。学校では分からない事があつたらネギに聞けって言われてたくらいだもん。」

「そんなに天才ならあたしより頭が良くても・・・だめだ、それは理由にはならないorz」

「兎に角ネギの所に行きましょう。消す消さないはあいつに相談してからでも良いでしょう。」

「歓迎会が始まった。ネギ先生としずな先生はいるが、高畑先生がいない。」

「最近はずちのクラスに全然来ていない。」

「あの噂が原因なのは分かっているが、あたしが何かしたら余計に高畑先生が困ったことになるってあやかに釘を刺されているから、会いに行くこともできない。」

「誰があんな噂を流したんだろう？」

「壁際で考え事しているとアーニヤがやってきた。」

「そういえばアスナ？この学園でネギに嫌われていそうな人を知らない？多分男なんだろうけど。」

「嫌われてる人？ネギ先生ならみんなと仲良く・・・。」

「今、誰からか分からないけど嫌がらせを受けてる人が居るんだけど、関係ある？」

「あちゃあ、もしかしたらネギの仕業かもしれないね。でも嫌がらせてレベルなら下手に手を出し辛いわね。」

「どういう事？」
高畑先生にネギ先生が嫌がらせしているなら止めさせないと。

「まあ、順を追って話すとネギは親に育てられたわけじゃないの。でも父親は魔法の世界じゃ結構有名だから昔からいろいろ言われていたらしいわ。」

あたしはその頃から知り合いだったけど、直接的に言っていたわけじゃないから気付いてはいなかったんだけどね。」

魔法なんてこんな人が大勢いる所で言っているんだらうか？

「大丈夫よ。遮音結界を張ってるから。」

で、続けるけど、あたしたちが学校に入る頃にはそれがピークになっていたのよ。」

特に校長は父親が生徒だった頃から知っていたようで、それが酷かったそうなの。」

それでネギがキレちゃって。」

と言っても表面で何かするってわけじゃないけど、他の人には自分だと分からないように結構なあくどい罫を仕掛けてたらしいわ。」

部屋に対人地雷を仕掛けたり、椅子に座ったら転移術式が発動して飛んでいる飛行機のエンジン内に転移するようにしたり。」

軽く殺しにかかっていたって聞いてるわ。」

私には殺したくなるほど誰かを憎んだ事は無いが、それほど校長のネギに対する扱いは酷かったのだらうか。」

「違うわよ。ただ溜まった鬱憤が弾けただけ。」

実際校長は生きてるしね。あの爺さん結構強いんだから。」

で、今度は校長がキレて、ネギと殴り合いになったのよ。」

初めは拳骨で済ませようとしたんだけど、ネギが武術を何処かで習っていたから応戦してたら殴り合いになったって本人たちは言ってたわね。

それである程度は和解したそうよ。罨が悪戯に変わったけど命の危険はないから。」

「じゃあ高畑先生が今受けてる嫌がらせは？」

「その高畑って人もこっちじゃ有名よ。確かネギの父親も知ってるから重ねて見てたとかそこらへんでしょう？」

下手に拗れさせてネギがブチギレたらあたしじゃ止められないもの。放っておきなさい。」

「でも……。」

「止めておきなさい。ネギが“軽く”で人を一人殺せる、なら“本気”じゃあ？」

周りを巻き込むじゃ済まないわよ。」

高畑先生がそんな世界に関わっているなんて知らなかったけど、二人の個人的な感情が元ならアーニヤちゃんの言うとおり下手に関わらない方がいい気がしてきた。

前なら躍起になって何とかしようと思ったけど、どうしてか今は高畑先生のために其処まで頑張る気になれない。どうしてだろう？

「魔法の世界って結構危険なんだね。」

あたしも記憶を消して貰って関わらないようにしなくちゃ。

「あら、魔法使いは基本的に良い人よ？大抵の人は困っている人を助けるマギステル・マギって言うのを目指しているし。」

「じゃあネギ先生は？」

なんとなくだけど彼女は人を助けるような性格じゃない気がする。

「あいつは魔法を使うけど魔法使いじゃないわ。」

「どついつこと？魔法を使えるなら魔法使いじゃないの？」

「あいつが普段使っているものは魔法とは全く違う物らしいわ。魔法を使うけどその頻度が低いからそう名乗らないって言ってたけど、本当かは分からないのよ。」

漫画家が画家と名乗らないような物らしいわよ。」

その例えはどうかと思っけどなんとなく分かった。

「じゃあネギに言いに行きましょう。」

知らないうちにネギ先生の事を怒らせたら大変なことになりそう。

さっきの話を聞いてなんとなく記憶を消すのも残すのも不安になってきた。

ネギ先生の仕業だと分かっていたら謝ることも話し合うこともできそうだから。

「ねえ、まだ記憶を消すのって不安があるんだけど、また今度ってことには出来ないの？」

私も人には話さないからさあ。」

「うーん、それってどうなんだろう？」

「ダメっすよ、姉さん。さっきも言ったが記憶を消すのは難しいんすよ。」

だから丁寧に、完璧に消すっていうのも知ってから消すまでの記憶を全て消して他の物に書き換えるっていうことっす。

今みたいに二時間かそこらを消すなら周りとの記憶が食い違っても、勘違いで済むんすけど、半日や一日経つと消した後の差異が大きくなり過ぎるんすよ。

だから消すなら今、消さないならずっとってことになっちまいます。

「

えっ？じゃあ今決めるってこと？」

「無理をすれば何日延びようとイけるんすけど、最悪は人格が変わっちゃうか記憶喪失扱いになっちゃうから、実際はそういうことに

なるツす・・・」

そんな、今すぐになんて難しすぎる。

どっちを選んでも後悔する。

ならあたしは・・・

（アーニヤ）

「で？結局消さないでそのままにしたわけか・・・」

あたしは今ネギの止まっているホテルに来ている。

こいつこないいい所に住んでいたんだ。

一年間暮らすから買い取ったって言っていたけど、どんだけ金を払えばそんな事が出来るのかしら？

ムカツク

「そうよ、本人が拒否しているのに無理やりやるつとすればどうなるか分からなかったし、それに・・・」

そう、こっちの方が重要だ

「あんたあの子に定期的に何か魔法を掛けているでしょう？」
それも記憶に関する領域にだ。

ネギは笑ってその件に関しては何も言わなかった。

「それにしてもアーニヤ、君はバレたらオコジヨにされるといっのに余裕だね？」

すっかり忘れていた。

最後の方は記憶消去の術式の面倒さしか頭になかった。

「まあバレたら私が匿って一生面倒を見てあげよう。
うっん、何処で飼ってあげようかな？」

こいつは全く・・・

「飼うつてあんた、どうせならあたしがオコジヨにされる前に助けなさいよ」

あたしはオコジヨになんかなりたくないわよ。

「フーフ 当たり前じゃない、オコジヨになんかささせる訳ないわよ。」

あれ？じゃあ、人間のままで飼うつもり？

これが日本で流行りのヤンデレってやつかしら？
なにそれ、怖い。

え？

ちよつ！

ネギ！？

どうしてそんなに近づくの！???

近いわよ！！

そこは！！！？

あああゝ・・・

第18種禁忌 記憶消去は大変です。(後書き)

次回からは吸血鬼編に入ります。

ぶっちゃけもうネギにさせる仕事がないので。

細々したネタがないわけじゃないのですが、テンポが悪くなるので省略します。

でも希望があったらいつか番外編で出します。

ではまた明後日ノシ

第19種禁忌 吸血鬼始動（前書き）

こんにちは。

一日遅れですみません。

言い訳すると、中間テストとレポートが重なって大変な目に会っていました。

しばらくは今までのように二日以内とはいかないので、ご了承ください。さい。

今回から戦闘に入ります。

それではお楽しみください。

第19種禁忌 吸血鬼始動

「エヴァ」

「………3年」A組！ネギ先生……！！」「」「」「」

「は、はあ」

小娘たちが騒いでいる。

新学期になって浮かれているのだろう。

その中心になっていているこの春から正式に教員になった女は疲れ切った様な顔をして返事をしている。

あの女が正教員になったくらいで浮かれる筈もないか。

むしろ教育実習生のままで居ようとしていたくらいだな。

ジジイがさつさと終わらせようとしている奴を留めておくために東奔西走していたのを良く覚えている。

あいつは最悪課題を無視して帰ろうとしたくらいだな。

マジステル・マジにはなんの興味も無いのだろう。

そして今私が考えなければならぬのはあの女からどうやって血を奪うかだ。

初日だけでも高い戦闘能力と謎の力を持っている事を確認できた。

私が敵として血を奪いに行けば、間違いなく生徒であっても倒しにかかってくるだろう。

そして今の状態では確実に私は負ける。

手も足も出ずにと言う事は無いが、相手がどれほどの手札を持っているのかすら分かっていない現状では勝てるわけがない。

対して私は例え結界がなくても切り札を除いては魔力が強いだけの普通の魔法使い。

体術が使える、経験が多い等があっても、魔法使いの常識から外れ

ていない以上、それだけではあっさりと覆される惧れがある。

現に初日の覇気と言う物を使われては一瞬とはいえ隙が出来る。
あの女はその隙を確実に、的確に突いてくるだろう。

あのアーニヤという少女はほぼ間違いなくパートナーだ。
茶々丸を信じていないわけではないが、どっちが上かはアーティフ
アクト次第では向こうが上だろう。

兎に角現状はちまちまと生徒を襲い、魔力を集めるしか無い。
境界をどうにか出来れば手が無いわけでもないんだが、今はそんな
事を言っただけでも仕方がない。
攻めて後1枚手札があれば・・・。
超か葉加瀬にでも武装を頼もうか？

文字通りパクティオーカードが1枚でもあればなんとかかなりそうだが、現状茶々丸しか動かせる手下が居ないので・・・
いや、もしかしたら茶々丸と仮契約出来ないだろうか？
魂さえあれば仮契約出来るというし、茶々丸が自分で物事を考えているのならば、魂もあるのではないだろうか。
帰ったら試してみるか、何か減る訳でもあるまいし。

今日は健康診断だけで、早く帰れるのでありがたい。

「大変だあ！ネギ先生！まきえが！！」

あの女が保健室に掛けていく。
昨日の夜に佐々木まきえの血を吸って放っておいたのが見つかった
ようだ

本当なら吸った後に挑発の意味を込めて魔力を残しておくのだが、
恐らくあの女は私だと分かった瞬間から攻撃を始めるかもしれない。
それは拙すぎる。

いや、もしかしたら自分には関係ないと無視を決め込むかも知れない。

.....。

こっちの方が確率が高そうだ。

夜になるのを待っていつものように黒のマントを羽織り、獲物を探す。

見付けた。

「出席番号27番 宮崎のどかだな？悪いが少しだけその血を分けて貰おう！」

そういつて私は宮崎のどかに襲いかかった。

「こ、こらー！あんた何してんのよ！！」

そう言いながらとび込んできたのはバカレットこと神楽坂アスナだ。もはやバカレンジャーとは言えないほど点数を取ったが、皆未だにこう呼んでいる。

そのバカレットの放った蹴りが私の魔法障壁を無効化してきた。

「ぶべらっ！！」

なぜ無効化できたのかは分からんが弱体化したとはいえ真祖の障壁を無効化するなど、かなりのレアスキルを持っているようだ。

「本屋ちゃん大丈夫！？」「は、はい。なんとか。」

あいつが来てから不可解なことなど起きて当たり前だと最近思えるようになったので、立ち直るのは早かった。

というかあいつは高畑に何をしたんだ？何をすればあんなふうになるんだ？

くその頃の高畑く

「うふふふふふ。僕はロリコンなんかじゃないんだよ。年上好きなんだ。30歳以下は女なんかじゃないんだ。うふふふふ。壁に向かって話しかけていた。」

くエヴァく

「魔法の射手、氷の矢」

懐から魔法薬を取りだし、神楽坂に放つ。

魔法は神楽坂の体に当たり、服のみを弾き飛ばした。

やはり無効化している。

「きゃー！なによこれ!？」

ふっ、あいつを吸血鬼化して従者にすれば、かなりの戦力になるな。

その時神楽坂の後ろから複数の足音が聞こえた。

「ちっ！見つかったか？」

足音の正体が近付いて見ればそれは学園の魔法教師共ではなく、ただの侵入者である事が判明した。

全くタイミングが悪い。

神楽坂の魔法無効化が記憶消去にまで作用するなら、この場で大っぴらに戦う事はできない。

どうしたものか。

敵は7人、服装と装備から見て西洋魔法使いと東洋呪術師の混成部隊といったところか。

どちらの協会にも属さず、傭兵をしているのだろう。

此処に来たのもどこかからの依頼か。

取敢えず追い払おうと懐から扇子を取りだそうとした時、そいつは現れた。

「うわあ、めんどくさいことになってますね。ああ、全員動かないで下さいよ。」

魔法生徒の春日美空だった。

それにしてもあいつはあそこまで冷たい雰囲気を出すような奴だったのか？

「けつ、俺たちの相手が小娘一人とは舐められたものだな！

てめえ一人でこの人数を捕まえられなくても思っているのかよ！

こつちには人質が居るんだぞ！」

気付いたら宮崎が敵の一人に捕らえられていた。

不覚だ、そこまで気を抜いていたとは。

だが人質がいるのでは私は手を出すつもりはない。

奴らも殺すつもりはないのだろう。

何かを盗った帰りなら、逃げる方向は反対だ。

逃がしても問題は無い。

「いやいや、あたしは別に捕まえる気なんかないっすよ。あたしはあんたらを殺せと師匠に命令されているっすから、あんたら6人を殺すだけっすよ。」

「殺すだと！？この学園の温い連中に俺たちが殺される訳がない！それに6人つてことはあと一人は見逃すつも」『ボウッ』

侵入者の一人が春日に怒鳴っている最中に、宮崎を捕まえていた男が突然燃え上がった

「きゃあああ！！！」

宮崎が熱から逃げるように燃えている男から離れる。

あいつは今何をしたんだ？

良く見ると男の頭から何かが突き出ている。影から判別するに、恐らく細身の剣だ。

「あたしが6人と言ったのは一人は見逃すからではなくて、一人はもう終わっていたからつすよ。」

「まったく、師匠も面倒臭いことをいうつすね」

この状況と春日の言葉から春日がやった事は間違いないのだろうが、私は春日が何をしたのか全く分からなかった。

宮崎が捕らえられてから一瞬たりとも気を抜いた覚えはないのにだ。あれは春日のアーティファクトか？

「てめえ！良くもやりやがったな！！」

侵入者の一人が春日に突っ込んで言った。

全身を魔法で強化し、周りには視覚化される程の魔法障壁を張り巡らせている。

典型的な魔法剣士の様だ。

春日はそれを一瞥すると懐から細身の剣を取り出した。

先程炎上した侵入者に刺さっていた物と同じ物の様だ。

春日はそれを侵入者目掛けて投げる。

その剣は唸り声を上げて飛び、突っ込んできた侵入者の魔法障壁を無視して心臓に突きささった。

魔法無効化能力者か？

いや、一日に二人も現れるなど、考えられない。

多分アーティファクトの能力だろう。

突き刺さって数秒で男はアーティファクトごと燃え上がった。

さっきの燃え方と同じ。

あのアーティファクトは刺した人間を燃やす効果を持っているようだ。

「き、貴様！何をした！？」

「火葬式典と風葬式典を組み込んだ黒鍵に祝福儀礼を掛けてあるっす。」

祝福儀礼は全ての“魔”を浄化し、風葬式典は一瞬で触れた物の水分を奪い、火葬式典は刺さった者を焼き尽くす。

対魔法使いに絶大な効果を発揮する礼装っすよ。」

聞いたことも無い術式だ。

恐らく魔法とは全く違うものなのだろう。

普段とまったく同じ態度に見える春日から殺気が放たれ空間を埋め尽くす。

「まあ、なんですか。あなた達は一人も逃がす気はありませんよ。」

人を殺すことを厭わず、それを食事や睡眠と同じように生活の一部として扱う者

その在り様を人は化物と呼ぶのだろう。

第19種禁忌 吸血鬼始動（後書き）

次回はできれば3日以内に投稿します。
遅れたらすみません。
ではまたノシ

第20種禁忌 吸血鬼集う(前書き)

今回もカニバリズム表現っぽいものがあります。
やっぱり戦闘描写ってムズイっすね。
ではどうぞ。

第20種禁忌 吸血鬼集う

くエヴァく

「これ以上一般人に見られるのは拙いし、5人も一斉に相手にするのは無理っぽいんで、

取敢えず眠って貰うっすね。」

ゾクっ!!

春日が発した何かは神楽坂と宮崎、そして侵入者の一人を昏倒させた。

あれは確かネギ・スプリングフィールドが覇気と呼んでいた物だ。

「ありやりや、一人しか倒れなかったか。まあ良いっすよ。残りが何人でも、どうせ駄目元だったし。」

そう言いながら春日は黒鍵と呼んでいた細身の剣を一本倒れた侵入者に突き立て燃やし、

残りを仕舞った。

「武器を仕舞うとは、舐められた物だ！」

そう言いながら陰陽術師と前衛の剣士が飛び出した。

「武装色」

春日が呟くと同時に剣士の気で強化された刀が振り下ろされた。

ギーン!

金属同士がぶつかる様な音がして、剣士の刀が砕け散った。

良く見ると春日が腕で防いでいたようで、その腕は赤黒く染まっていた。

「バカな!!?」

剣士がそう叫んだ次の瞬間には春日の拳が剣士の腹に当たった。

「ぐはっ!!」

剣士は全身を気で強化していたが、春日からは未だに気も魔力も感じない。

という事はあの覇気と言う物は我々が使う物とは全く別の系統の物だということだ。

剣士が瞬動で距離を取るが、ダメージが大きすぎたようで膝を着く。あの剣士は暫くは回復に専念しなければならぬだろう。

陰陽術師が札を投げる。

札からは雷が発せられ、春日に当たる。

土煙が舞い上がり、春日が見えなくなる。

侵入者が春日に気を取られている内に私は倒れている神楽坂と宮崎を物影に引つ張り込む。

あのままにしていたら怪我をしかねん。

土煙が晴れるとそこには無傷どころか服すらも傷ついていない春日が居た。

「な!?!どうやって防いだ!?!魔力は感じなかったぞ!!」

後ろの魔法使いが叫ぶ。それはこの場に居る全員の思うことだった。

「流石にこれ以上はこの状態のままでは、きつそうっすね。じゃあ少し本気を出させてもらうっすよ!!」

発狂!

春日の雰囲気が変わった。

いや、人が変わったと言っべきだろうか。
先程まで空間に満ちていた春日の殺気は質と濃度を増し、既に空気が泥のように感じられた。

“怖い”

久しぶりの感覚だ。

恐怖を感じたのは何年振りだろうか。

少なくともこの三百年のうちは感じた事のない感情だ。

目の前には地面がある。

知らずのうちに下を向いていたようだ。

気力を振り絞って春日を見ると、春日は嗤っていた。

その嗤い方はまさに狂笑と言っに相応しい嗤い方だった。

口は三日月のように弧を描き、目は獲物を狙う猛獣のようだった。
全身の筋肉が程良く弛緩しているのが目に見え、今にも獲物に飛び掛かるうとしているようだった。

192

「うおおおおお！！」

二人目の魔法剣士が杖を振りかぶって春日に瞬動で近づく。

それを春日は腕の一振りで薙ぎ払った。

魔法剣士は真横に吹き飛ばされたが障壁を張っていたので、ダメージは少ないようだ。

なんとか回復した剣士がパクティオーカードで新しい剣を出し、魔法剣士と二人がかりで攻め、残った陰陽術師と魔法使いが援護する。
春日はその場から全く動かず、全ての攻撃を対処し続けた。

その内に剣士たちの動きが変わり、hit&awayが多くなる。

「思った通りだ！こいつ、力は強いがスピードは遅い！俺たちの動

きについてきてねえ!!」

成る程、春日は動かなかつたのではなく動けなかつたのか。

しかし私のその考えは外れた。

《荊》

春日の姿が消え、最後尾の魔法使いの前に現れた。

「覇気武装・属性付加^{エンチャント}“燃える天空”・是、煉獄掌也」

春日の右手が燃え上がり、その拳が魔法使いの腹を突き破った。

「解放《L i b e r a t i o n》」

魔法使いの体が春日の腕を中心に爆発し、その肉体が粉々に碎け散ち燃える。

辺りには先の二人と合わせて、肉の焼ける臭いが強烈に漂っている。

さっきの技は私の“闇の魔法”に似ている。

春日の言葉から推察するに、覇気に魔法を付加したのだろう。

春日の腕は一時的に炎の精霊と同化していた。

実体こそあるが、腕は固体化した炎とでも呼べるものとなっていた。

「残数・参」

春日の腕は又も赤黒く染まり、魔法剣士に向かって走り出した。

「クソッ!!」

魔法剣士は杖を掲げ、障壁を前面に展開し、春日の攻撃を受け止めようとした。

ガンッ

しかし春日の拳は障壁など無いかの様に魔法剣士に当たった。

「何だよ。何なんだよ！さっきから！！？」

侵入者たちが叫ぶのも無理は無い。

六百年生きてきたこの私でも今日の前で何が起きたのか理解しきれないのだから。

春日は攻撃を続け、魔法剣士は杖で受け止める。

その間も障壁は張り続けているが、その全てが無視されている。

「気を付けろ！そいつの腕が紅い時は魔法も気も効かないぞ！！！」

剣士が叫びながら斬撃を浴びせるが、春日は気にも留めていない。

「それを早く言え！」

魔法剣士は杖を魔力で強化し、殴りつけた。

春日を吹き飛ばす事は出来なかったが、反動で距離を取る事は出来た。

その瞬間春日は陰陽術師の後ろに回り首筋に指を突き刺した。

《指銃》

春日の指は陰陽術師の脊椎を断ち切った。

「残数・弐」

春日は懐から鎖で繋がれた黒鍵とは違う剣を取り出した。

その剣は柄が何本も鎖で繋がっていた。

「爆導鎖！」

ジャラララララララ！

春日はその連剣の鎖を鞭の様に振り回し、魔法剣士に剣を突き立てた。

ボツ シュパツ ボツゴツ

剣の柄が爆発し、魔法剣士の体が四散する。

「残数・きイイイイ！！」

鎖から外れた剣を両手に逆手で持って春日は駆けだした。

三日月状に歪んだ口からは鮫の様な牙が覗き、駆ける姿は餓えた獣を思い起こさせる。

「うわああああ！！」

パニックを起こした剣士が剣を振り回す。

型など関係無く、子供の癩癩の様に振り続ける。

。春日は剣士の両肩に両手の剣を突き刺し、その口を大きく開け……

ゾブリ！！

それは最早惨劇と呼ぶにふさわしい業だった。

先程までの蛮行が戦闘と呼べるなら、これは捕食だった。

春日は剣士の首筋に喰らいつき、その喉笛を噛み切らんとばかりに

血を吸っている。

その姿はまさしく“吸血鬼”だった。

私よりも遙かに“吸血鬼”らしい“血を吸う【鬼】”だった。

「ゲアアアアアア！」

血を飲み干した春日は“吸い殻”を捨て、月に向かって吼えた。その咆哮は人を殺した嘆きであり、人を殺した喜びでもあった。

パチパチパチパチ

何処からともなく拍手の音が聞こえる。

辺りを隈なく見渡しても拍手の主の姿は見えない。

すると春日が自らの後ろを凝視する。

ゾルツツ

春日の見詰める何も無い筈の空間から滲みでるように一人の男が降り立った。

その男は黒い拘束具の様な服を着て、その上に紅いコートを羽織っていた。

「良くやった、我が弟子よ。しかしあの程度に七分も掛けるのは戴けないな。」

その声は幼子の様で、少年の様で、青年の様で、老人の様で、聖者の様で、悪魔の様でもある不思議な声だった。

「部外者が三人も居る所でやるとは聞いてないっすよ。御蔭で手間が増えたっす。」

気付けば春日は普段学校に居るのと変わらない雰囲気に戻っていた。

それでも殺気が残存していることから、さっきまでの状態がどれほど以上だったのか良く解る。

「ふんっ、一度見られただけで効かなくなる様な大道芸しか身に付けないから手を隠さねばならんのだ。学園長には私から報告しておこう。」

そう言いながら男の姿はまた滲むかのように消えようとしていた。

「待て!!」

気付いたら私は男を呼び止めていた。奴の正体には薄らと辺りが付いている。

恐らくあれが春日の言っていた師匠なのだろう。侵入者を春日に塵にさせたのはあいつだ。

春日の魔法の師はシスター・シャークティーだが、春日は師匠とは呼んでいない。

そして今日、春日は覇気と言う全く未知の力を操って見せた。

そんな力を使える者を私は一人しか知らない。

他にも扱う者は居るのかもしれないが、あの女は、この男は、自在に姿を変えていた。

まるで本当の姿を忘れたかのように。

私は何も言わないのを見て、男の姿が又も薄れ始めた。

「待てと言っているだろうが！ネギ・スプリングフィールド!!」

男の姿はチェシヤ猫の様に嗤った。

姿は牙しか見えぬ、正しくチエシヤ猫の様だった。

そして名を呼ばれたのを聞き届け、そのまま消えていった。

第20種禁忌 吸血鬼集う（後書き）

結構難産でした。

エヴァが終始解説役っぽくなっていて少しらしくなかったかな？

あと茶々丸を忘れてた。

ではまた三日後にノシ

第21種禁忌 吸血鬼の従者（前書き）

珍しく早めに投稿できましたが、
今回は会話文と現状説明だけなので途中読み飛ばしても大丈夫です。
ではどうぞ。

第21種禁忌 吸血鬼の従者

くアスナく

目が覚めたらファンシーなぬいぐるみに囲まれていた。

此処は何処だったっけ？

確かわたしは、このかが女子寮で本屋ちゃんが居ないって騒いで、そしたらみんなで探しに行こうって事になって、

見付けたらエヴァンジェリンさんが本屋ちゃんを襲ってて？

あれ？

二人はどうしたんだらう？

その後は・・・！？

「気が付いたようだな」

エヴァンジェリンさんがドアを開けて入ってきた。

「此処は何処？本屋ちゃんはどうしたの？」

不思議と落ち着いている。

部屋に焚かれている香のおかげかもしれない。

「此処は私の家だ。」

宮崎なら記憶を消して部屋に帰しておいた。

一応言っておくが少々血は吸ったがそれ以外は無傷だ」

「もしかして桜通りの吸血鬼ってエヴァンゼリ・・・」

・・・噛んだ。ちょっと恥ずかしいかも。

「言い難いならエヴァで良い。桜通りの吸血鬼なら私の事だ。」

・・・とさっきまでなら言えたんだがな。」

「どづいう事？エヴァちゃん？」

「エヴァちゃん……。まあいい、そうだな。」

お前は戦闘が本格的になる前に春日に気絶させられたのだったな。」

どこから説明しようか……

エヴァちゃんが顎に手を当てて考えている。

「じゃあまず一番初めから教えてよ。」

どうして本屋ちゃんを襲っていたの？」

そう、今回の事は此処から始まった気がする。

「どうして襲ったのかは簡単だ。他ならぬ私の事だからな。」

血を貰おうとしたのだよ。」

「血を？ やっぱりエヴァちゃんは吸血鬼なの？」

桜通りの事も認めていたし。

「そうだ。私は吸血鬼である目的の為に血を吸っていた。」

と、その前にお前はアンナ・ユーリエヴナ・ココロウアと同室だったな。」

奴の事情を何処まで知っている？」

名前長！？ もしかしてアーニヤちゃんの事かしら？

「アーニヤちゃんの事？ アーニヤちゃんが今回の事に……。」「

唐突に理解してしまった。」

2年の中間テストの辺りから理解力が上がってきたと思っていた。周りからも落ち着いたと謂われるほどに。

でもこんな時に働かなくても良いのに。」

「魔法が関わっているの？」

エヴァちゃんにも、その後の美空ちゃんの事にも……

「それを知っているのなら十分だ。」

私は600年の時を生きる真祖の吸血鬼で、悪の魔法使いだ。

15年前からサウザンドマスターと言う魔法使いに呪いでこの地に縛り付けられている。

その際に魔力の殆どを封印され、どうにもならない状態だ。」

サウザンドマスター……。

なんか懐かしい感じがするが、もっと最近何処かで聞いた気がする。

「ネギ先生のお父さん？」

「なんだ、其処まで知っていたのか。そうだ奴の父親だ。」

私は奴の呪いで15年も中学生をしているんだよ。」

15年、600年の時を生きる吸血鬼にとっても決して短い時間ではない。

「じゃあ、その呪いを解く為に血を集めていたの？」

「解く為と言うよりその前準備の為だな。」

血の中に含まれる魔力を集めていたんだ。

先も言ったが自前の魔力が封印されている以上他から持ってくるしかなかったのだよ。」

「血を吸われた後遺症とかは無いの？」

「眷属化という者があるにはあるが私の意思での切り替えが可能だ。今のところそんなものを使う気にはならん。」

眷属にはしない……。

そう言った時のエヴァちゃんの顔は苦虫を噛み潰した様に歪んでいた。

「血を集めるのは前準備って言ってたけど、本番は何をするの？」
もし私の大切な誰かを酷く傷つけるようなら何とかしなくちゃ。」

「・・・それが今夜の騒動の最大の原因だ。

呪いを解くには掛けた本人、もしくは血縁者の体の一部を媒介にするのが一番効率が良い。つまり・・・」

「ネギ先生の体の一部が必要・・・てこと？」

「その通り、私は奴の血を大量に飲む必要がある。」

けどそれは多分難しい。

今日初めて喋ったけど、それでも分かる。

彼女は優しい。

悪の魔法使いって言ってたけれど、彼女は本当は物凄く優しい子なんだと、

なんとなく分かる。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえた。

「入れ」

エヴァちゃんが促すと、クラスメートの茶々丸さんがお盆を抱えて入ってきた。

「飲み物をお持ちしました。」

そういつて彼女はお盆から紅茶を入れて渡してくれた。

「美味しい」

「茶々丸は私のパートナーだ。ガイノイドといって科学と魔法の副産物だ。」

話を戻すが奴の血が必要な以上、奴とはどう足掻いても対立しなければならぬ。

何かおかしい。どうして血が必要だからと言って対立する必要があるのだろうか。

ちょっとお願いして献血させてもらえばいいんじゃないだろうか。

「私にも強者としてのプライドがある・・・、
と言いたいところだが実際は奴が魔法使いでは無い事や奴の立場、
必要な血の量などが関わってくる。」

「魔法使いじゃないって言うのはアーニヤちゃんから聞いた事があるけれど、
それがどう関わってくるの？」

「一般的な魔法使いはマギステル・マギと言う者を目指す。」

これは困っている者を魔法で助けたり、戦争を止めたりすることに力を注いでいる。」

正義の味方の様なものだ。それは知っているか？」
わたしは小さく頷いた。

「そしてその中には私の様な悪の魔法使いでも助けようとする派閥も存在する。」

しかし奴はそれを目指していないし、善人でならないから助けようともしない。」

何かを願うなら対価を用意しなければいけない。」

それに呪いを解く媒介として血液が有効なのと同じように、呪いを掛ける媒介としてもかなり有効なんだ。」

そして更に三つ目の理由が此処に関わってくる。」

必要な血の量・・・

それほどまでに沢山の量が必要なのだろうか

「量は成人男性が意識混濁して倒れるのが1、5？〜2？、
しかし私が必要としているのが3？」

最低でも4回に分けて吸わなければならない。」

そんな事を要求しようものならそれこそ魂まで持ってかれかねないな。」

そして“最後の理由”

「ネギ先生の立場って？」

「奴は7年前からいくつかの会社を立ち上げている。

一番初めの会社は只の会社ではなく兵器関連の会社だ。

製造、運搬、販売全てに関わっている。

先も言ったように普通の魔法使いは争いを嫌う、しかし奴は3歳の頃から人を殺すための物を作り続けてきた。

人の殺し方を考え続けてきた。

奴のせいで戦争が昔では考えられない程陰惨で残酷な物になった。

そして春日はその鍛え上げられた兵士、いや作りだされた兵器の内
の一つなのだろう。」

“春日美空”

中学の三年間を共にしてもあまり話した事のない少女。

でも今は何か彼女と話さなければいけない気がする。

彼女をこのままにして放っておけない。

人を殺すのはいけないことだ。

そんなこと彼女も分かっているだろうが、それでもやめるように説
得しなくちゃだめだ。

「奴をあそこまでの戦闘技巧者に育て上げたのはネギ・スプリング
フィールドだ。

お前が気絶した後侵入者全員を塵にして帰って行った。

奴の使う術の殆どが私の知らない、且つ現存する魔法理論とは掛け
離れたものだ。

奴を相手するのは私で難しい。

既存で無いというだけで次の手が全く読めないからな。」

今更ながらに疑問が生じた。

「どうして私に其処まで話してくれるの？」

「……」

沈黙が痛い。

それは何か疾しいことがあるという事なのだろう。

「順を追って話すつもりだったがこれ以上は蛇足だし、下手に先入観を持ってしまつのも困るだろう。」

目的を言うならあの女と戦う時に私のパートナーになって欲しい。既に茶々丸が居るが二人で力を合わせてパートナーを封じるか、私が魔法を使う際に盾となって貰いたい。」

“盾”

戦闘の際に最も傷つきやすいのは素人のわたしでも簡単に分かる。

「お前には魔法無効化というレアスキルがある。」

そうでなければ宮崎と同じように記憶を消してさっさと女子寮に返している

そのスキルは魔法と名乗っておきながら気と呼ばれる物も無効化していたことから、

物理攻撃に弱い等の制限はある物の、殆どの質量をもたない類の攻撃を消すことができる。

特に符術を無効化出来るのは心強い。」

「どうして符術なの？それに符術って魔法なの？」

エヴァちゃんが頭を押さえて考え込んでいる。

其処まで難しい質問をしてしまったのだろうか。

「今、この場で魔法と言うのは通常ではあり得ない現象の事を指していると考えてくれ。」

符術は恐らくネギ・スプリングフィールドの最も使うと思われる技が符術だ。

何故かという説明は今は省かせてもらう。

ある程度は検証しないといけないが、もしやる気があるなら訓練を受けて貰う。

いやだというならこのまま女子寮に返す。

その際は私と茶々丸のみで戦うがどうする？」

・・・その質問はズルいよ。

エヴァちゃん・・・。

こうして私は吸血鬼の従者になった。

第21種禁忌 吸血鬼の従者（後書き）

くだつぐだすね。

次からはちゃんと進めたいと思います。

次回の更新はちょっと遅れて四日後くらいになるかもしれませんが、ではまたノシ

第22種禁忌 闘争の契約（前書き）

遅れに遅れましたがやっと投稿です。

区切りのいいところで切ったので、ちょっと短いですがお楽しみください。

第22種禁忌 闘争の契約

「エヴァ」

「何がどうなっている・・・？」

「今この部屋には二人居る。」

「私とネギ・スプリングフィールドだ。」

「あなたが風邪をひいたからプリントを持って来たんですよ。にこやかに女は笑う。」

「私が花粉症と風邪の併発で苦しんでいる所にこの女がやってきたのだ。」

「茶々丸は今紅茶を入れに行っていて、神楽坂は別荘で修行中だ。」

「はい、これが今日のプリントでこっちが宿題です。」

「なんだか優しい先生ですと言わんばかりの表情だが、先日のこいつを見た後だと気持ち悪くてしょうがない。」

「その薄ら寒い笑いを止める。余計に具合が悪くなる。」

「ええ〜？それでも優しそうな先生って評判なんですけどね。」

「こいつの声がいちいち耳に障る。」

「その姿も止める。あの男の姿の方がまだマシだ。」

「いちいち注文が多いですね。これでどうだ？」

「こいつの変身の仕方は恐らくだが幻術ではなく、骨格の変形だ。だから姿が変わっていても魔法使い相手でもばれる事は無いのだから。」

「お前には幾つか聞きたい事がある。」

あの覇気と言う技はなんだ？
春日美空に何をした？どうするつもりだ？」

ネギは無表情で言い放つ。

「何故お前に答えなければならぬのだ。

確かにお前の担任教師だが、聞けば何でも答えて貰えなくても思っているのか？」

「フン、素直に答えるとは思っておらん。

だが、貴様の事だ。

当然調べているだろうが私は600年の時を生きる真祖の吸血鬼だぞ。

力尽くで聞き出す事も出来るのだ！」

当然ハツタリだ。

そんな事が出来るなら初めから問答無用で血を奪っている。

「よくもまあそんな大言壮語を吐けた物だな。

戯れに春日については話してやろう。

春日は力を望んだ、だから力を与えてやった。

ただそれだけのことよ。」

それだけ？それだけだと！？

「そうじゃない！貴様春日を吸血鬼にしただろう！？」

「クハハハハハハハ！」

突然ネギが笑いだした。

「何がおかしい！？」

「春日が吸血鬼だと！？吸血鬼を舐めるなよ！小娘！！

吸血鬼とは至高の存在だ！

未だに狂気すら支配できずに振り回されている様な小娘がなれるわけがなかるう！！！！」

「だが春日はあの侵入者の血を吸っていたではないか！？
それをどう説明するのだ！」

ネギは私を蔑む様に言った。

「あれは以前戦い、恐怖した敵の技術をフラッシュバックさせただけだ。

大方食人衝動持ちと戦った時の物だろう。

あれの体には一切手を加えてはいない。

まさか“吸う”と“飲む”の違いさえ分からんとは・・・

やはり貴様も出来損ないか。」

出来損ないだと！？この私が出来損ないだと！？？

「貴様！良いだろう！！」

そこまで貴様が言うのなら勝負してやる！！

貴様を倒して先の言葉を訂正させてやる！！」

風邪である事も忘れ私はベッドの上に立ちあがった。

「勝負は4月15日の夜！世界樹の前だ「ドガッ！！」がはっ！？
？」

奴に指を突き付け時間と場所を指定しようとした瞬間、私は壁に叩きつけられていた。

目が霞む。意識が飛びそうになる。

私は舌を噛んで無理やり意識を繋ぎ止める。

私は髪を掴まれ無理やり上を向かされる。

「温いな、流石出来損ない。」

化け物としての誇りが無いと見える。

欲しければ奪えば良い。

苛立つなら殺せば良い。

それが化け物だ。

気に食わなければこの場で遣り合えば良い。」

唐突に髪を離され私の頭が地面にぶつかる。

その上から後頭部を踏み躪られ頭を上げる事が出来ない。

「グヌヌヌヌヌヌ！」

「だが、不意打ちだの調子が悪かったただの時から言われるのも癪に障る。

4月15日の夜だったな。

場所の指定など要らん。月が昇った瞬間からが闘争の始まりだ。

相手が何処に居ようが、何をしていようが構わん。

全力で遣り合おうではないか。」

気付けばネギは既に離れており、私もいつの間にかベッドに戻って

全身の痛みも無く、

何事も無かったかのように全てが元通りになっていた。

今までののが全部幻覚だったのか？

痛みすら感じさせる事が出来るほどの強力な幻覚に少ない驚嘆を感じた。

「貴様……。」

私をここまで侮辱したのだ。

只で済むとは思わなよ。」

言葉に反して私の心は『果たしてこいつに勝てるのか？』という疑問が渦巻いていた。

「文句があるなら掛かって来い、貴様にその度胸があるのならな。」
今の状況で何を言っても負け犬の遠吠えだ。
こいつに勝つにはどうすればいいのだ。

コンコン。

「失礼します」

茶々丸が紅茶を持って入ってきた。

「マスター、ネギ先生紅茶が入りました。」

茶々丸に気を取られている内にネギは普段の教師の姿に戻っていた。

「おや、素敵なお香りですね。では一杯だけ頂いて帰りましょう。」
そう言っただけ飲んでネギは帰って言った。

「急いで神楽坂を仕上げなければ・・・」
あいつの魔法無効化能力の発動条件もだんだん解ってきた。
後はあいつの戦闘力の向上のみだ。

「何かあったんですか？マスター！」
「後で全て話す・・・」

（三人称視点）

4月15日の夜、月が昇るまで後1分。
エヴァンジェリンは茶々丸を連れて世界樹の前にやってきたが其処には既に先客がいた。
その男は輪郭を失ったかのように周りがぼやけて見えていた。

エヴァは緊張を押し隠すかのように唾を飲み込み挑発した。

「おや？あれだけ吼えていたのに正面から来るのか？ネギ・スプリングフィールド。」

「今なら目を瞑ってやるから何処かに隠れても良いんだぞ？」

「私の戦闘法は不意打ちとはかけ離れているのでね。」

「気づかいは無用だよ。」

ネギ・スプリングフィールドは右手を上げて天を指差し言い放った。

「月が昇る。闘争の夜の始まりだ。」

昇ってきたのはあり得る筈の無い“満月”だった。

第22種禁忌 闘争の契約（後書き）

次回からネギの戦闘シーンです。

エヴァがちょっとへたれているのは仕様です。

あと大停電の日付は有ってますか？ちょっと自信がないです。
では三日後にノシ

第23種禁忌 激化する闘争（前書き）

本格的に戦闘シーンに入りました。
長いので二つに分けます。

第23種禁忌 激化する闘争

（三人称視点）

ドガガガガガガガガッ！！
マシンガンが地面を削る。

「クソッ！」

エヴァは必死に逃げるのに精一杯で反撃出来ていない。

ネギの足元から影が起き上り、影の中に手を入れRPGを取りだした。

ボシユウ

排気口から噴出炎を吐き、弾頭が飛んでいく。

エヴァは咄嗟に障壁を張るが衝撃までは防ぐ事が出来ずに吹き飛ばされる。

「なんて威力だ「カチッ」バツッ！？」
バンッ！

「今のは何だったんだ？茶々丸！？無事か！？」

「無事です、マスター。今のは恐らくHCL社製のクレイモアという対人地雷です。」

「兵器のオンパレードって訳か……。クソッ、魔法どころか陰陽術すら使わんとわな。」

「どうした？闇の福音。先程から魔法薬で防ぐだけではないか。あれだけの口を叩いておきながら手も足も出ないとは。

勝つ算段があったのではないのか？」

「黙れ！貴様ごときには私の魔力を使うまでも無い！！魔法の射手・氷の11矢！」

魔法の射手はネギに触れることすらできずに消えた。

「ふんっ、使わないのではなく使えないのであるっ？」

お前の魔力が学園の結界で封印されているのは簡単に調べが付いたさ。

これは魔法薬如きでは防げんぞ。」

【爆符連陣】

ネギの袖から大量の起爆札が飛び出し、二人を取り囲んで爆発した。

「ケホケホ、なんて量だ。茶々丸、後何秒だ？」

「後13秒です。」
ならば、

「魔法の射手・戒めの矢！」

エヴァの魔法はネギに当たり、ネギの行動を阻害する。

「マスター。結界が解除されました。」

エヴァの封印が解かれ、莫大な魔力が溢れだす。

「フハハハハハハ！ネギ・スプリングフィールド！これで貴様に勝てる！！」

エヴァは断罪の剣を使い、ネギに向かって走り出した。

断罪の剣はネギの胴体に当たり、ネギとエヴァの胸を切り裂いた。

「ナニ！？」

エヴァの一瞬の混乱をつき、ネギは拘束を脱しエヴァの胴体に強烈

な蹴りを放った。

エヴァの体はサッカーボールの様に跳ね、世界中にぶつかり止まった。

茶々丸が背中に拳撃を放つが、同じように背中に衝撃を感じて吹き飛んだ。

「自分の攻撃が跳ね返ってきただど!?」

エヴァはネギに威力を弱めた魔法の射手を放つが、結果自分がダメージを受けた。

「だが、こっちは二人いるのだ!最終的に勝つのは我々だ!」

ネギにダメージを与えれば自分が傷つくが、二人で攻めれば相手は二倍のダメージを負う。

そう考え攻撃を仕掛けるが、ネギは一向に怯まない。

それどころかさつきから動いてすらいない。

何かおかしい。

茶々丸に一旦離れるように命令を出そうとしたその時。

グルン

ネギの首が180°回り、茶々丸に抱きついた。

「逃げる!茶々丸!」

エヴァが叫んだときには既に遅く、ネギの体が爆発したのだ。

爆風を避けてエヴァは茶々丸に呼び掛ける。

「自爆だど!?茶々丸!返事をしろ!」

爆風の中から茶々丸が飛び出してきたが右腕が無い。

爆発の影響で吹き飛んだのだ。

「マスター、申し訳ありません。負傷してしまいました。」
「いや、構わん。それくらいならあとで超の奴に言えば直して貰える。」

それより奴はどうなった？
「エヴァは未だに止まぬ土煙を凝視する。」

「ネギ先生は体内に多量の爆発物を仕込んでいたようで内側から自爆していました。」

助かる見込みは0です。」

「自爆だと？あれがそんな殊勝な考えを持つ筈がなかるう。大方人形か何かだ。」

警戒を怠るなよ。」

「了解しました、マスター。それと・・・」

グサツ

茶々丸の失った筈の右腕がエヴァの腹を突き破っていた。

「な、何をする・・・！？ちゃ、ちやまる？」

「人形じゃなくて、分身です。」

茶々丸の姿が歪み、男の姿になる。

「貴様！？茶々丸はどうした！？」

エヴァは腹に開いた穴も気にせず叫ぶ。

「あそこで倒れているよ。」

ネギが指差したのは、爆発とは何の関係も無い場所に倒れている茶々丸の姿だった。

ブンッ

ネギが腕を振るい、エヴァを茶々丸の傍に投げ飛ばす。

エヴァは体を蝙蝠に変え、傷を修復しながらピクリともしない茶々丸の状態を見る。

「異常がない？」

茶々丸は傷一つなく倒れた状態で何処かが壊れたというわけでも無いようだった。

だからこそオカシイのだ。

「敵に後ろを見せて良いのか？」

後ろから聞こえた声に反応して振り返った瞬間、後頭部に強い衝撃が走った。

「またか!!!」

エヴァが見ていた茶々丸はまたしても偽物だった。

エヴァは二人から距離を取り、本物の茶々丸を探す。

偽物の後ろから本物の茶々丸が飛びだし蹴りあげる。

蹴りあげられた偽物は煙になって消えた。

確認の為念話を繋ぎ確認を取る。

「茶々丸か？」

「申し訳ありません、マスター。かなり遠くまで飛ばされています。」

「ふむ、このままでも良いが互いに大技を使えないのは面白みがない。」

「そうは思わんか？」

ネギは顎に手を当て考えるふりをしながらエヴァに問いかけた。

「ここまでやっておきながらまだ足りんか!？」

辺りの地面は穴だらけになり、建物の壁は幾つも崩れていた。

「上位の魔法使いは地形を変える程の力を揮える。この程度が闇の福音の本気なのか？」

嘲笑つかのようにネギが言いながら、右腕を上げ、左手を添えるかのように手首を掴む。

【封絶・鏡界？離】

ブチブチブチッ

何か引き裂かれる様な音を立て、世界が反転した。

何も逆にはなっていない筈なのに、何もかもが逆になった様な感覚をエヴァは感じた。

辺りの気配が一気に減り、静寂に満ちる。

人も、獣も、鳥も、虫も、生命の全てが消え去った様な静寂だ。

「この結界を展開すれば範囲内に居るある一定の条件を持つ者は全てこの結界内に強制的に放り込まれる。

今回指定した条件は闇の福音の名を知っている事。

つまりこの学園の魔法使いも侵入してくる陰陽術師も全てこの中、そして他の一般人は存在しない為この中でどれだけ暴れようとも傷つく事は無い。

どうだ？お前達『ご立派な魔法使い』にとってこれほど嬉しい事は無いだろう？」

「はっ！御大層な技を使うじゃないか？其処までしなければ私には勝てないのか？」

「フツ、お前の言う通りかもしれんな。

この際だから在庫一掃でもしようかと思っただね。

ここから先、同じ技は一つも使わんと約束しよう。」

「そんなことを言っただ丈夫なのか？後で吠え面を搔くなよ？」

そうは言いつつも内心エヴァは焦っていた。

既知の技なら対処は可能かもしれないが、全てが初めての物となる

と対処は難しい。

「ではまず一つ目だ。【千の雷】」

「馬鹿な！？グワアア！！」

エヴァが驚いたのも無理は無い。

どんなに凄腕の魔法使いでも詠唱を破棄すれば魔法の威力が下がり、始動キーは絶対に唱えなければならない。

それなのにネギはそのどちらも唱えずに辺り一面を根こそぎ掘り起こす様な威力の魔法を放ったのだ。

「き・さま、始動キーは、呪文は・どう・した。」

ハイ・エンシェント
上位古代語呪文魔法を直で喰らい、息も絶え絶えになりながらも尋ねる。

「ああ、あんな厨二臭いものなんかいちいち唱えてられるか。

魔法なんぞ出ればそれでいい。」

ネギは魔法を根底から覆すような事をさらっと言っ。

かろうじて避ける事の出来た茶々丸がネギの後ろからラッシュを掛けるが、

ネギの体は揺らぎもしない。

「先程から鬱陶しいな、鉄屑の分際で。鉄屑は鉄屑らしく、スクラ

ップになっっている！！」

パンツァークンストルツェアハオエン
【機甲術・周破衝拳】

パンツ

乾いた音を立て、茶々丸の上半身が粉々に弾けた。

「ちゃ、茶々丸ううううう！！！？？」

エヴァは信じられなかった。

この日の為に超に頼んで茶々丸の装甲を中級魔法を直撃しても傷一つ付かないように改良してある筈なのだ。
だというのに単なる掌底の一撃で粉砕されてしまった事を、その目で見たというのに信じられなかった。

それも無理は無い、ネギの放った技はサイボーグやアンドロイドの普及が進んだ世界の対サイボーグ用の特殊体術だったのだから。

エヴァは茶々丸の下半身が崩れ落ちる姿を見て、膝を着いた。

第23種禁忌 激化する闘争（後書き）

中途半端なところで終わってしまいました。
続きは早く出したいと思います。
ではまた今度ノシ

第24種禁忌 人と化物（前書き）

だいぶ遅くなってすみません（汗）

レポートや期末考査があったり、パソコンが壊れたりとあって大変遅れました。

やっと夏休みに入れたので投稿します。

今回は25話の大幅修正したものです。

又書き直すかもしれませんが、お付き合いください。

第24種禁忌 人と化物

（三人称視点）

「さて、前衛は消えた。後はお前だけだ。」

王者が君臨するかのようにネギはエヴァの前に立つ。

その手には視認できるほどの高密度の純粹な魔力が渦巻いている。

「何か言い残した事はあるか？」

「もう勝った気でいるのならお笑いな。」

私は吸血鬼、その程度では倒せんよ。」

エヴァは膝を着いたままネギを睨みつけ、言い放つ。

「貴様が吸血鬼だと？調子に乗るなよ・・・小娘！！」

ネギは手に持つ魔力を腕に取り込み強化された腕でエヴァの顔を殴り飛ばした。

エヴァの体は吹き飛ばされ、幾つもの建物の壁を壊して図書館島の前でやつとのことと止まった。

図書館等の前には魔法先生と魔法生徒が集まって侵入者の対応に追われていた。

其処にエヴァが飛んできて驚いている。

「大丈夫ですか！？エヴァンジェリン！誰にやられたのですか！？何が起きているんですか！！？」

神鳴流剣士の葛葉刀子が駆け寄り抱き起こす。

「逃げる・・・！奴が来る！！」

瞬間、周囲が高濃度の魔力に覆われた。

【魔法の射手・極彩の億矢】

辺りを見渡せば半球状に展開された様々な属性の魔法の射手が視界を埋め尽くすように展開されていた。

「っ?!」

「逃げ場など無いぞ、ガキ。貴様は私の誇りに触れた。体が人型のうちに死ねると思うな!」

「ま、待て!ここには関係のない者もいるんだ!」

ギリツ!!

ネギは歯を噛み砕かんばかりに噛み締め、憤怒に顔を歪めた。

「下らぬ・・・、こんな物を此処の連中は化け物と呼んでいたのか・・・!

「こんな・・・こんな人間ごときを!!」

ネギは手を振り、留めていた魔法の射手を放った。

瞬間、辺りから魔力が全て消え失せ、魔法の射手も空気へと帰って行った。

「広域魔力消失現象・・・成程、神楽坂アスナを従者にしたのか。」

神楽坂は大剣を盾にして魔法を防ぎ息巻いた。

「春日さんをあんなふうにしたあんたを私は許さない!」

そんな神楽坂を無視してネギはエヴァに話しかける。

「形質は大剣で固定、効果は魔法無効範囲の拡大、物理攻撃には見た目通りの効果しかない。

何か間違いはあるかな?」

「厭味な男だ。」

その何でも見透かしたような眼が気に食わんのだ!」

【魔法の射手・氷の111矢】

下から上へ滝のように降り注ぐがネギは避けようとも防ごうともせず立ち尽くしていた。

全てが命中し砕けた氷が濃霧の様に漂って

「ちょっと良いですか、エヴァンジェリン?」

葛葉刀子が氷霧を睨んでいたエヴァに話しかけた。

「五月蠅いぞ、なんの用だ?」

エヴァは鬱陶しそうに尋ねる。

「・・・あなたは誰と戦っているのですか?」

「なんだ?お前も見た事あるだろう?あいつはネギ・スプリングフィールドだ。」

「いえ、質問の仕方を間違えました・・・。あなたは何と《・・・》戦っているのですか?」

「何?」

その時一迅の風が吹き、ネギの姿が露になった。

腕が?げ、体の至る所が氷漬けになり、頭の半分が吹き飛ばされていたが、

それでもネギは唾っていた。

「久しぶりにこれほどまでの傷を負わされたよ。」

腐っても600万\$の賞金首と言ったところか。」

そう唾いながらネギは傷を修復していく。

欠けた所に闇が集まり傷口からは影が溢れだしてネギの姿は元に戻

つていく。

「やはり貴様も私と同じ吸血鬼か……。だからあれほどまでに吸血鬼であることに拘っていたのか。」

エヴァが自分の考えに納得しかけている所に否定の言葉が入った。

「い、いえ。違います。あれはあなたと同じなんかじゃない……

あんなものが他に居る筈がない!!!」

何かに脅えきった葛葉が口を挟んだ。

「ほう？流石は退魔を本職とする神鳴流だ。

我ら吸血鬼の本質に気がつくとは。」

「吸血鬼の本質だと？人の血を吸えばそれこそが吸血鬼だろう！」

「百歩譲つても『吸い殺せば』だ。血を吸うだけなぞ蚊でも出来る。

言つてやれ神鳴流、貴様の目には私がどう映る？」

葛葉は生唾を飲み込み、ポツリポツリと話し出した。

「通常人が殺されれば怨霊が発生します。

それはその場所に憑いたり、殺した得物に憑いたり、殺した人に憑いたりと様々です。

ですが彼に憑いている怨霊は多すぎます……。

あれで正気を保つていられる生物がいる筈がない。」

「「「!?!?」「」」

葛葉の言葉を聞いてネギは静かに話し出す。

声量こそ少ないが頭に直接響いてくるような声だった。

「自らの“業”^{カルマ}を取り込む事、それこそが真祖の成り方。」

“業”と聞いて皆が首を傾げている。

仏教の概念が何故ここで出てくるのかと。

「業」とは言ったが、その正体は自らが殺めてきたものの怨霊・亡霊だ。

真祖の吸血鬼は大抵が狂気に落ち、罪の有無に拘わらず人間を大量に虐殺してきた者が成る。

ワラキア公国の串刺し公“ヴラディシユラウス・ドラクリヤ”然り、フランスの青髭“ジル・ド・レイ然りだ。”

「ドラキュラ伯爵に怪人青髭、とんでも無い者の名が出てきたな・
」

「死期が近づき魂が死者の物に移り変わる寸前に怨鎖に塗れた亡霊共は声を掛けて契約を求める。

我らの同胞を集めよと、更なる屍を積み上げその腹を罪無き者の魂で満たせと。

そして吸血鬼になり血液を介して魂を取り込む術を知る。

“魂の蒐集家”それが吸血鬼だ・・・。」

沈黙がその場を満たす。

死の旋律が奔る。

全員が理解した。

眼前の物は本物の化け物なのだ。

「じゃあ、貴様は・・・。」

「だからこそ私は武器を売り、戦場を徘徊し屍山血河を積み上げた。まあ契約の代償として幾つか失ったものはあったが、取るに足らぬ些事にすぎん。」

「貴様は自分から人間を捨てたのか!!?」

「私にとって人であることに意味などは無い。」

「意味がないだど！？貴様自分が何をしたのか分かっているのか！
！？」

「分かっているのではないのはお前だエヴァンジェリン。
人と化け物との違いも分からんガキが吼えるんじゃない。
お前を見ていると哀れになってくる。」

「黙れ！私は600年の時を生きる化け物だ！
私を見下すんじゃない！！」

「化け物とは高度な倫理を持って、自らの意思で、人外の法理を用
いて人と言う種に敵対する者の事を指す。

悦楽で人を殺せぬお前は只の障害者だ。」

そこで言葉を切り、ネギは何かを考え込むように顎に手を当てた。

「それにしても600年生きてこの程度ならばその術を掛けた人間
は阿保か天才のどちらなのだろうな？

精神の成長はすれど変質を許さない。

術式の不備でも起こり得るが、

それを意図的に起こすには面倒な術式が必し「ドシユウツ！」

怒りに震えていたエヴァの耳に突如飛びこんできた水っぱい何かを
貫いた様な音、

吊られて振り返ってみれば其処には・・・

「神楽坂あああああ！！！！！！」

ネギ・スプリングフィールドに巨大な鍵で心臓を貫かれた神楽坂ア
スナの姿があった。

第24種禁忌 人と化物（後書き）

相も変わらずうちのネギ君は卑怯です。

敵もまさか自分でしゃべっている途中に仕掛けるとは思っていないでしょうからね。

あとpailsさん、帝々さん、遅くなりましたが返答ありがとうございます。

なるほど返信を書かなかったからだだったんですね。

自分のものぐさが祟ったのか（笑）

では以降なるべく返信するようにします。

返信は活動報告とこのあとがきのどちらが良いですかね？

第25種禁忌 安定のタカミチ（前書き）

お久しぶりです！

やっと書き終わりました！

不調だったWordもなおりやっと復活しました！
それではどうぞ！

第25種禁忌 安定のタカミチ

（高畑）

学園長に話を聞いてから脇目も降らずに現場に向かった。

現場につくと辺りから急速に魔力が消失していつていた。

体内の魔力は無事だが、体外に出した途端形をなさずに消えていつてしまう。

この感覚にはイヤというほど覚えがある。

アスナに胸に刺さっている物にも見覚えがあった。

広域魔力消失現象にグランドマスターキー。

今では廃都と化したオスティアで起きた忌まわしいあの事件に酷似している。

いや“再現されている。”と言ってもいい。

僕は急ぎ明日菜君の元へ駆け寄り、助け出そうとするがそれは曼荼羅のように展開された球状の呪術障壁によって阻まれた。

「馬鹿なっ！？この状況下でどうして術が使えるんだ！？」

「危ない！高畑先生！」

あり得ない現象に愕然としていると後ろから何かが飛んでくる。

危なげなくキャッチしてみるとそれは身体中に傷を負ったエヴァだった。

「離・せ、タカミ・チ。逃げる・・・」

息も絶え絶えに言うが、こんな状態のエヴァを放っておけるわけがなかった。
それでも尚、腕の中から抜け出そうともがくエヴァを抱えなおし、エヴァが飛んできた方角を睨みつける。

暗闇の中から現れたのは学園長からの報告通り、ネギ君だった。

初めは実力を隠し続けるネギ君の本気の戦闘力を計ろうとした学園長だったが、思った以上にエヴァが苦戦し、更にはネギ君は自分の生徒ですら殺す事を厭わない性質だった為、急遽学園長の名で戦闘中止命令を双方に出す筈だった。

それで止まらなかった時の抑止力として僕が派遣される予定だったのだが、此処まで一方的にエヴァがやられるとは僕も学園長も想定していなかった。

しかも最悪な事に、ネギ君はエヴァの従者として召喚された明日菜君を利用し、彼女の魔法無効化能力を暴走させて、広域魔力消失現象を展開していた。

これは最早一教師として処罰する程度では済まなくなってきた。このままではメガロ・メセンブリアが出張ってきてもおかしくない。

「おやおや？エヴァンジェリン、今日はやけに誰かに抱き抱えられているじゃないか。」

「そんなにママの抱っこが恋しいのかい？」

明らかな挑発だが、エヴァは耳も貸さず何かを探すように辺りを頻りに見回している。

「ネギ君。君は自分が何をしているのか判っているん？」後ろだ！タカミチ！！」

急に耳元で叫ばれ、驚きながらもエヴァに注意を払っていた僕は横になんとか回避する事が出来た。

「ネギ君が二人！？はっ、大丈夫かい！エヴァ！？足が千切れているじゃないか！！」

突然後ろから現れたもう一人のネギ君の攻撃を咄嗟に避けたが、エヴァの足に掠り脹脛の中ほどから吹き飛んでいた。

「私に構う暇は無いぞ、タカミチ。

あいつから気を逸らすな。

あいつの言葉にも耳を貸すな。

矛盾しているようだが頭に入れておけ。

あいつの言葉も行動も信用するな。

目に移る全てを疑え。

奴は詐欺師も真っ青の大嘘吐きだ。」

「そうみたいだね。

僕も学園長から少ししか聞いていないけど、これほど厄介な奴は「タカミチ！！」

三人目！？

くそっ！一体全体彼は何人居るんだ？

これは全部幻覚なのか？

「ネギ君！聞いてくれ！君とエヴァには学園長から停戦命令が出て

いる！！
今すぐに攻撃を中止してくれ！」

「ほうほう。それは大変だ今すぐ戦いを止めなければな、うん。
だがまだ外出禁止令を破ってお外に出ていたクソ餓鬼どもへの躰
が残っているので少々待ってもらえるかな？」

「今度は下だ！！」
エヴァの指示に従って下から迫る攻撃を跳んで避けたその時、

ズガン！

上空から銃撃が放たれ、その弾丸はエヴァの胸に吸い込まれた。

「大丈夫かい！？エヴァ！」

「あ、ああ。何ともない。」

弾丸の当たった後を見ると確かに其処には傷一つなかった。
確かに当たったと思ったんだが勘違いだったのか？

「如何に虚空瞬動が使えるとはいえ、意識していなければ咄嗟に避
ける事も適うまい」

あれほど執拗に死角から攻撃し続けたのは今の遠距離攻撃を意識か
ら外す為か。

「それと、敵の攻撃を傷がないからと言って問題が無いと思つのは
それこそ問題があるんじゃないか？」

瞬間、エヴァから濃密な魔力が溢れだし、僕は弾き飛ばされた。
次第に溢れた魔力が宙に凶形を描き出す。

魔力の余波で起こされた風に耐えながら僕はネギ君に向かって叫ぶ。

「ネギ君！君はエヴァに何をしたんだ！？」

ネギ君は笑みを浮かべたまま気絶しているエヴァを見詰め、何も答えない。

エヴァから出た魔力の図形が収束していき、幾つもの魔法陣を描いた。

巨大な魔法陣が二つとそれに付随するかのようにな小さな魔法陣が幾つか。

大きな魔法陣は、一つが基礎部分以外が所々捻じれていて余り綺麗とは言えないものと、とても丁寧に描かれていた物の二つだ。

そしてネギ君は未だ顎に手を当て、術式を観察していた。

「何故其処で【《イングワズ》】のルーンが？」

成程、二周目と三周目の速度を変えて回転させることで縦で文字の意味を揃えているのか。

やはりこれは現物が必要か・・・」

内容は分からないがエヴァの術式に関する考察のようだ。

ネギ君はそのままエヴァに手を翳した。

全ての魔法陣がより一層光を増し、エヴァから？がれ、ネギ君へ集まろうとする。

「あああああああああ！！」

エヴァが悲鳴を上げた。

小さな魔法陣から順に剥がれていくが、一つ？がれる毎に悲鳴が大

きくなる。

僕の足は縫いつけられたかの如くその場から動けず、他の人は先程の魔力放出のせいで近くには居ない。

動けないが何もできないというわけではないので、

ネギ君に声を掛け続ける。

「止めるんだネギ君！

何をしているのか分からないが兎に角それを止めるんだ！

これ以上は君の立場を悪くするぞ！！」

しかしネギ君は聞こえていないのか全く止める気配を見せない。

遂に小さな魔法陣が全てネギ君の手の上に集まり、残った二つの魔法陣が軋みながらも同時に剥がれていく。

そうして全ての魔法陣がネギ君に集まった。

ネギ君はそれを眺めて指を鳴らした。

するとエヴァからの魔力放出が止んで地面に落ち、明日菜君の胸に刺さっていたグランドマスターキーは光の粒になって消えていった。

ネギ君はそのままこちらを見ずに背を向けて帰って行った。

僕はエヴァに駆け寄り状態を確かめた。

呼吸と脈拍がある事を確認すると、エヴァを抱えてアスナ君の元へ行き、同じように確認をした。

「ふう。二人とも無事なようだね。一先ず学園長に応援を要請するか。」

そして学園長に連絡を入れようとした所でアスナ君とエヴァの服の

下に呪符が貼ってある事に気付いた。

急いで剥がそうとするが間に合わず、その呪符の効果が発動した。

パンツ！！

一瞬にして二人の服が弾け飛び、白い液体が飛び散った。
どうやら武装解除のようだ。

そして白い液体の方は、

「これは・・・ヤマトノリ？」

アスナ君の服のポケットに入っていた物のようだ。

何故このタイミングで発動したのか、何故彼女のポケットにヤマトノリが入っていたのか分からないが、

他にトラップが無いか確認する必要があるかな？

「高畑先生！」

後ろから声を掛けられる。

二人に気を取られている間に応援が来てくれていたようだ。

「しずな先生！速かったですね？」

「ええ、大・じょう・・・ぶ・・・」

しずな先生の顔が次第に怒りの形相に変わっていく。

辺りはこの惨状だ。魔法先生も数人倒れている。彼女が怒るのも仕方ない。

彼女は指が真っ白に成程拳を強く握っている。

そしてその拳が、

「こ・・・の・・・！弩変態がああああああ！！！」

真っ直ぐ僕に放たれた。

そして僕は意識を失った

第25種禁忌 安定のタカミチ（後書き）

今回でやっと吸血鬼編が終わりです。

次回からはまたギャグ多めの日常をお送りいたします！

レス返

paissさん

確かに最近はTSしている意味がなかったですね。

でも今後本編で女になった意味がわかるので待っていてください。

日常編でもそういう描写は増やしていく予定です。

あと学園長側の考えは今回の話に組み込んでみました。

hakiさん

確かにこの場面はミスでした。

指摘ありがとうございます。

紅茶ラテさん

楽しんでいただけってうれしいです。

取りあえず魔法世界編までは続ける気ですので待っていてください。

鯉クリームさん

応援ありがとうございます！

自分がarcadiaで感化されたモノは「ゴンザブrouさん」の「濁流のフェルナン」

というゼ口魔の二次です。

他にもいくつかありますが、自分が描きだした理由となった作品はこれです。

正直ゼ口魔のSSの中でこれが一番好きな作品です！

それではまた来週ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688t/>

狂科学者は常に迷子

2011年9月11日16時47分発行